

pon

kanpi sos

ポン カンピソシ



◆アイヌ文化紹介小冊子

総集編



1



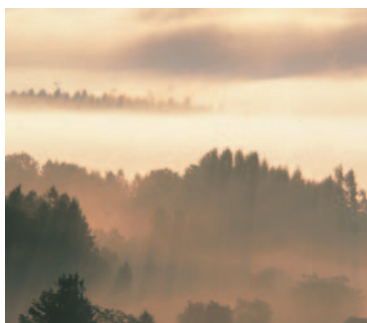
2



3



4



5



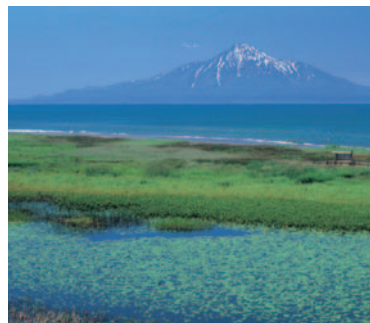
6



7



8



9

本書のねらい

北海道立アイヌ民族文化研究センターでは、国連が定めた「世界の先住民の国際10年」（1994年12月～2004年12月）への取り組みの一環として、1995（平成7）年度より10ヶ年の計画で、アイヌ文化を紹介する小冊子を毎年1冊ずつ刊行してきました。




これまでに発行した冊子のテーマと主な内容は、次のとおりです。

- 1「話す」（アイヌ語の文法のあらまし、簡単な単語や日常会話の紹介など）
- 2「着る」（アイヌの伝統的な衣服のあらまし、素材と製法など）
- 3「食べる」（アイヌの伝統的な食文化のあらまし、食料の調達、調理と保存の方法など）
- 4「住まい」（アイヌの伝統的な住まいのあらまし、家屋のつくりや使われ方など）
- 5「祈る」（アイヌの伝統的な信仰のあらまし、神に対する考え方、神と人間との関係、先祖に対する考え方など）

- 6「口頭文芸」(口頭で語られてきた物語について。
主な種類と物語の例など)
- 7「芸能」(歌と踊りについて。いろいろな歌・踊り
や楽器の紹介など)
- 8「民具」(伝統的な生活用具について。暮らしの場
面ごとの主な民具の紹介など)
- 9「地名」(アイヌ語に由来する地名について。いろ
いろな地名の例の紹介など)

10冊目に当たる今回は、これまでに発行した冊子の内容を1枚のCDにまとめました。アイヌの単語や会話、物語、歌謡、楽器のうちの一部については音声を聞けるようにしたほか、民具などに関する写真も追加しました*。また、それぞれのテーマについて学ぶことのできる図書や視聴覚資料のほか、博物館などの施設についても紹介しています。

*音声を聞ける部分や写真を追加したところでは、本文のその部分を青色の文字にしたり、「○○はこちら」といった案内文を付けてあります。

それぞれの頭の部分に  が付いているのは音声、 が付いているのは写真、 が付いているのは小冊子の関係するページにジャンプできることを示します。青色の文字の部分か、これらのマークの部分などをクリックすると、それぞれのデータやページに行くことができます。

目次

ボン カンピシ



1 アイヌ語



ボン カンピシ



2 イヌ 着る



ボン カンピシ



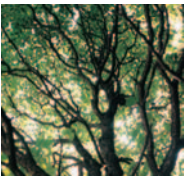
3 イベ 食べる



ボン カンピシ



4 イセ 住まい



1 はなす

[1] アイヌ語とは

(アイヌ語のなりたち／アイヌ語の歴史／アイヌ語の現状)

[2] アイヌ語を学ぶために

(アイヌ語の文字と表記／アイヌ語の読み書き ミニ知識／方言と地域／アイヌ語の文法／アイヌの口頭文芸)

[3] アイヌ語に親しむために

(単語と会話例／アイヌ語の地名)

- 北海道ウタリ協会が運営している「アイヌ語教室」一覧

2 着る

[1] アイヌの衣服のあらまし

(アイヌの衣服の歴史／アイヌの衣服のあらまし)

[2] 衣服の仕立て方と装身具

(衣服の仕立て方とたたみ方／文様を施す／装身具など)

3 食べる

[1] アイヌの食べ物

(どのようなものを食べてきたか／どのようにして食料を得たか)

[2] 調理と保存

(調理の方法／加工と保存／調味料について)

4 住まい

[1] アイヌの住まいの歴史

[2] 住まいのづくり

(住まいのあらまし／土地と方向／つくりとしつらい)

目次

ボン カンピソシ



5 アイヌの祈り



5 祈る

[1] アイヌの信仰のあらまし

(アイヌの信仰／様々なカムイ／カムイを送る／先祖に対する考え方)

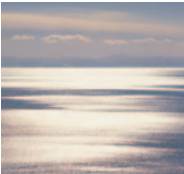
[2] いろいろな儀式

(カムイに祈ること／いろいろな祈りごと)

ボン カンピソシ



6 アイヌの口頭文芸



6 口頭文芸

[1] アイヌの口頭文芸のあらまし

(口頭文芸とは／歴史と現状)

[2] さまざまな口頭文芸

(英雄叙事詩／神謡／散文説話)

ボン カンピソシ



7 アイヌの芸能



7 芸能

[1] アイヌの芸能のあらまし

[2] 歌と踊りと楽器

(歌と踊り／楽器のいろいろ)

- 国の重要無形民俗文化財「アイヌ古式舞踊」の保持団体の指定を受けた保存会一覧

ボン カンピソシ



8 アイヌの民具



8 民具

[1] アイヌの民具のあらまし

[2] いろいろな民具

(身にまとう、身につける／家のうちそと／野や山で、海や川で)

目次

ボン カンピョシ



9

地名



ボン カンピョシ



10

アイヌ文化を学ぶために



9 地名

[1] アイヌ語地名とは

(北海道の地名とアイヌ語地名／アイヌ語地名の伝わり方)

[2] いろいろなアイヌ語地名

(地形などを表す地名／動物や植物に関係する地名／人々の暮らしに関わる地名)

10 アイヌ文化を学ぶために

[1] 図書と視聴覚資料

(アイヌ文化全般に関する入門書・概説書など／ことばと口頭文芸／歌と踊りと楽器／衣食住と暮らしの用具／信仰と儀礼／地名／歴史と現在)

[2] 施設

(博物館など／展示会・体験学習など)

- 追加写真 (小冊子1～9に新たに追加した写真)

*このCDの内容は、2005（平成17）年1月現在のデータに基づいています。「10 アイヌ文化を学ぶために」は、今後も2～3年ごとを目安に、情報を更新したものを作成する予定です。更新情報については、当センターのインターネットホームページをごらんください。また、小冊子1～9の記載事項に関する補足・訂正事項があった場合も、ホームページ上に正誤表のかたちで掲載いたしますので、最新の情報についてはこれらを確認してください。

*このCDに収録した音声資料については、一切の複製を禁じます。

*このCDの内容を他に転載するときは、当研究センターにご連絡ください。

pon

kanpi sos

ポン カンピソシ



1

◆アイヌ文化紹介小冊子

イタケ

はなす



本書のねらい

1994(平成6)年12月10日から、国際連合が採択した「世界の先住民の国際10年」が始まりました。

北海道立アイヌ民族文化研究センターでは、1995(平成7)年度より、「国際10年」への取り組みの一環として、アイヌ文化について紹介するパンフレットを刊行することにいたしました。

1冊目は、まずアイヌ語を取り上げ、文法のあらましや簡単な日常会話の紹介をはじめ、アイヌ語地名、現代の伝承、復興までの動きなどにも触れています。

小さなパンフレットですが、アイヌ文化の理解を深めていただくとともに、アイヌ文化に関心を持たれた方々の手引きになれば幸いです。

ポン カンピ ソシ
pon kanpi sos → 小冊子
小さい 紙 束

イタク → 話す、言葉
itak

目次

[1] アイヌ語とは	
アイヌ語の成り立ち	2
アイヌ語の歴史	3
アイヌ語の現状	4
[2] アイヌ語を学ぶために	
アイヌ語の文字と表記	6
方言と地域	10
アイヌ語の文法	12
[3] アイヌ語に親しむために	
単語と会話例	14
アイヌの口頭文芸	22
アイヌ語の地名	22
● アイヌ語教室	22

[1] アイヌ語とは

アイヌ語の成り立ち

アイヌ語はどのようにして成り立ったのでしょうか。アイヌ語と日本語とは、どのような関係があるのでしょうか。

アイヌ語と日本語とが、もとは同じ言葉だったという人もいます。しかし今のところ、きちんとしたアイヌ語の知識と研究方法に基づいて、十分な根拠を示している説はありません。「カムイ」と「神」のように似た言葉も多少ありますが、それらは借用語かもしれません。またアイヌ語だけでなく、その周辺の言語である日本語、朝鮮語(韓国語)、サハリンのニブフ語などの言語も、その成り立ちがわかっていません。アイヌ語の成り立ちは、日本語と同じように、まだ未解決のままといえます。

The History of the Ainu Language:

Like many other languages of the Far East region, such as Japanese, Korean and Nivkh of Sakhalin, the origin of the Ainu language is unknown.

Since the Meiji era, due to the Japanese assimilation policy toward the Ainu, the Ainu language had been used less and less for everyday communication. However, during this period, some Ainu people have made an effort to record both what they have heard from others and their own knowledge of the Ainu language and oral tradition.

Since 1970', Ainu language classes have taken place in the form of small study groups. At present, Ainu language lessons are held at 12 sites in Hokkaido, and they are operated by the Ainu Association of Hokkaido. A text book, Akor itak, was published in 1994 and is being used at these lessons.

アイヌ語の歴史

明治時代以降、日本語による教育をはじめとするアイヌ民族の同化政策が押し進められ、アイヌ語は日常生活から急速に姿を消していきました。大人のアイヌの集まりなどでは、自然にアイヌ語が口をついて出ましたが、子どもたちには、その将来を考えて、アイヌ語より日本語を身に付けさせようとする親が多かったといえます。

その結果しだいに、アイヌ語は「滅びゆく言葉」とみなされるようになりました。

日本においてアイヌ語研究の基礎を築いたといわれる金田一京助さんや久保寺逸彦さんなども、基本的にはこのような認識を越えることはありませんでした。

しかし、こうした時代の中でも自らペンをとってアイヌ語の記録を残しているアイヌの人たちがいます。登別市幌別出身の知里幸恵さんは『アイヌ神謡集』(1923)を世に送り出しています。幸恵さんのおばの金成マツさんは、膨大なユーカラ（ユカラ）筆録ノートを残しています。また、弟である知里真志保さんは、北海道大学で教鞭をとりながら、アイヌ語を言語学的に研究し、『アイヌ語法概説』など、数々の著作を残しましたが、大著『分類アイヌ語辞典』の執筆中に早世しています。

そのほか、門別町の鍋沢元蔵さん、静内町の佐々木太郎さん、白糠町の貫塩喜蔵さんなどは、自らのアイヌ語知識や、周囲の伝承を記録することに情熱をそそぎました。

このような人たちの取り組みが、次代の新しい流れの基礎となっています。

アイヌ語の現状

近年、アイヌ語を取りまく状況は大きく変化しました。アイヌ民族のさまざまな動きが同化主義の枠を超えて展開するようになる中で、その伝統文化にあらためて関心が寄せられ、アイヌ語の継承や復興が唱えられるようになったのです。

1970年代に入ると、北海道内の何か所かで、アイヌ自身によるアイヌ語学習会が開かれるようになりました。その後、北海道ウタリ協会によるアイヌ語学習会が開催されたり、平取町二風谷の萱野茂さんが、子どもたちを対象にしたアイヌ語塾を開設するなど、新しい活動も始まりました。また、道内ばかりでなく、道外にもアイヌ語を学ぼうとする人たちが出てきました。このほか、静内町の葛野辰次郎さんは、アイヌ自身が祖先の言葉を学ぶことを第一の目的に編集された『キムスポ』を書きました。さらに、静内町の織田ステノさんや鶴居村の八重九郎さんが語った口承文芸の記録の刊行がすすんでいます。

1987(昭和62)年には、北海道ウタリ協会が主催するアイヌ語教室がスタートし、現



千歳アイヌ語教室のアイヌ語劇練習風景



キムスポ

在(2005年3月)、全道14か所でアイヌ語教室が開講されています。1994(平成6)年には、アイヌ語教室共通のテキストとして『アコロ イタク』が刊行されました。そのほか、教材や辞書なども増え、アイヌ語に興味を持ち、学ぶ人たちが多くなってきています。

アイヌ語についての記録と辞典

アイヌ語についての文献上の最初の記録は、1621（元和7）年に松前に渡ったイタリアのイエズス会の宣教師アンジェリスによるものとされています。彼がローマ法王のもとに送った報告書に、54語のアイヌ語が含まれています。また1643（寛永20）年には、オランダ人のフリースが、樺太と北海道に寄港してアイヌ語の記録を残しています。

18世紀には、ロシアのクラシェニンニコフによる北千島アイヌ語の語彙集（285語）、フランスのラ・ベルズによる樺太での記録（160語）、日本で最初のまとまったアイヌ語彙集『もしほ草』（上原熊次郎、約2,700語）などが知られています。

1875（明治8）年に出版されたドブロトヴォルスキーによる『アイヌ語 — ロシア語辞典』は、『もしほ草』などのそれまでに刊行されたさまざまな資料をまとめ、さらに彼自身が樺太で集めた項目を加えて編集されたもので、見出し語は1万語を越えています。

1938（昭和13）年には、北海道で布教活動をしていた聖公会のイギリス人パチェラーが『アイヌ・英・和辞典』の第4版を刊行しました。この辞書は項目数約2万におよび、日本語訳の誤りなどいろいろな問題が指摘されながらも、今もなおアイヌ語の研究には欠かせない文献の一つになっています。

ここ数年、あらたな調査や研究の成果に基づくアイヌ語辞典の刊行が始まり、アイヌ語の学習・研究の状況はこの点でも大きく変わりつつあります。

もしほ草



アイヌ・英・和辞典

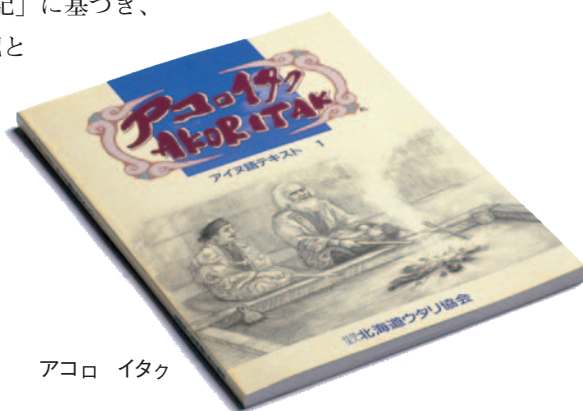


[2] アイヌ語を学ぶために

アイヌ語の文字と表記

アイヌ語は、特定の文字で表記する方法が定まっていません。そのため、「アイヌ語には文字がない」といわれることも多いようです。しかし、大正時代のころからは、アイヌ自身がローマ字やひらがな、カタカナなどを用いてアイヌ語を書き残しています。

アイヌ語教科書の『アコロ イタク』に採用されているローマ字表記は、「簡易音素表記」と呼ばれているものです。この表記は、アイヌ語の発音を書き表す工夫をしたカタカナ表記とともに、各地のアイヌ語教室や研究者に広く使われるようになってきています。ここでは、「簡易音素表記」に基づき、アイヌ語のカタカナ・ローマ字表記と発音の特徴について解説します。



アコロ イタク

Language Characteristics:

Today, Japanese Katakana and Roman letters have been adapted for writing the Ainu language. The tradition of putting the Ainu language written form started recently.

It is said the Ainu language was spoken as an everyday language in Hokkaido, Sakhalin, the Kuril Islands and the northern part of the Tohoku district (northeast Japan).

There is little information concerning the dialect which was spoken in the northern part of Tohoku and its words and grammar are unknown. Only about 1000 words of northern Kuril Islands have been recorded.

The dialects of Hokkaido and the Sakhalin are quite different in terms of pronunciation and words. There are also differences between the grammar and words in each region in Hokkaido.

●カタカナ表記とローマ字の簡易音素表記

*母音で終わる音

ア	a	イ	i	ウ	u	エ	e	オ	o
カ	ka	キ	ki	ク	ku	ケ	ke	コ	ko
サ	sa	シ	si	ス	su	セ	se	ソ	so
タ	ta			トゥ	tu	テ	te	ト	to
チャ	ca	チ	ci	チュ	cu	チェ	ce	チョ	co
ナ	na	ニ	ni	ヌ	nu	ネ	ne	ノ	no
ハ	ha	ヒ	hi	フ	hu	ヘ	he	ホ	ho
パ	pa	ピ	pi	プ	pu	ペ	pe	ポ	po
マ	ma	ミ	mi	ム	mu	メ	me	モ	mo
ヤ	ya			ユ	yu	イエ	ye	ヨ	yo
ラ	ra	リ	ri	ル	ru	レ	re	ロ	ro
ワ	wa					ウェ	we	ウォ	wo

*後ろに母音が続かない音

プ	p	ツ	t	ク	k	ム	m	ン	n
シ	s	-ラ, -リ, -ル, -レ, -ロ	r	イ	-y	ウ	-w		

— ' (音を出さない区切りの印)

アイヌ語の読み書き ■ ミニ知識 ■

①清音と濁音は、たとえば「カ ka」と「ガ ga」や「タ ta」と「ダ da」などの区別はなく、どちらで発音しても同じ意味になります。また後ろに母音が続かない「s」は「シ」のように聞こえることも「ス」のように聞こえることもあります。また「チュ cu」や「トゥ tu」も「ツ」のように聞こえることがあります。

ただし、このパンフレットでは、辞書などが引きやすいように、「ペ」と「ベ」、「トゥ」と「ツ」などについて、カタカナ表記・ローマ字表記ともに「ペ・pe」「ト・tu」のように統一してあります。

②アイヌ語は、母音の有無を区別しなければ意味が明確になりません。

[例 1]

ケレ	ker	靴
ケレ	kere	～に触る

エトロ	etor	鼻水
エトロ	etoro	いびきをかく

アシ	as	立つ
アシ	asi	～を立てる

キサラ	kisar	耳
キサラ	kisara	その耳

③後ろに母音が続かない「-r」のカタカナ表記は、その直前にある母音（ア a、イ i、ウ u、エ e、オ o）に引かれた形で、ar「アラ」、ir「イリ」、ur「ウル」、er「エレ」、or「オロ」と小文字を用います。

④トゥ tu の読み方は、「トゥナイト」の「トゥ」と同じような発音です。

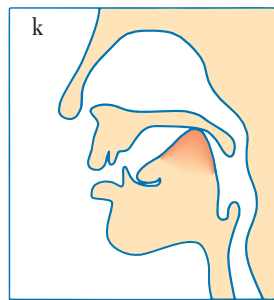
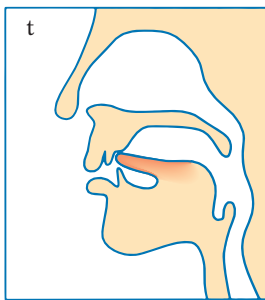
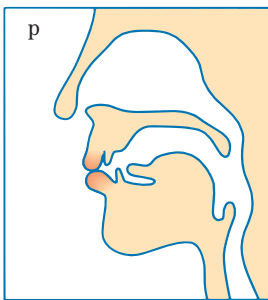
⑤イエ ye の読み方は、「イェスタデイ」の「イェ」と同じような発音です。

⑥ウェ we の読み方は、「ウェールズ」の「ウェ」と同じような発音です。

- ⑦ ウォ wo の読み方は、「ウォークマン」の「ウォ」と同じような発音です。
- ⑧ イ i, y と ウ u, w の場合は、それぞれ母音と子音の違いがありますが、カタカナ表記では区別していません。
- ⑨ 例2の単語は、日本語を聞き慣れた人の耳では、どれも「ッ」と聞こえやすい音ですが、実際に発声すると、口の形が違うのがわかるでしょう。

[例2]

	カタカナ 表記	ローマ字 表記	意味	口の形
p	サッ	sap	前に出る	「サッポロ」の「ポロ」を言わない発声です。
t	サッ	sat	乾く	「サッと」の「と」を言わない発声です。
k	サク	sak	夏	「サッカー」の「カー」を言わない発声です。



〈くちびると舌の動き〉

方言と地域

アイヌ語は、おおまかに北海道・樺太・北千島・東北北部の4つの地域の方言に分かれると考えられています。そのうち、東北地方の北部で話されていたはずの方言は、ほとんど資料がないままに、単語や文法がわからなくなってしまいました。また千島列島の北の方で話されていた方言についても、1,000語ほどの単語の記録しか残されていません。

北海道と樺太の方言とでは、発音や単語などがかなり異なっています。道内でも、地域によって単語や文法などに多少の違いがあります。しかし青森から鹿児島までの日本語の方言の違いに比べて、道内のアイヌ語の方言の違いは、それほど大きくありません。

北海道の方言を、西南部の方言グループと東北部の方言グループなどと大きく分類することもできます。また、同じ北海道の中でも宗谷地方の言葉は、樺太の方言に近いと言われています。

	千歳市（西南部）		本別町（東部）		ライチシカ（樺太）	
おじいさん	エカシ	ekasi	エカシ	ekasi	ヘンケ	henke
大きい	ポロ	poro	ポロ	poro	ポロ	poro
鹿	ユク	yuk	ユク	yuk	ユフ	yuh
おばあさん	フチ	huci	フチ	huci	アハチ	ahci
～と一緒に	トゥラ	tura	トゥラ	tura	トゥラ	tura
どこから	フナクワ	hunak wa	オノン	onon	ナハワ	nah wa
～を運ぶ	ルラ	rura	ルラ	rura	ルーラ	ruura

日本語では、東京の山の手の方言をもとにして標準語がつくられ、教育やマスコミなどで広められてきました。しかし、アイヌ語には現在のところそうした標準語のようなものはありません。アイヌ語教科書『アコロ イタッ』も、北海道内のさまざまな方言の学習のために利用できるようになっています。このパンフレットでは、特に断らないかぎり、十勝地方の本別町で話されている方言に基づいて説明しています。

アイヌ語の文法

文の中の単語の順番だけを見ると、アイヌ語は日本語とよく似ています。たとえば、前のページの単語を使って下のように作文することができます。このような語順を持った言語は世界にたくさんあります。

エカシ	ポロ	ユク	フチ	トゥラ	オノン	ルラ?
ekasi	poro	yuk	huci	tura	onon	rura?
おじいさんは	大きな	鹿を	おばあさん	といっしょに	どこから	運んだの?
主語	修飾語	被修飾語	名詞	助詞	副詞	述語
目的語						

アイヌ語の文法が、日本語と大きく異なっている点もあります。まず、アイヌ語では、ある動作が話し手や聞き手などのうち、誰によって行われるのか（人称の区別）を、英語などと同じように必ず表示しなければなりません。「歩く」という動詞に「私が」「私たちが」「君が」「君たちが」などの人称接辞がついた形を見てみましょう。

クアツカシ ku=apkas 「私が歩く」 アツカシアシ apkas=as 「私たちが歩く」
エアツカシ e=apkas 「君が歩く」 エチアツカシ eci=apkas 「君たちが歩く」

さらに、「～で」「～に」というような日本語の助詞にあたるものが、動詞本体の前に添えられることもあります。たとえば、アツカシ apkas「歩く」の前にコ ko「～に」を添えて、次のような言い方もできます。

エカシ クコアツカシ 「おじいさんのところへ私が歩いていく」
ekasi ku=koapkas
おじいさん 私が・～のところへ歩いていく

否定を表す言葉（「～しない」「～するな」）も、日本語とは逆に、動詞の前に置かれます。

ソモ クアアカシ 「私は歩かない」

somo ku=apkas

～しない 私が・歩く

イテッケ アアカシ 「歩くな」

itekke apkas

～するな 歩け



[3] アイヌ語に親しむために

単語と会話例

それでは、実際にアイヌ語の単語と会話に、少し触れてみましょう。

● 身体を表わす単語と会話例

パケ	pake	「頭」 <i>head</i>	オトプ	otop	「髪の毛」 <i>hair</i>
ナン	nan	「顔」 <i>face</i>	ランヌマ	rannuma	「眉毛」 <i>eyebrow</i>
シク	sik	「目」 <i>eye</i>	エトゥ	etu	「鼻」 <i>nose</i>
チャラ	car	「口」 <i>mouth</i>	パルンペ	parunpe	「舌」 <i>tongue</i>
イマク	imak	「歯」 <i>tooth</i>	キサラ	kisar	「耳」 <i>ear</i>
クケウ	kukew	「肩」 <i>shoulder</i>	シットツケウ	sittokkew	「ひじ」 <i>elbow</i>
テク	tek	「手」 <i>hand</i>	アシケペツ	askepet	「指」 <i>finger</i>
ネトパケ	netopake	「胴」 <i>trunk</i>	ペンラム	penram	「胸」 <i>breast</i>
ホン	hon	「腹」 <i>abdomen</i>	オソロ	osor	「尻」 <i>buttocks</i>
ハンカプイ	hankapuy	「へそ」 <i>navel</i>	セトウル	setur	「背中」 <i>back</i>
イッケウ	ikkew	「腰」 <i>waist</i>	チキリ	cikir	「足」 <i>leg</i>
コッカパケ	kokkapake	「ひざ」 <i>knee</i>	ケスプ	kesup	「かかと」 <i>heel</i>



クホニ アラカ フムアン
 ku=honi arka hum an.
 (僕は) おなかが 痛いよ。

チッ シケレペニ アポプテ ワ ク チッ ポンノ カイ ラッチ ナンコロ
 cik sikerpe ni a=popte wa ku cik ponno kay ratci nankor.
 それなら、シコロの木を 煮 て 飲むと 少し (でも) おさまる よ。

クセトゥルフ マヤイケ クス キキ ワ エンコレ
 ku=seturuhu mayayke kus kiki wa en=kore.
 (私の) 背中が かゆい から、かいて ください。

エ
 e.
 はい。

イヤイライケレ
 iyayraykere.
 ありがとう。

● 親族を表わす単語と会話例

◆ 意味

フチ	huci	「おばあさん」 <i>grandmother</i>
エカシ	ekasi	「おじいさん」 <i>grandfather</i>
ハポ	hapo	「母」 <i>mother</i>
ミチ	mici	「父」 <i>father</i>
ウナラペ	unarpe	「おばさん」 <i>aunt</i>
アチャ	aca	「おじさん」 <i>uncle</i>
サ	sa	「姉」 <i>elder sister</i>
ユブ	yup	「兄」 <i>elder brother</i>
マタク	matak	「姉から見た妹」 <i>younger sister</i>
トゥレシ	tures	「兄から見た妹」 <i>younger sister</i>
アク	ak	「弟」 <i>younger brother</i>
エカチ	ekaci	「子ども」 <i>child</i>
マツカラク	matkarku	「姪」 <i>niece</i>
カラク	karku	「甥」 <i>nephew</i>

◆ 「私の～」という言い方

クコロ	フチ ku=kor huci	「私のおばあさん」 <i>my grandmother</i>
クコロ	エカシ ku=kor ekasi	「私のおじいさん」 <i>my grandfather</i>
クハポ	ku=hapo	「私のおかあさん」 <i>my mother</i>
クミチ	ku=mici	「私のおとうさん」 <i>my father</i>
クコンナラペ	ku=kor unarpe	「私のおばさん」 <i>my aunt</i>
クコラチャ	ku=kor aca	「私のおじさん」 <i>my uncle</i>
クサポ	ku=sapo	「私のおねえさん」 <i>my elder sister</i>
クユビ	ku=yupi	「私のおにいさん」 <i>my elder brother</i>
クマタキ	ku=mataki	「私の妹」 <i>my younger sister</i>
クトウレシ	ku=turesi	「私の妹」 <i>my younger sister</i>
クアキ	ku=aki	「私の弟」 <i>my younger brother</i>
クコロ	エカチ ku=kor ekaci	「私の子ども」 <i>my child</i>
クマツカラク	ku=matkarku	「私の姪」 <i>my niece</i>
クカラク	ku=karku	「私の甥」 <i>my nephew</i>

トオカイ ウタラ ネン タテ オカイ ヤ?
tookay utar nen tap okay ya?
あちらの 方々は どなた です か?

オノン アラキアン ル タパナ?
onon arki=an ru tap an a?
どちらから (あなた(たち)は) いらっしゃい ましたか? (ていねいな言い方)

オノン エエッ ル タパナ?
onon e=ek ru tap an a?
どこから 来た の? (一般的な言い方)

エノン エオマン テク エエッ ル タパナ?
enon e=oman tek e=ek ru tap an a?
どこへ (あなたは) 行って 来た の?

エミチヒ エノン オマナ?
e=michi enon oman a?
(あなたの) お父さんは どこへ 行ったの?

エハポホ イネ?
e=hapoho ine?
(あなたの) お母さんは どこ?

タント アナク チセ コロエカシ オアッサム ル ヘ?
tanto anak cise kor ekasi oassam ru he?
今日 は 家のおじいさんは いない のかい?

イルカイ エノン カイ オマナ ル エシタテアン ネ
irukay enon kay oman a ru estap an ne.
ちょっと どこかへ 行って います。

リンゴ クエ ルスイ クス クウク ヤッカイ ピリカ ヤ?
RINGO ku=e rusuy kus ku=uk yakkay pirka ya?
(私は) リンゴ が食べ たい から、とって も いい?

リンゴ エエ ルスイ ルへ?
RINGO e=e rusuy ru he?
(あなたは) リンゴ が食べ たい の?

リンゴ エエ ルスイ チク ウク。 オシ ネッ エエ ルスイ?
RINGO e=e rusuy cik uk. os nep e=e rusuy?
リンゴ が食べ たい なら 取りなさい。次に(あなたは) 何が 食べ たいの?

エイコシテック イペ ケラアン ワ クエ カシパテック クホニ シク。
eikostek ipe keraan wa ku=e kasper tek ku=honi sik.
あまりにも 食べ物 が おいしく て 食べ すぎたので (私は) お腹 が いっぱい。

クアニ ウサ クホニ シク。
kuani usa ku=honi sik.
私 も お腹 が いっぱい。

エスイパ ル へ?
e=esuypa ru he?
(あなたは) 眠い のかい?

クスイパ フム アン。
ku=esuypa hum an.
(私は) 眠い んだ。

チク エタク ホッケ。
cik etak hotke.
それなら 早く 寝なさい。

● 数を表わす単語

1	sinep	シネペ	1人	sinen	シネン
2	tup	トゥプ	2人	tun	トゥン
3	rep	レプ	3人	ren	レン
4	inep	イネペ	4人	inen	イネン
5	asiknep	アシクネペ	5人	asiknen	アシクネン
6	iwanpe	イワンペ	6人	iwaniw	イワニウ
7	arwanpe	アヲワンペ	7人	arwaniw	アヲワニウ
8	tupesanepe	トゥペサンペ	8人	tupesaniw	トゥペサニウ
9	sinepesanpe	シネペサンペ	9人	sinepesaniw	シネペサニウ
10	wanpe	ワンペ	10人	waniw	ワニウ

● その他よく使われる単語と会話例

タント	tanto	「今日」 <i>today</i>	タヌ克蘭	tanukuran	「今夜」 <i>tonight</i>
ヌマン	numan	「昨日」 <i>yesterday</i>	ウ克蘭	ukuran	「夕べ」 <i>evening</i>
ホシカヌマン	hoskanuman	「おととい」 <i>the day before yesterday</i>	ニサッタ	nisatta	「明日」 <i>tomorrow</i>
ト	to	「日」 <i>day</i>	パ	pa	「年」 <i>year</i>
チュプ	cup	「月」 <i>month</i>	クンナノ	kunnano	「朝」 <i>morning</i>
トケシ	tokes	「昼」 <i>noon</i>	オヌマン	onuman	「晩」 <i>night</i>
パイカラ	paykar	「春」 <i>spring</i>	サク	sak	「夏」 <i>summer</i>
チュク	cuk	「秋」 <i>autumn</i>	マタ	mata	「冬」 <i>winter</i>

ルヤンペ	ruyanpe	「雨」 <i>rain</i>	ルヤンペ	レイ	ruyanpe ruy 「雨がふる」
ウパシ	upas	「雪」 <i>snow</i>	ウパシ	レイ	upas ruy 「雪が降る」
レラ	rera	「風」 <i>wind</i>	レラ	レイ レラ ユツケ	rera ruy 「風が吹く」 rera yupke 「風が強い」
シリピリカ	sirpirka	「天気が良い」			
シリウエン	sirwen	「天気が悪い」			
ウララ	urar	「霧」 <i>fog</i>			
タシコロ	taskor	「霜」 <i>frost</i>			

タヌクラン ノチウ ロシキル ピリカ クス ニサッタ シリピリカ ナンコロ。
tanukuran nociw roski ru pirka kus nisatta sirpirka nankor.
今夜は 星が きれいに 見える ので 明日は 天気がよい だろう。



*ノチウ ロシキ ル ピリカの逐語訳は、「星・立つ・様子・良い」になります。

*この会話例は、本別町に住む沢井トメノさんからお聞きしたものです。

● **協力** 〈敬称略〉

・ 葛野辰次郎　　沢井トメノ　　切替英雄　　千歳アイヌ語教室　　静内町アイヌ民俗資料館



この小冊子は、環境に配慮した用紙を使用しています。
古紙配合率100%・白色度70%

◆発行—平成8年3月（増刷 平成15年3月）

◆編集—北海道立アイヌ民族文化研究センター
HOKKAIDO AINU CULTURE RESEARCH CENTER
〒060 札幌市中央区北1条西7丁目 プレスト1・7 5階
TEL.011-272-8801 FAX.011-272-8850

<http://www.pref.hokkaido.jp/kseikatu/ks-ambkc/hacrc/hp/index.htm>



pon

kanpi-sos

ポン カンピソシ



2

◆アイヌ文化紹介小冊子

イ

着る



本書のねらい

北海道立アイヌ民族文化研究センターでは、国連の定めた「世界の先住民の国際10年」への取り組みの一環として、アイヌ文化を紹介する小冊子を毎年1冊ずつ刊行しております。昨年度の1冊目では「イタク 話す」と題してアイヌ語について紹介しました。

この2冊目では、衣服をとりあげました。伝統的な衣服のあらましや衣服の素材、製法などを写真を交えて説明するとともに、装飾品や独特の文様、衣服を鑑賞したり衣服について学んだりできる施設などについて紹介しています。

この小冊子が、アイヌ文化についての理解を深めるきっかけになれば幸いです。

ポン カンピ ソシ
pon kanpi-sos → 小冊子
小さい 紙 束

イミ → 着物を着る
imi

目次

[1] アイヌの衣服のあらまし	2
1 アイヌの衣服の歴史	2
2 アイヌの衣服のあらまし	6
[2] 衣服の仕立て方と装身具	22
1 衣服の仕立て方とたたみ方	22
2 文様を施す	25
3 装身具など	26

[1] アイヌの衣服のあらし

1 アイヌの衣服の歴史

アイヌ民族がかつて着ていた衣服について、どれぐらい昔までさかのぼって調べることができるでしょうか。

今のところわかっているのは、400年くらい昔の文献の記録です。それより古い時期については、文様の起源などに関していろいろな説が唱えられていますが、形が似ているなどのこと以上に十分な根拠を示しているものはまだ見られません。実際に残っている衣服は、ほぼ19世紀以後のものになります。

周囲の他の民族と同様に、アイヌの衣生活も19世紀後半から20世紀にかけて大きく変化し、しだいに和服、洋服を着ることが増えました。様々な伝統的な儀式のときなどには独特の晴れ着で正装しましたが、それも、同化主義のもとでアイヌの伝統文化が否定される風潮が強まり、着る人も着る機会もしだいに減少しました。

そうした中でも、親しい人だけの集まりでは晴れ着を着たり、プレゼントやお土産として製作したり、先祖たちから伝えられた着物を大切に家に残しておいたり、といったことはあちこちで行われてきました。

General Introduction to Ainu's Clothing

How far back can we trace the study of clothing which the Ainu peoples used to wear? The extent of reliable records found in the literature is limited to the documents written some 400 years ago. As for the styles of clothing earlier than this period, many assumptions have been raised in regards to the origin of the design patterns which are yet to be fully proven except for the similarities of the design. Clothes which remain today were made only after the 19 century.

As is the case in other ethnic groups in surrounding areas, drastic changes were introduced to their clothing styles from the late 19th to the 20th centuries and consequently Japanese and western clothing have gradually become a major part of their daily wear. Although their unique ceremonial clothes were worn at traditional rituals of various sorts, the number of people and occasions to wear them have decreased under the growing assimilation, and at times a denial of tradition.

現在のアイヌの衣生活の中心になっているのは洋服や和服などです。ふだんの生活の中で民族独特の衣服を着ることはありません。一方、近年様々な分野でアイヌの伝統文化の見直しや復興が進むなか、儀式に参加するときや、歌や踊りを披露するときなどに晴れ着を着たり、そのための衣服を作ったりすることが増えてきました。伝統的な衣服の作り方をあらためて調べ学んだり、そのデザインを現代の衣服や装飾品などに活かすことも試みられるようになりました。衣服の作り方や刺しゅうの講習会、製作品のコンクール、展覧会なども行われています。



写真1 北海道アイヌ伝統工芸展

Despite the changes surrounding their culture, they continued to wear their own ceremonial clothes at gatherings among families and friends, making traditional clothes as a gift or a souvenir. Traditional clothing was given from forefathers as a family treasure.

Today, western and Japanese clothes are dominant in Ainu peoples' daily life. However, in line with the growing recognition and restoration movement of Ainu's traditional culture in various aspects in recent years, they increasingly wear their own ceremonial clothes at rituals and artistic performances of song and dance which creates a growing demand for a greater production of their traditional clothes. As part of this effort for restoration of their traditional clothes, traditional dress-making methods are studied more systematically, while application of the traditional designs in contemporary clothing and ornaments is sought after. Workshops for traditional Ainu dress-making and embroidery are offered as well as various competitions and exhibitions of their handicrafts.

アイヌの衣服についての昔の記録

アイヌの衣服に関する最初の記録は、イタリアの宣教師アンジェリスによるものとされています。1621年に松前に行ったときの報告の中で、そこで見たアイヌの人たちの様子を書いています。オランダ人フリースは、1643年に北海道の東海岸から国後島、サハリン(樺太)へと航海をした記録の中で、それぞれの地域で見たアイヌの人たちの様子を書いています。新井白石の『蝦夷志』(1720年)や、シャクシャインの戦い(17世紀後半)に関する津軽藩の記録を含んでいる『津軽一統志』(1731年)などにも、当時のアイヌの衣服の様子が書かれています。

1800年代に描かれた秦 億 磨『蝦夷島奇観』『蝦夷生計図説』などは、当時の衣服やその作り方、着るときのきまりなどに関する詳しい記録や図画を残しています。



蝦夷島奇観 (複製版)

これらの記録は、現物が残っていないものや今日では知られていない技術を知ることのできる重要な資料でもあります。他方で、こうした記録には、自分で観察しないで伝聞によって書いたものや、観察する側の思い込みで書いたものなどがあり、そのまま鵜呑みにはできないことがあります。例えば江戸時代の日本で描かれた絵画ではアイヌの人たちがみな左前で服を着ているようになっているものがあります。左前というのは昔の中国で野蛮な風俗とされたものです。実際には左右のどちらを前にすることもあれば、体の前で合わせる衣服もあったのですが、アイヌ民族の風俗を「野蛮」なものだとする偏見がもとになって、こうした描かれ方になってしまったものです。



蝦夷生計圖説（復刻版）

2 アイヌの衣服のあらまし

アイヌ衣服のあらまし

アイヌの衣服には、素材や文様の付け方などによって様々な種類があり、地域ごとにも特徴があります。

同じような衣服でも、地域によってアイヌ語の呼び方が違うことがあります。文献や各地の博物館の展示の説明でも、ある地域のアイヌ語の呼び方を用いたり、「もめんじくろきれおきもんい木綿地黒裂置文衣」(木綿地に黒い布をアップリケのように縫いつけ文様にした衣服)のように見た目の様子を日本語で表現していたり、いろいろな場合があります。

性別、年齢などによって着てよいとされる衣服の区別や、労働など日常の暮らしで着るもの(日常着)と、儀式など公の場で着るもの(晴れ着)との区別もあります。

例えばアットゥシという呼び名がアイヌの衣服全体の呼び名や代表的な名前のように使われることがあります。これはオヒョウ(ときにはシナノキも)の樹木の内皮の繊維をもとに作った布やそれを素材にした衣服の呼び名です。

そのほかにも、特に古い本や写真などでは、日常生活の写真で晴れ着ばかりを紹介していたり、地域や時代をごちゃごちゃにしていたりすることもあるので注意が必要です。

ふつう、アイヌの衣服の種類は素材によって大きく分類されています。この冊子でも、おおむねそれに従って分類し説明してみました。

Ainu's clothing is characteristic of the region of origin and classified by the materials as well as the design patterns.

Clothing is also categorized according to the age and gender of the intended wearer and by the purpose. Clothes are worn for either daily routine or in the case of rituals.

Early publications have displayed photographs of Ainu's ceremonial clothing which were taken not necessarily at the rituals, and there has been a lack of photos showing Ainu in every day clothing. There have been some oversights as to the region from which the clothing came from and mistakes in chronological dates.

動物の皮を素材にしたもの

●けものの皮を使ったもの（獣皮衣）

クマ、シカ、キツネなどの陸上動物や、アザラシ、ラッコ、オットセイなどの海獣の皮を使ったものです。



写真2 クマの皮を使った獣皮衣（『蝦夷生計図説』）

Hide and Fur

Various hides and furs of both the terrestrial animals including that of bear, deer and fox and the sea mammals such as seal, sea otter and fur seal are used for the making of clothes.

●魚の皮を使ったもの（魚皮衣）

サケ、マスなどの魚の皮をはぎ合わせて作るものです。主としてサハリン(樺太)で着ていたようです。他の衣服と比べ袖が細めで、裾が広がった、洋服のワンピースのような形をしています。



写真3 魚皮衣（サハリン・子供用）

Fish Skin

Skin of salmon and trout are patched together which were mostly worn by the ainu in Sakhalin.

●鳥の羽毛を使ったもの（鳥羽衣）

ワシ、タカ、エトピリカ、アホウドリなどの羽毛つきの皮を縫い合わせて作ったものです。



写真4 鳥羽衣（千島）

Bird Feathers

Skins with feathers of birds such as eagle, hawk, tufted puffin and albatross are sewn together.

植物の繊維を素材にしたもの

● 樹皮を使ったもの（樹皮衣）

オヒョウ、シナノキなどの内皮から繊維をとって反物に織ったものを素材にします。素材の中ではオヒョウが柔らかくてよいとされます。


22～23ページに、製作の工程を説明してあります。



オヒョウの葉



オヒョウの木肌

 内皮を剥がしているところの
写真はこちら

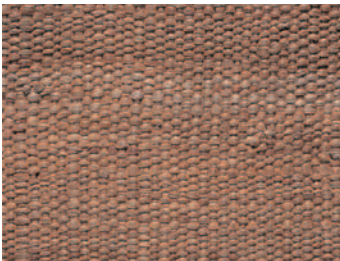
Plant Fibers

Fibers from the inner bark of a kind of elm and Japanese linden are woven into textile fabrics for dress-making of which the production process is shown on pages 22 and 23.



写真5 樹皮衣（サハリン）

オヒョウの布の拡大図



シナノキの布の拡大図



●草を使ったもの（草皮衣）

イラクサなどの内皮の繊維で織った反物を素材にしたものです。主にサハリンに見られます。オヒョウなどの場合と比べると、糸が細く色が白めです。



イラクサ

📷 内皮を採る時期の
イラクサのようすはこちら

Grass

Fibers of a nettle are woven into textile fabrics, a practice mainly found in Sakhalin.



写真6 草皮衣（サハリン：イラクサに木綿を混ぜて織ってあります）



イラクサの布の拡大

木綿を素材にしたもの(木綿衣)

交易などで手に入れた木綿の古着、古裂^{ふるぎれ}、反物などを材料にしたものです。各地に見られ、アイヌ語の呼び名もさまざまです*。文献などでは、見た目の様子と木綿布の使い方によって、①絹や小袖などの古裂でこまかく切り伏せを施したもの(写真7、8がこのタイプです)、②黒や紺の布で切り伏せを施したもの(写真9がこのタイプです)、③大きめの白い布で模様を施したもの(写真10や24ページのイラストはこのタイプです)、④切り伏せを用いずに、刺しゅうを施したりしたもの(写真11がこのタイプです)、というふうに大別されることが多いようです。もっとも、どの地域でもこの4つのタイプがあったというわけではありません。

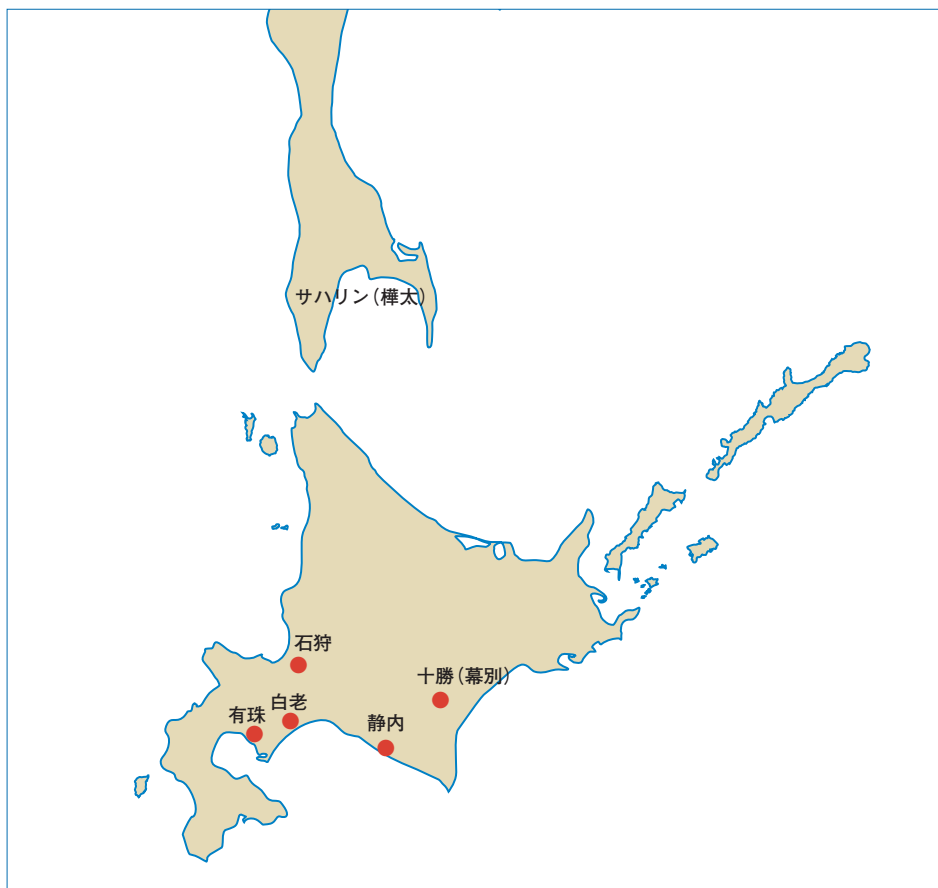
木綿衣は、木綿が入手しやすくなってから多く作られるようになったと言われており、例えば上記③のタイプのものは、大きな幅の白布が入手しやすくなった、明治の終り頃から大正時代にかけて作り始めたものです。

Cotton

Old cotton clothing and remnants of precious clothing were introduced through early trade practices which were prevalent in many areas and called by different names in the Ainu language.

*例えば、木綿地に大きめの白布を切り抜いて縫いつけ文様を施した着物は、日高の静内町では「チカラカラベ」と呼ばれていますが、同じ日高でも平取町では「カパラミッ」と呼ばれていますし、木綿地に黒や紺の木綿布を付けて直線模様にし、その上に刺しゅうを施した着物を静内町では「チニンニヌッ」(ときに「サクリ」「イヨサクリ」と呼びますが、平取町ではこのタイプの木綿衣をおもに「チカラカラベ」と呼びます。

サハリン(樺太)と北海道のいくつかの地域を例に、それぞれの地域の昔の木綿衣を紹介します。



伊達市(有珠)



写真7

白老町



写真8

石狩



写真9 (志村弥十郎さん。1872年頃の写真です)

静内町(農屋)



写真10

十勝(幕別町蝦夷文化考古館所蔵)



写真11

サハリン(1876年に石狩に移住した人たちが作ったものです)



写真12

外来のもの

衣服そのものが他の地域から入ってきて、それをほぼそのまま着ているものには、次のものがあります。いずれも貴重な衣服として扱われ、正装のときにアットウシなどの上に着ました。

●中国東北部から入ったもの

日本語で山丹服とか蝦夷錦えぞにしきと呼ばれるものです。中国の清の役人の服が、現在の中国東北部、沿海州地方からサハリンとの交易を通じて北海道に入ってきたものです。



写真13 山丹服

Clothes from North-Eastern China

Garments for the Court Officials of the Ching(Ch'ing) Dynasty were brought to Hokkaido from what is known today as North-Eastern China and Primorskii Krai through a trade route with Sakhalin.

●本州方面から入ったもの

- ・打ち掛け、小袖、能衣装など：絹に刺しゅうを施した華やかなもので、そのまま着たり、裏をはがして表だけを着たりしました。
- ・陣羽織：武将が使っていた陣羽織です。主^{おも}だった男性が着ました。



写真14 陣羽織

Clothes from Honshu

- ・ Garments: Ceremonial overgarment, Wadded silk garment, Garment for Noh-drama performance
- ・ A coat worn over the armor by a warlord

その他

●下着・日常着

これまで紹介してきた衣服の多くは晴れ着として用いられたものです。昔の日常着は、文様などがあまり見られないことが晴れ着との違いです。獣皮、樹皮、草皮、木綿などで作りました。

女性はかつては家の中では、多くの地域でモウルと呼ばれている、写真のような服を着ていました。そして来客があったり、外に出たりするときに、その上からこれま

で紹介してきたような服を着たといいます。頭からすっぽりとかぶるかたちのもので、昔は獣皮で作っていましたが、のちには、木綿で作ったり、和服の襦袢から作ったりしたものもあります。

男性の昔の下着については、樹皮や木綿で作った下帯をしていたことなどがわかっています。



写真15 木綿のモウル

Others

Underwear and Routine Clothing

Day to day clothing characteristically has much less decorative patterns than the ceremonial clothes and garments so far introduced in the previous pages.

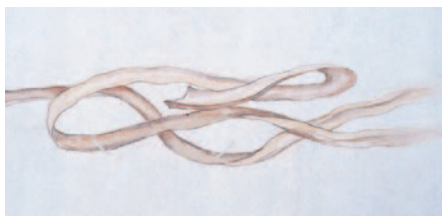
Women, at home, wore such clothes as shown in the photo which was called "mour" in many areas and would put more decorative and precious clothing over their routine clothing when they had guests or went out in public places.

[2] 衣服の仕立て方と装身具

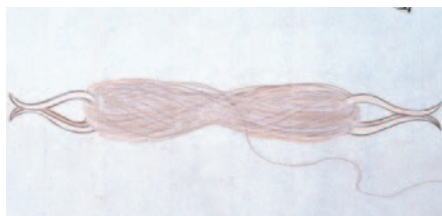
1 衣服の仕立て方とたたみ方

オヒョウの樹皮からアットウシができあがるまでの手順です。

- ①木の幹の根元近くに切り目を入れて皮をはぎます（季節は梅雨明けごろが水分が多くてよいとされます）
- ②内皮と外皮にわけて、内皮を10日ほど沼などで水に漬けてふやかします（地域によっては温泉に漬けます）
- ③ふやけたら水で洗って不純物を流し、それから繊維層をはがします
- ④細く裂いて、端を結び合わせて長い糸にします
- ⑤織り機に糸をかけ、布を織ります
- ⑥出来上がった布から、次のページのイラストのように服を仕立てます



③



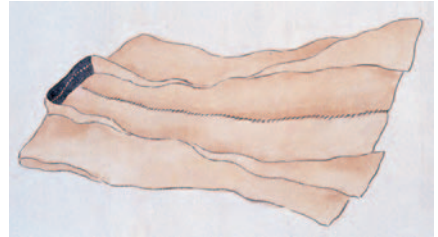
④



⑤

写真16

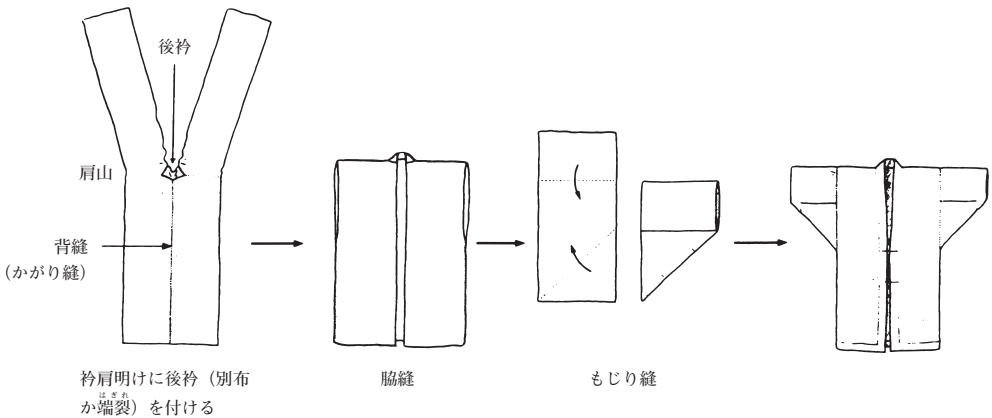
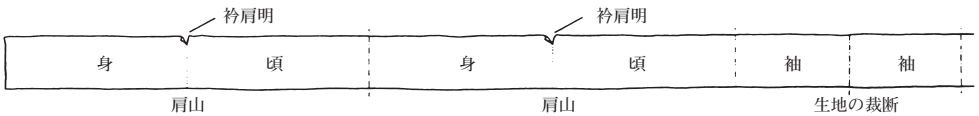
Dress-making and Storage
Procedures of "attoushi" making from bark of a kind of elm.



⑥



■生地仕立て方



(児玉マリ「衣服の種々相 Ⅱ」『ひとものこころ』天理教道友社より)

では次に、衣服のたたみ方です。これは、衣服の種類はもちろん、地域ごとにも、それぞれの人によっても違っていたようですが、一例として、静内町の織田ステノさん（1902～1992年）の木綿衣のたたみ方を紹介します。

■衣服のたたみ方



*背中の部分で袖を合わせます



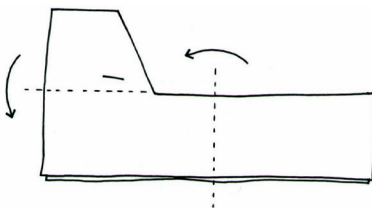
*片方の袖から手を通して両方の袖口をつかみます
(ここまでは、着たままの状態から、脱ぎながらすることも
あるそうです)



*つかんだ袖口を引きます。これで裏返しの状態で半分になります



*袖をたたんでから、2つ折や4つ折にするか、または丸めます



Procedures of folding of clothing for storage

2 文様を施す

衣服などに施した独特の文様は、布を切って衣服につけたり、刺しゅうをしたりして作ります。こうして作られる文様にも、地域ごとに特徴があります。

刺しゅうの文様には魔除けの意味があると言われますが、実際のところは地域や人によって様々です。昔のことをよく知っているお年寄りの話でも、文様の刺の部分に魔除けの意味があるという人もいますし、文様には特にそのような意味はないという人もいます。

→ このほかにも、裁縫の用具のいくつかを『アイヌ文化紹介小冊子8 民具』の14ページで紹介しています。



📷 この着物の全体の写真はこちら



📷 この着物の全体の写真はこちら

Pattern-Making

Patterns on the clothes which are characteristic of the area of origin are made by patchwork and embroideries.

3 装身具など Ornaments

●頭にかぶるもの（笠、帽子、頭巾）

A Bark hat for summer, a hood and a hat for winter

笠はサハリンで用いられていました。主に夏のかぶりもので、樺の皮で作ったもの、ヤナギやミズキの削りかけを編んで作ったものがあります。帽子、頭巾は主に冬のかぶりものです。樹皮で作ったものと木綿や麻などで作ったものがあります。冬の山猟のときにかぶりました。



写真17-1 帽子(北海道)

📷 これは北海道によく見られるタイプのもので、サハリン（樺太）によく見られるタイプの帽子はこちら

●はちまき Head band

あらたまって人前に出るときや儀式のときなどにはちまきを着用することがありました。多くは木綿、しめす繻子などを使います。刺しゅうを施すものもあれば、無地のものもあります。より日常的な場では日本手ぬぐいを用いたりもします。形は、額にあたる部分が幅広くなっているものと、全体の幅が同じものとがあります。



写真18 はちまき

●耳飾り Earrings

耳たぶに穴をあけて、そこに真鍮しんちゆうや銀など金属製の環を通して下げるものです。昔は男性も付けていました。大きさは直径2、3センチのものから10センチ以上に及ぶものもあり、飾り玉のついているもの、針金状のものの一方を渦巻きにしているもの、などがあります。



写真19 耳飾り

●首飾り Necklace

女性が正装のときに下げるものです。ガラスの玉を紐に通したもので、玉と玉の間に古銭を通したり、中心に飾り板を付けたりのものもあります。



写真20 首飾り
(左：門別町、右：新冠町)

●帯 Belting

あらたまった席など、時と場合によって男女とも帯をしめます。帯は、和服に比べると細い幅のものです。長さは胴をふた廻りして結ぶくらいのものです。

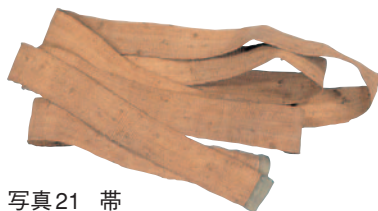


写真21 帯

●手甲・脚絆

Covers for the back of hands and Leggings

山歩きや農作業のときに用いました。

手甲は手の甲にはめて巻つけるものと、手袋の指先のない形のものがあります。脚絆には、足に巻き付けるものと、筒状になっていて足を入れるものがあります。



写真22 手甲



写真23 脚絆

→ このほかにも、装身具のいくつかを『アイヌ文化紹介小冊子8 民具』の12～13ページで紹介しています。

●協力（敬称略）

社団法人北海道ウタリ協会 北海道大学農学部附属博物館 東京国立博物館
財団法人アイヌ民族博物館 静内町アイヌ民俗資料館 津田命子

●写真提供、出典等

写真1：社団法人北海道ウタリ協会

写真2, 16：『蝦夷生計図説』復刻版（河野本道, 谷澤尚一解説）北海道出版企画センター

写真3：東京国立博物館

写真4, 5, 6, 15, 17, 18, 19, 20, 21, 23：北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園

写真8, 10, 11, 12, 19, 22：財団法人アイヌ民族博物館

（11は幕別町蝦夷文化考古館所蔵, 12は上野千春氏所蔵）

写真9：佐々木利和『日本の工芸 354 アイヌの工芸』（東京国立博物館所蔵）

写真13：児玉マリ氏

写真17-2：ロシア民族学博物館

写真25：静内町アイヌ民俗資料館

上記以外の写真は当センター所蔵写真（7, 14, 26, 27はハンガリー国立民族学博物館所蔵/バラートシ・コレクション）



この小冊子は、環境に配慮した用紙を使用しています。
古紙配合率100%・白色度70%

◆発行—平成9年3月（増刷 平成15年3月）

◆編集—北海道立アイヌ民族文化研究センター
HOKKAIDO AINU CULTURE RESEARCH CENTER
〒060 札幌市中央区北1条西7丁目 プレスト1・7 5階
TEL.011-272-8801 FAX.011-272-8850

<http://www.pref.hokkaido.jp/kseikatu/ks-ambkc/hacrc/hp/index.htm>



オヒョウの木

pon

kanpi-sos

ポン カンピソシ



3

◆アイヌ文化紹介小冊子

イペ

食べる



本書のねらい

北海道立アイヌ民族文化研究センターでは、国連の定めた「世界の先住民の国際10年」への取り組みの一環として、1995(平成7)年度より、アイヌ文化を紹介する小冊子を毎年1冊ずつ刊行しています。1冊目では「イタッ はなす」と題してアイヌ語について、2冊目では「イミ 着る」と題して衣服について紹介しました。

3冊目では「イペ」と題して食べ物についてとりあげました。アイヌの食べ物、食料の調達、調理や保存の方法などについてイラストや写真を交えて説明しています。さらに、アイヌの食文化について学んだりできる文献や資料について紹介しています。

ポン カンピ ソシ
pon kanpi-sos → 小冊子
小さい 紙 束

イペ → ものを食べる。食事する。食べ物
ipe

目次

[1] アイヌの食べ物	2
1 どのようなものを食べてきたか	2
2 どのようにして食料を得たか	4
[2] 調理と保存	16
1 調理の方法	16
2 加工と保存	26
3 調味料について	30

[1] アイヌの食べ物

1 どのようなものを食べてきたか

アイヌの食生活の歴史について、どのようなことがわかっているのでしょうか。

アイヌの昔話では、山、海や川で狩や漁をしたり、山菜や貝類をとったり、穀物を作ったりしていた暮らしぶりが語られています。日本の江戸時代頃の文献にも同じようなアイヌの食生活についての記録が残されています。それよりももっと古い時期のことについては、遺跡の発掘調査などによって少しずつ明らかにされてきています。

他の多くの民族にも共通していることですが、ここ100年あまりの間にアイヌの食料と食生活は大きく変化しました。アイヌの場合は、アイヌを取り巻く様々な生活環境の変化や開発の結果、それまで当たり前だった食料が手に入りにくくなったりしたことや、近代以降の同化主義のもとでアイヌの伝統文化が否定される空気が広まったりしたことも一因です。

1. The Foods that the Ainu people have relied on.

This handbook is compiled in a bid to shed light on the history of the Ainu's diet.

The folktales of the Ainu have often depicted their life style as largely based on the subsistent activities of hunting, fishing, gathering of edible wild plants, collecting shellfish, and cultivating crops. This life style was also recorded in archives written during the Edo era. The Ainu history in regards to their diet prior to the Edo period has been gradually clarified with the findings from early excavation sites.

As is common with many other peoples, the Ainu experienced drastic changes in the type of food they consumed and their diet as a whole over the past 100 years. Major factors were attributable to such dramatic changes as the difficulty in the supply of a particular food which they had relied on due to the changes in their living environment. Another factor has to do with modern development, and the prevailing social trend of denying their traditional culture under the assimilation policy after Japan's modernization.

The Diet of the Ainu People

現代のアイヌの食生活は、和食や洋食などが中心です。普段の食生活で昔のままの食事をとることはありません。

一方で、昔からの素材を新しい方法で調理したり、調味料などで味付けを工夫する家庭もありますし、季節の山菜などが食卓に並んだりすることもあります。儀式やお祭りを中心として昔ながらの料理を作ることもあります。

この小冊子では、アイヌの伝統的な食生活について取り上げました。特に断らない限りは、明治から昭和の初期に生まれた方々からお聞きした話をもとにしています。



写真1 サルナシの実



写真2 カタクリ

In the contemporary diet of the Ainu, Japanese as well as western style cuisine are more dominant, and it has grown increasingly difficult to maintain their traditional diet as they had once done in their past life. On the other hand, some of the Ainu prepare traditional ingredients in a new cooking style and some of them cook with non-traditional seasonings. The Ainu's traditional diet is introduced in this handbook based on interviews to those who were born in the period from Meiji to the beginning of Showa otherwise mentioned.

2 どのようにして食料を得たか

アイヌの食べ物と一口に言っても、住んでいる地域によって多少の違いがみられません。例えば、海沿いに住む人々は海のことを、内陸に住む人々は山のことをより多く利用してきました。ですから、ここに書かれている食材がすべての地域のアイヌに利用されていたわけではありません。地域によっては、生息・分布していない動植物もありますし、手に入るけれども食材にはしない地域もあります。栽培する作物についても地域によって差があります。

ここでは、アイヌの人々がどのようにして、どのような食料を得たのかということについてみていきましょう。



写真3 海での漁の様子

2. The Ainu's method for food acquisition

There were variables in the consumption patterns of the foodstuff that the Ainu relied on, depending on the regions of their habitation. It is suggested that all the foodstuff introduced in these pages may not be commonly consumed by the Ainu in all regions. Habitation and distribution of fauna and flora, the use of physically obtainable foodstuff and the type of crops cultivated vary accordingly to the region.

① 狩猟

狩猟の対象となったのは、大型動物ではエゾシカ、ヒグマなど、中・小型動物ではエゾタヌキやエゾリス、ウサギなどでした。

これらの肉は主に汁ものにしたたり、焼いて食べました。乾燥させ貯蔵しておいた肉は、一度煮返してから汁ものにします。また、毛皮をとる目的で得た動物の肉を食材として利用することも多かったようです。

動物の新鮮な内臓は生で食べることもありましたが、肉を生で食べることはほとんどありませんでした。

鳥類ではエゾライチョウ、カケス、スズメ、カモ類などを食材とし、汁ものにしたたり、焼いて食べました。



写真4 弓



写真5 矢

→ このほかにも、狩猟に用いられた道具などのいくつかを『アイヌ文化紹介小冊子8 民具』の22～25ページで紹介しています。

1) Hunting

The animals hunted by the Ainu were Hokkaido deer, brown bear, raccoon, squirrel and rabbit whose meat was mostly cooked in a soup or roasted. The Ainu frequently utilized the meat of the game which were hunted for their hide. Fresh internal organs from animals were consumed raw but meat was hardly eaten raw. Game birds including copper pheasant, jay sparrow, sparrow and ducks were cooked for a soup or roasted.

ぎよろう
② 漁撈

<川・湖漁>

サケ、マス、アメマス(イワナ)、オシロコマ、イトウ、サクラマス(ヤマベ)、キュウリウオ、ワカサギ、シシャモ、ウグイ(アカハラ)、フナ、ドジョウ、チョウザメ、カワエビなどの漁を行いました。

図1 マレク(魚をとる道具)の働き

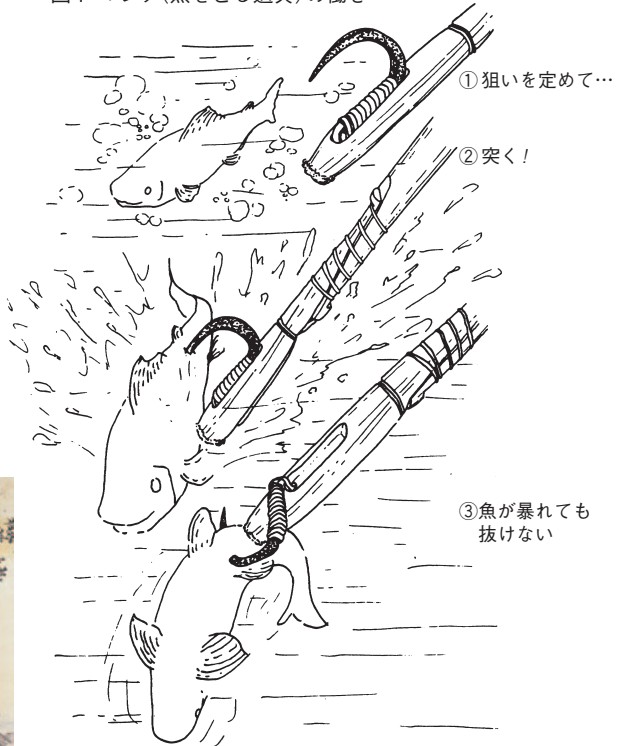


写真6 川でのサケ漁の様子

2) Fishing

<Freshwater Fishing>

The species of fish caught in the river and lakes include: salmon, trout, fuchen fuchen, white spotted charr, loach, dolly verden, charr, dace, pond smelt, crucian carp, capelin, river shrimp. Fresh fish were cooked with edible wild plants for a soup or spit-roasted. Fish which were roasted or smoked for preservation was used for a soup stock or a soup. Salmon roe were dried for preservation and consumed with gruel or a soup.

魚類は新鮮なうちに山菜などと一緒に煮て汁ものにしたたり、串に刺して焼いて食べたりしました。焼き干しや薫製にして貯蔵しておいたものはダシにしたたり、煮て汁ものの具にしました。

サケは「ルイベ」として食べることもありました。

サケのたまごは、粥や汁ものに入れて食べたり、乾燥させて貯蔵しました。

ルイベ

現在では、「凍ったサケの刺身」として有名な料理になっています。

ルイベという言葉のなりたちは、「ル＝とける」、「イベ＝食べ物」です。

寒い時期にとれるサケなどをまるごと軒下からぶらさげるなどして凍らせたものを食べたといえます。

ルイベの食べ方も、地域や家庭によって差があるようで、食べる分だけ適当に切って、皮を軽くあぶって、外側が熱でとけてトロリとしたところを食べたり、塩を少量つけて食べたりしました。また、火にはあぶらず、薄く切って食べるという人もいます。

Ruybe(ru-ipe)

Today, *Ruybe* is a popular dish of frozen raw fillet of salmon.

Ruybe is a combination of two words; "*ru*" which means melting and "*ipe*" a foodstuff. The Ainu consumed frozen salmon after having the entire salmon hung under the eaves during winter.

Some Ainu people cut small quantities of frozen salmon for individual consumption and then warm the skin side over a slow fire. When the surface started to melt, they consumed the salmon and the use of salt depended on individual taste. Other Ainu people consumed the salmon after it had been thinly sliced without applying any heat.

〈海漁と海獣漁〉

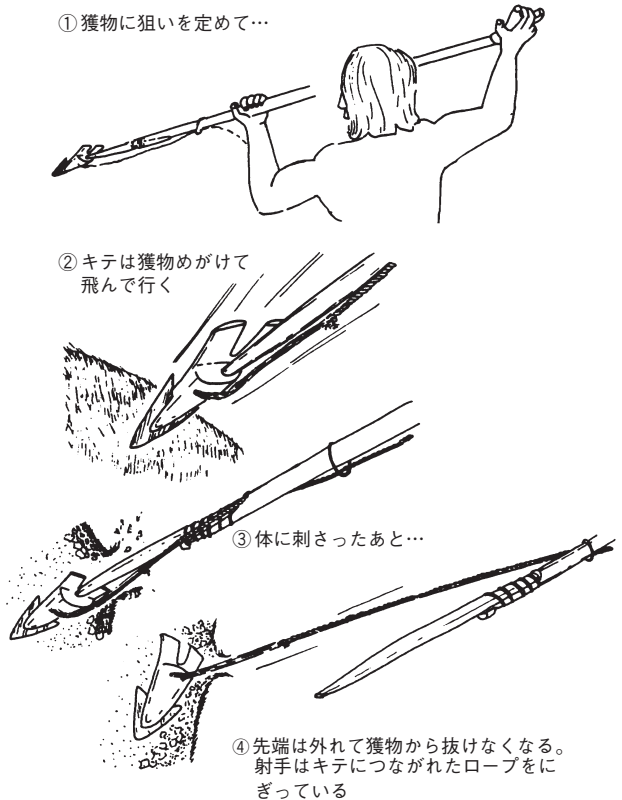
北海道の海沿いの地域や樺太では海猟が盛んでした。タラ、カレイ、イワシ、ニシンやメカジキ、マンボウ、クジラ、アザラシ、オットセイなどが主な獲物でした。樺太では特にアザラシやトドなどが重要な獲物でした。

肉、油脂や内臓などを食料とするほかに、海獣の皮も衣服などに利用しました。

写真7-1 鉾先

📷 この鉾先はサハリン(樺太)によく見られるタイプのものです。北海道によく見られるタイプの鉾先はこちら

図2 キテ(回転式離頭鉾)の仕組み



<Fishing at sea and hunting of sea mammals>

The regions along the coasts of Hokkaido and Sakhalin had a tradition of active at-sea fishing and hunting for cod, flounder, anchovy, herring, swardfish, sunfish, whale, seals and fur seal, with particular emphasis on the hunting of seals and Steller's sea lions in Sakhalin. Their meat, oil and internal organs were consumed, while the hide of sea mammals were utilized for clothing.



写真8 コンプをとる様子

<海草、貝類など>

コンブ、ワカメ、フノリ、イワノリ、マツモなどの海草類をとりました。

海草類は刻んで汁ものに入れました。また、干したものを水でもどし、汁ものに入れたりしました。コンブは焼いて粉にして、汁ものや粥に入れたり、団子につけて食べることもありました。

貝類ではウバガイ(ホッキガイ)、ホタテ、ツブ、アサリやシジミ、カワシンジュガイなどをとりました。ゆでて食べたり、汁ものに入れました。

ほかに、タコ、イカ、ウニなども食べていました。

<Seaweed and shellfish>

Seaweed were gathered for consumption. They were either finely chopped and put into a soup or dried which were then soaked in water before serving in a soup. Kelp was roasted and ground to be put in a soup and gruel or served as a sauce for dumplings. Shellfish such as surf clam, scallop, corbicula and short-necked clam were collected and boiled or put into a soup. Octopus, squid and sea urchin were also consumed.

③ 採取

山菜は春から秋にかけて採取しました。利用する部分は植物によって、芽、茎、葉、根茎、果実などさまざまです。

春から夏にかけては、ギョウジャニンニク、ニリンソウ、ノビル、タチギボウシ、オオハナウド、ヒメザゼンソウ、フキノトウ、クサソテツ(コゴミ)、ワラビ、ゼンマイ、ヨモギ、フキ、アマニュウなどの葉や茎を採取しました。

根茎や鱗茎を利用するのは、ツリガネニンジン、ツルニンジン、カタクリ、ユキザサ、クロユリやオオウバユリなどです。



写真9 ギョウジャニンニク



写真10 フキノトウ



写真11
ヤブマメの地下の実

3) Gathering

Edible wild plants were gathered from spring till fall and the parts of plants such as buds, stems, leaves, bulbs, roots and berries were consumed depending on the type of plant.

夏から秋にかけては、ハマナスの実、サルナシの実、クワの実、クルミ、クリ、キハダの実、ドングリ(ミズナラ、カシワ)、クロミノウグイスカグラ(ハスカップ)、ヤマブドウ、ノイチゴなどの果実、ヤブマメの地下の実、ガガイモやエゾテンナンショウなどの根茎を採取しました。

果実は採取したらそのまま生で食べますが、キハダの実などは乾燥・保存したものを煮て食べたり、他のものと混ぜてラタシケブ(p13 参照)を作りました。

葉や茎はゆでたり、焼いたり、汁ものに入れたり、粥や飯などに入れて炊いて食べました。根茎は煮たり、焼いたり、汁ものに入れたり、粥や飯などに入れて炊いて食べました。

写真 12-1

コウライテンナンショウの球茎を蒸したもの

 [コウライテンナンショウの写真はこちら](#)

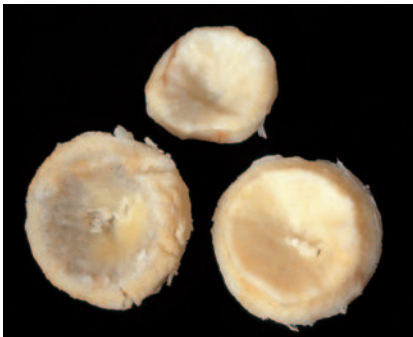


写真 13 ミズナラ



写真 14 ドングリ (ミズナラ)

From summer till fall, berries of sweet brier, mulberry, walnut, Japanese chestnut, acorn, wild grapes and roots of plants were gathered. Berries were generally consumed immediately after they were gathered, and some of the berries were dried and preserved.

Leaves and stems were boiled, roasted, served in a soup or cooked in gruel. Roots were cooked in a soup stock, roasted, served in a soup or cooked in gruel.

オオウバユリから採ったデンプン、エゾエンゴサクは、粥や飯に炊き込むこともありました。

シイタケ、マイタケなどのキノコ類も汁ものに入れて食べました。

イタヤカエデ、シラカンバなどの木の幹から汁をとって飲んだり、煮詰めて料理に甘みをつけるのに利用しました。



写真 15 -1 オオウバユリ

📷 オオウバユリのデンプンは、地下にある茎から採取します。関係する写真はこちら



写真 16 オオウバユリから採ったデンプン



写真 17 ヤブマメ入りご飯

Starch from a lily was occasionally cooked in gruel.

Mushrooms were prepared for a soup.

Juice from the stem of maple was extracted for drinking and used as a sweetener.

ラタシケブ

ラタシケブという名前の料理は、アイヌの料理としてよく紹介されます。山菜類、野菜類、豆類などから作る料理で、数種類の材料を混ぜ合わせて煮る場合もあります。ほとんどは油脂や塩で味付けをします。

ラタシケブの種類は多く、素材や食べる回数も地域や家庭によって異なります。日常食として食べたり、祭事のごちそうとして作られたりします。

なお、「ラタシケブ」という名称は一部の地域で使われており、地域によっては別の名称で呼ばれています。また、調理前の山菜を指してラタシケブと言う場合もあります。



写真 18
トウモロコシとキハダの実のラタシケブ



写真 19
オオハナウドと豆のラタシケブ

Rataskep

The dish called *Rataskep* has been cooked extensively in various regions. It has been made of either edible wild plants, commonly found vegetables or beans, or a mixture of some of these different ingredients. For seasoning, oil and salt has been used. Besides being a daily cookery, it has specially served as a festival food at the time of the ritual.

④ 農耕

ヒエとアワにはアイヌ語の名称があることや遺跡の発掘調査などから、かなり古い時代から栽培されていたことがわかっています。

北海道の西南部を中心に本州方面から様々な作物が伝えられ、その後さらに広い地域で栽培されるようになりました。日本の江戸時代中期から後期の記録では、ジャガイモをはじめとして、キビ、麦、ソバやトウモロコシなどの穀類と、大豆、小豆、ササゲなどの豆類、栽培野菜としてアタネと呼ばれる蕪、大根などが作られていたこと



写真20 ヒエ



写真21 ヒエの穂

4) Agriculture

The cultivation of barnyard millet and foxtail millet from the early times was proven from the evidence that the Ainu language was used for these grains, as well as from millets discovered at archeological sites.

Various crops were introduced mainly to the south-west of Hokkaido from Honshu. According to the records kept in the middle of Japan's Edo era, the Ainu cultivated potatoes, grains including proso millet, wheat, buckwheat and corn, beans such as soybeans, azuki beans and cowpea and vegetables including turnip called Atane and Japanese radish. By the beginning of the 18c, they had started to cultivate crops such as long onions, cucumbers, and pumpkins and the scale of agriculture expanded along with the greater variety of crops.

が記録されています。さらに幕末までにはネギ、キュウリ、カボチャなどが栽培されていたことがわかっています。

時代が下るにつれて、徐々に農業の規模が広がり、栽培作物も増えてきました。

穀類は主に粥にしましたが、祭事や儀式の際には飯に炊いたり、あるいは団子や酒の原料としても用いられました。

豆類は粥や飯に混ぜて炊いたり、ラタシケブの材料としても多く用いられました。

野菜類は汁ものに入れたり、ラタシケブにすることもありました。



写真22 アワの取り入れ

写真23 いろいろな豆類



Grains were consumed in the form of gruel on a daily basis, and were steamed for festivities and rituals. Grains were also used for making dumplings or used as ingredients in homebrewed liquor. Beans were cooked with gruel or steamed grains, as well as an ingredient for *Rataskep*. Vegetables were cooked in a soup or in *Rataskep*.

[2] 調理と保存

1 調理の方法

肉は新鮮な動物の内臓以外はほとんど生で食べることはなく、魚も新鮮な素材で作る料理以外は、主に汁ものに入れたり、煮たり焼いたりしました。食材はさらに、冬に備え保存するために様々な加工がほどこされました。



写真 24 炉端での食事の様子

1. Cooking Methods

Meat was rarely consumed raw except for the fresh internal organs of animals. Fish was primarily cooked in a soup or roasted.

Various types of dishes were developed in order to process foodstuff to preserve for winter use.

① 日常の食事

日常の食事は、基本的に汁ものと粥でした。

〈汁もの〉

山菜汁、肉汁、魚汁、海草汁などがあります。通常、具がたくさん入っており、塩や油脂で味付けをします。

〈粥〉

粥はヒエ、イナキビ、アワ、米やトウモロコシなどの穀物に水をたっぷり入れて作ります。乾燥させたギョウジャニンニクやオオウバユリのデンプン、干したイクラ、ジャガイモ、豆、カボチャなどを入れます。

飯に炊く時にはヤブマメの地下の実やヒシの実などを入れたりします。仕上げに少量の油脂を入れます。



写真 25 日常の食事の一例

1) Daily Meals

Most common of the daily meals were a soup and gruel.

A Soup: A soup with a lot of ingredients was cooked with salt and oil for seasoning. Types of a soup included a soup with edible wild plants, meat, fish and seaweeds.

Gruel: Such grains as barnyard millet, proso millet, foxtail millet, rice and corn were cooked in large quantity of water. Steamed grains were cooked with a small amount of oil applied for the finished product.

② 祭事や儀式の食べ物

祭事、熊送りの儀式や春秋の神への祈りの儀式、あるいは新築祝いなど儀礼の際には、飯、ラタスケプ、団子や酒などが作られました。

団子の材料には古くはアワ、ヒエやキビが多く用いられましたが、近年は米でも作られるようになりました。

酒にはヒエ、アワが古くから用いられましたが、次第に米、キビ、トウモロコシなども使われるようになりました。



写真 26
儀式のごちそう

2) Special Meals for Festivities and Rituals

Steamed grains, *Rataskep*, dumplings and the home-brewed liquor were commonly prepared for festivities and rituals.

食器

食事の際には、このような椀やはし、さじなどを使用しました。

→ このほかにも、食器のいくつかを『アイヌ文化紹介小冊子8 民具』の19ページで紹介しています。



写真27 椀



写真28 椀



写真29 椀



写真30 はし



写真31 はし



写真32 さじ

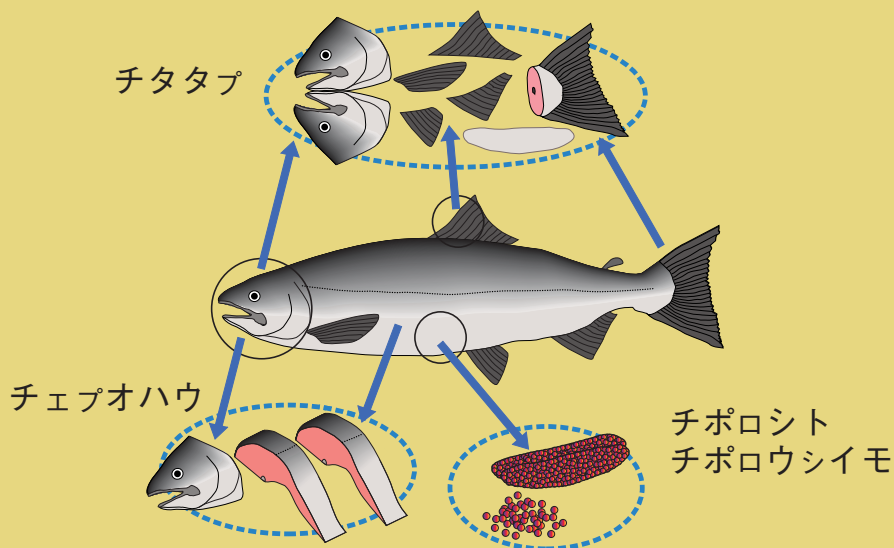
料理の作り方

幕別町在住の安東ウメ子さんに昔ながらの料理の作り方を教えていただきました。アイヌにとって重要な食料の1つであるサケを使った料理を中心に紹介いたします。身はもちろん、白子や筋子、ヒレまでも余すところなく利用しました。

サケの身おろしの順番

全体に塩をまぶし、ぬめりをとる。頭をとり、腹に包丁を入れ、はらわたをとる。ヒレを落とす。3枚におろして、し

ばらくの間水分をきる。筋子は塩をふり、一晩冷蔵庫でねかせ、イクラの状態にする。



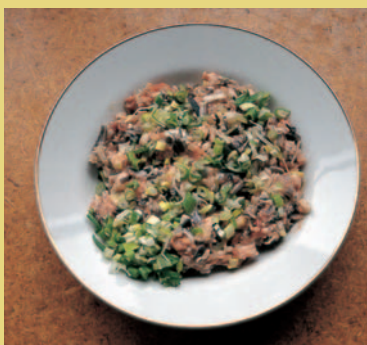
Recipes for Ainu Cookery

Traditional recipes are introduced by Ms. Umeko Andoh from Makubetsu, Hokkaido. Special attention is given to the cooking of salmon, one of the most important food resources for the Ainu. Every part of the salmon is fully utilized including fillets, milt, roe, and fins.

チタタプ

材料：サケの背ビレ、尾ビレ、
腹ビレ、氷頭、長ネギ

背ビレ、尾ビレ、腹ビレ、氷頭を塩でぬめりをとる。それらを包丁で細くなるまで刻み、そこに白子と塩を少量と長ネギ（昔はギョウジャンニンク）を混ぜるようにさらに刻む。



チェプオハウ

材料：サケの切り身、ジャガイモ、
ニンジン、玉ネギ、長ネギ、
大根

野菜類は適当な大きさに切って鍋に入れる。野菜類が少し煮えたところにサケの切り身を入れる。具が煮えたら塩で味を整えて、長ネギを仕上げに入れる。



チポロシト

材料：ジャガイモ、イクラ、
デンプン

ジャガイモを塩ゆでする。ゆであがったジャガイモが完全に冷えてから、デンプンを入れてこね、食べやすい形にまとめる。イクラをつぶし、皿にとっておく。ジャガイモの団子をうっすら焦げ目がつくまで焼く。焼き上がりにつぶしたイクラをたっぷりとまぶす。



チポロウシイモ

材料：ジャガイモ、イクラ

ジャガイモを塩ゆでする。ゆであがったジャガイモはつぶして冷ます。その中にイクラを入れ、ジャガイモごとすりこぎ棒などでつぶす。イクラがつぶれて、ジャガイモにきれいな色がついたら出来上がり。



トウモロコシと豆の ラタシケ

材料：トウモロコシ、大正金時豆、
豚の骨

乾燥保存させておいたトウモロコシは、水につけてもどす。そこに豚の骨(昔は馬の骨)と大正金時豆(昔はテナシ豆)を入れ、火にかける。煮立ったらアクをとりながら火を弱め炊き続ける。

トウモロコシが柔らかくなったところで、塩を適量入れる。なお、カボチャと一緒に炊いてもおいしい。



2 加工と保存

狩猟、漁撈^{ぎょろう}、採取、農耕等によって得た食料は、すぐに消費されるだけでなく、長い冬に備えて、または飢饉の際の常備食として貯蔵されました。特に春から夏にかけては山菜、秋には山菜、栽培作物と魚を加工・保存しました。

<獣肉>

肉類は切って、鍋でゆでてから、棒に刺したり、干し竿に下げて乾燥させ、さらに火棚の上で乾燥させ、保存しました。



写真33 家の内部の様子

2. Food Processing for Preservation

The foods the Ainu acquired from hunting, fishing, gathering and cultivation were not only consumed immediately but also stored as reserve food for the long winter period and in case a shortage of food might occur.

<Meat of the Game>

Wild game was cut into blocks and boiled before being dried. In some instances blocks were further dried on a rack above a hearth.

<魚類>

サケ、マスなどの魚類は、頭と内臓をとって開いたり背割りにします。あるいは三枚に身おろしします。寒い時期には丸のまま干すこともあります。それらを串に刺して炉で焼き干しにしたり、煙をあてて薫製にしたりします。さらに、火棚の上で完全に乾燥させます。

特に、マスの漁期は夏であり、油気が多くて腐敗しやすいため、長く保存するためには、焼き干しにしてから火棚でさらに乾燥させました。

ウグイ、アメマスなどの小魚も焼き干しにして、乾燥させ、保存しました。



写真 34 ウグイの焼き干し

<Fish>

Fish such as salmon and trout were cut into two fillets and cut open from the dorsal side after the head and internal organs were removed. Dried fish were first grilled on a spit or smoked and then completely dried above a hearth. Dase, capelin and other small fish were grilled on a spit to remove excess oil and moisture and further dried on the rack to preserve for a longer period of time.

<山菜など>

山菜などは春から夏、夏から秋にかけて豊富に採取し、旬のものを楽しむと同時に、乾燥させ貯蔵しました。

山菜は刻んで干したり、天日で乾燥させたり、もしくはゆでてから乾燥させ保存するのが一般的でした。果実は自然に乾かしたり、天日で乾燥させたりしました。

また、オオウバユリの鱗茎からデンプンをとって保存しました。デンプンをとったあとのものは、円盤状に固めて乾かし保存します。



写真35 オオウバユリの根



写真36
オオウバユリのデンプン



写真37 オオウバユリの団子

<Edible Wild Plants>

Edible wild plants were gathered once from spring till summer and again from summer till fall, part of which were consumed immediately and the rest was dried for preservation. They were generally either chopped finely, dried under the sun or boiled and dried for preservation. Berries and fruits were dried naturally or under the sun. They also took starch from a lily bulb, (*Lilium cordatum* v. *glehnii*.) for preservation. The remaining part of a bulb was formed into a shape of a saucer, and dried and coagulated for preservation.

〈農作物〉

穀類は穂のまま、天日で十分乾燥させるか、火棚の上で乾燥させました。それから穂のまま入れ物に収めたり、倉の中に貯蔵しました。ただし、キビは実が落ちやすいため、あらかじめ脱穀して容器に入れて保存しました。トウモロコシも干して保存しました。

豆類も天日で乾燥させました。

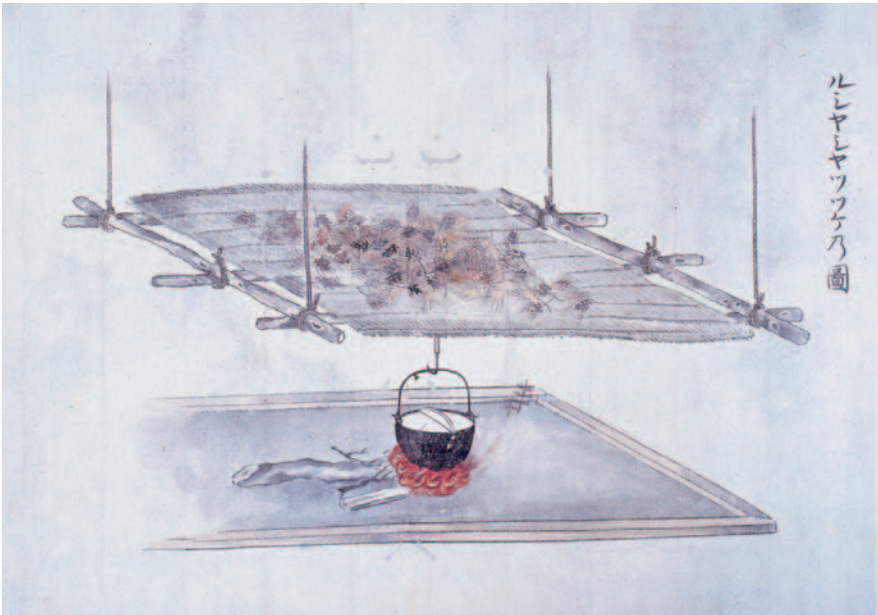


写真 38 火棚の様子

<Crops>

Grains with the husks were fully dried under the sun or dried on the rack, and were kept in a container or stored in a warehouse. However, proso millets whose grains could easily fall off were threshed first and then preserved in a container. Corn was also dried. Beans too were dried under the sun.

3 調味料について

料理の味付けは一般的に薄味で、素材の持つうまみを十分にいかしていました。塩と油脂が主な調味料でした。

アイヌの料理には油脂はとても重要で、汁もの、炊き込み飯やラタシケブの味付けなどの仕上げに使いました。油脂を入れることでまろやかさが出ました。

油脂は、陸獣ではエゾシカ、ヒグマなどに加え、近年は馬や牛など、魚類ではタラ、イワシ、ニシン、サメなど、海獣ではクジラなどから抽出し、樺太では主にアザラシの脂を利用しました。

薬味としては、様々な植物が利用されました。

伝統的には味噌、醤油、砂糖は利用されませんでした。現代はこれらの調味料も使って味付けをしています。

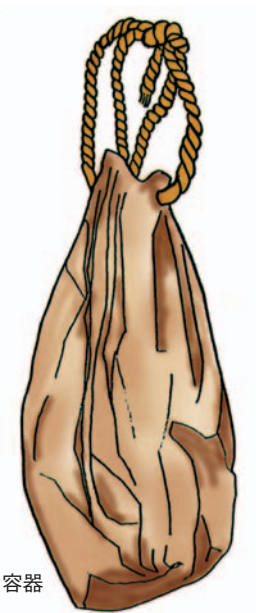


図3 獣の内臓を使った油を入れる容器

3. Seasoning

In general, food was lightly seasoned mainly with salt and oil to best enjoy the natural flavor of the ingredients.

Oil was an important component in Ainu dishes, which was frequently used to season dishes such as soup, grains cooked together with other ingredients and *Rataskep*. The oil was often extracted from Hokkaido deer and brown bear, and in modern times from land mammals such as horses and cows. Fish such as cod, anchovy, herring, shark, as well as sea mammals such as whale were an important source of fat as well. Seals were a major source of oil in Sakhalin. Various plants were used as spices. Bean paste, soy sauce and sugar were not used in traditional Ainu cooking, but are used today for seasonings.

●協力（敬称略）

安東ウメ子
帯広百年記念館
北海道大学農学部附属博物館
松前町教育委員会
静内町アイヌ民俗資料館

●写真提供、出典等

写真 1, 2, 9, 10, 11, 12-1, 12-2, 13, 14, 15-1, 15-2, 15-3, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 25, 26, 34, 35, 36, 37：静内町アイヌ民俗資料館
写真 3, 6, 8, 33：『蝦夷島奇観』（復刻版 佐々木利和, 谷澤尚一研究解説）雄峰社
写真 4, 5, 27, 28, 29：北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園
写真 24, 38：『蝦夷生計図説』（復刻版 河野本道, 谷澤尚一研究解説）北海道出版企画センター
写真 7-2：松前城資料館
図 1, 2：『北の生活文庫 第2巻 北海道の自然と暮らし』北海道
上記以外の写真は当センター所蔵写真（7-1, 30, 31, 32はハンガリー国立民族学博物館所蔵パラストシ・コレクション）



この小冊子は、環境に配慮した用紙を使用しています。
古紙配合率100%・白色度70%

◆発行—平成10年3月

◆編集—北海道立アイヌ民族文化研究センター
HOKKAIDO AINU CULTURE RESEARCH CENTER
〒060-0001 札幌市中央区北1条西7丁目 プレスト1・7 5階
TEL.011-272-8801



春の野草

pon kanpi-sos
ポン カンピソシ



4 ◆ アイヌ文化紹介小冊子 チセ 住まい



本書のねらい

北海道立アイヌ民族文化研究センターでは、国連の定めた「世界の先住民の国際10年」への取り組みの一環として、1995（平成7）年度より、アイヌ文化を紹介する小冊子を毎年1冊ずつ刊行しています。

これまでに、1冊目「イタク 話す」・2冊目「イミ 着る」・3冊目「イペ 食べる」の3冊を刊行し、ことば・衣服・食べものについて紹介してきました。

4冊目では「チセ」と題し、住まいについてとりあげました。家屋のつくりや使われ方などについて、図や写真を交えて説明します。また、復元された住居を見学できる施設や、アイヌの住まいについて学べる文献なども紹介しています。

ポン カンピ ソシ
pon kanpi-sos → 小冊子
小さい 紙 束

チセ → 家、家屋
cise

目次

[1] アイヌの住まいの歴史	2
[2] 住まいのつくり	6
1 住まいのあらまし	6
2 土地と方向	11
3 つくりとしつらい	12

[1] アイヌの住まいの歴史

アイヌの住まいの歴史について、これまでにどのようなことがわかっているでしょうか。

下の絵（写真1）は、18世紀末から19世紀初めごろの文献に描かれているアイヌの家屋のようです。これより古い時代の家屋については、遺跡の発掘などをおして、柱の立て方、方向、大きさ、間取りなどがだんだん明らかになってきています。写真1の家と共通する建て方は、もう200～300年ほど前からおこなわれていたと推定できるようです。



写真1

The picture above describes an Ainu dwelling unit that was depicted in a work written between the end of the 18th century and the beginning of the 19th century. A series of excavations of ruins has contributed to the gradual understanding of the Ainu people's earlier dwelling systems. The building style used for dwellings similar to the one shown in the picture presumably was adopted from 200 to 300 years before the period when the literature was written.

The History of Ainu Dwellings

現在、博物館などでアイヌの家屋として展示されている建物は、だいたい今世紀の初めごろまでに建てられていたものを復元しようとしたものです。それらと写真1の文献のころの家屋とのあいだには、家のつくりにならほど大きな違いはないようです。



写真2 復元されたカヤ^カ葺きの家屋（アイヌ民族博物館）

ここ100年あまりのあいだに、アイヌの住まいも大きく変化しました。現在、写真1のような家屋に住んでいる人はいません。そのときそのときの新しい工法によって建てられた一戸建てや集合住宅が、日常生活の場となっています。

Dwelling units exhibited today in museums are reconstructed models of those that were built until the beginning of the 20th century. There seem to be no major differences in style and design when comparing those units and the one in the picture contained in the aforementioned work.

The dwelling systems of the Ainu have changed dramatically as well as other aspects of Ainu life and units like the one in the picture on the page 2 are no longer resided in today. The Ainu lives either in a house or apartment built according to modern construction methods and design.

一方で、家の方向や間取り^{まどど}などを決めるときに、アイヌ文化の中で伝えられてきた習わしや縁起の善し悪しを参考にすることもおこなわれてきました。家を建てる前の儀式や新築の祝いを、アイヌのやり方でおこなうこともあります。儀式のときに使う大切な道具の置き場所などを、昔の間取りにならって決めている人もいます。また、ふだんはとくに意識しなくても、伝統的な儀式をおこなう機会には、昔からのしきたりにならうかたちで、室内の空間の使い方や席順などを決めることが多いようです。



写真3 復元されたササ葺き^{ささぎ}の家屋（旭川市博物館分館）

However, traditional customs and teachings regarding good luck have been transmitted over the generations and on some occasions were taken into consideration when the decisions had to be made about such things as the facing direction of a house or room design. At times, rituals held prior to the building of a house and celebrations for the construction of a new house are conducted in Aino traditional manner. Some choose the place for utensils and implements for ceremonial use in accordance with traditional room arrangement. Many Aino seem to follow tradition when they arrange room space and decide seating order for traditional ceremonies, if not in everyday life.

観光や文化の紹介や研究のために、昔の家を復元して建てたりすることは、早くからおこなわれてきました。近年、アイヌ伝統文化の復興・継承の気運が高まる中で、集会や儀式をおこなう建物に、儀式のための設備として炉などを備えることもしばしばおこなわれるようになりました。

この小冊子では、こうした現代までのアイヌの住まいの歴史の中で、写真1の文献のころから今よりおよそ100年ほど前にかけて建てられた住まいを中心に説明します。



写真4 北海道立アイヌ総合センター（札幌市）の保存実習室

Reconstruction of old dwelling units has long been carried out for the purpose of tourism promotion and for the introduction and study of Ainu culture. In recent years, in response to a growing seriousness regarding aspirations for the restoration, preservation and transmission of Ainu traditional culture, consideration has been given to housing design so that units specifically designed for meetings and ceremonies often contain a hearth and other features for rituals.

This handbook focuses on the systems built during the period from the time of the literature that contains the picture on the page 2 until some 100 years ago. This is part of an effort to introduce the history of Ainu dwellings up to the present time.

[2] 住まいのつくり

1 住まいのあらまし

ひとくちにアイヌの住まいといっても、地域により、あるいはそれぞれの家により、さまざまな違いがあります。

よく見られたのは、大きな長方形の一室で中央部に炉があるものです。多くの場合、部屋の出入口の外側に玄関や物置などを兼ねた小屋をつけます。

大きさもさまざまですが、記録に残っているものでは、小さなもので約33m² (10坪ていど)、多くの人が集まるような家で約100m² (30坪ていど) だったようです。



写真5 カヤ葺きの家屋

1. Outline of Dwelling Systems

The design of Ainu housing systems differs depending upon the region of residence and individual household.

A unit with a single large rectangular room with a hearth around the center appears quite common. It often has a small building outside the doorway which was used as an entrance and for storage. The Ainu built units in a variety of sizes from the smallest at 33 square meters to a large 100 square meter unit used for meetings, according to the sources in the record.

Styles of Dwelling Systems

柱・屋根・壁・床の材料には、木の幹や枝、樹皮、カヤなどの草、などを用いました。その種類はさまざまですが、とくに壁や屋根を葺くために大量に必要なものは、その地域で手に入りやすいものが使われます。

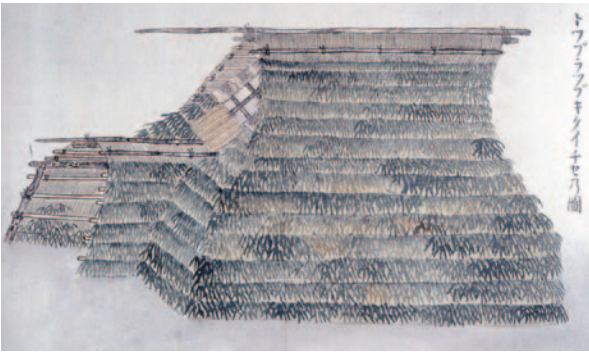


写真6 ササ葺きの家屋

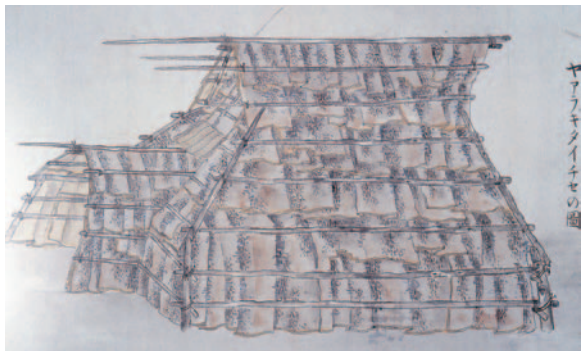


写真7 樹皮葺きの家屋

Materials for the posts, roof, walls and floor included trunks, branches and bark of various sorts and grass of some kinds. Large amounts of materials required to thatch the walls and roofs usually were procured from resources available locally.

屋根はたいてい下の左の図のようなかたちになっていますが、サハリン（樺太）などでは下の右の図のようなものも見られました。

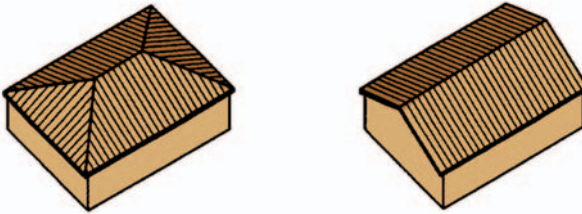


図1 屋根のかたち

サハリンや千島では、このほか、冬を過ごすための半地下式の家屋も用いられていました。これは、地面を掘り下げ、屋根に土を被せるというものです。

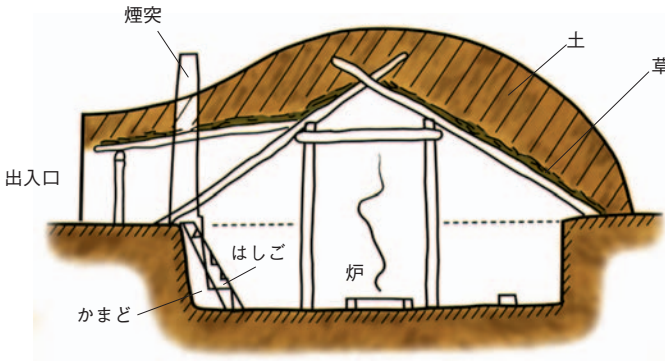


図2 半地下式の住まいの一例（断面図）

The roofing styles are drawn above. The hip roof shown on the left was most commonly employed while the gable roof on the right has been found in Sakhalin.

A semi-terrestrial unit was built as well for the winter climate in Sakhalin and the Kurils.

一つの家屋には一つの世帯が住むのがふつうでした。

新しく家を建てるのは、それまで住んでいた家が古くなったときや、新婚の夫婦のための住まいが必要になったときなどです。連れ合いを亡くしたお年寄りのために、子ども夫婦の住む近くに小ぶりな家を新築することもありました。

家を建てるときには、そこに住むことになる家族が働くほか、近所の人々が協力します。

新築した家は、材質や住み方にもよりますが、およそ20～30年か、場合によってはそれ以上住むことができたといわれています。

A dwelling unit was normally occupied by the members of one household.

A new unit was built for a newly wedded couple or when their house became old. A small unit was built for a single elderly parent in the proximity of his or her children.

The houses were built by the members of a family in collaboration with neighbors.

They are estimated to have endured for 20 to 30 years, or occasionally even longer depending upon the building materials used and the level of activity of a family.

「チセ」ということばについて

アイヌ語では、「家屋」のことを「チセ」といいます。このことばは、だいたいの方言でも用いられてきました。

この「チセ」ということばは、これまでしばしば、とくに日本語の文章に取り入れられた場合に、かつてのカヤやササなどで葺いた家屋だけを指して使われることがありました。たとえば「今やチセに住んでいる人はいない」のような表現が、「今やカヤで葺いた家に住んでいる人はいない」などのような意味で使われることがありました。

しかしアイヌ語として考えた場合には、現代の新しい工法による家も、やはり「チセ」と表現することになります。じっさい、お年寄りにアイヌ語で会話をしていた中に、現代の家屋を指して「チセ」ということばが用いられている例があります。材料や工法が変わっても、アイヌ語にとって「チセ」つまり「家屋」に変わりはないのです。

"Cise"

In Ainu language, "Cise" means "House", and this has often been used even in the Japanese vernacular specifically referring to a thatched house which used to be built. However, the word "Cise" still exists in Ainu language to refer to the modern housing units. Despite the changes in the selection of materials and construction methods, "Cise" remains unchanged and still means a house in Ainu language.

2 土地と方向

家を新しく建てるときは、いろいろな条件を考えて土地を選びました。たとえば、きれいな飲み水が得られる、土地が乾いていて水はけがよい、土砂くずれや水害のおそれがない、食べものの調達にそれほど不便がない、などです。

地域によって、高い山の方、川の上流の方、日の出の方などが尊い方向とされるので、こうした方向を考えて家を建てました。

2. Site and Facing Direction

Various considerations were given in the course of selecting a site for a house: accessibility to clean drinkable water, food procurement, the presence of dry and well drained soil and a lower risk of a landslide or a flood.

The directions facing toward a high mountain, the upstream area of a river and the sunrise were considered sacred in respective regions and houses were built accordingly.

3 つくりとしつらい

ここではおもに北海道で建てられた住まいについて説明します。

① 主屋のつくり

柱などの骨組みには、堅い木が選ばれます。

屋根や壁は、カヤ・アシ・ササなどの草や、エゾマツなどの樹皮で葺きます。



写真8
柱の材料として用いられる
ヤチダモの木

3. Structure and Finishing

Ainu's traditional dwelling systems often seen in Hokkaido are described as follows.

① Main Unit

Hardwood trees were chosen for posts and other structural materials in a unit, and roofs and walls were thatched with grass including reed or bamboo grass, and with the bark of the Japanese spruce.

骨組みや葺き材を結ぶ材料には、ブドウなどの蔓^{つる}やシナノキの内皮などが用いられました。



写真9
ヤマブドウの蔓



写真10 シナノキの内皮でつくった縄

Grape vines and a skin of Japanese linden were used to bind the materials for structure and thatching.

柱は地面に埋め込んで立てます。

骨組みをつくる時は、二とおりのやり方があります。

ひとつは、屋根を地上で組んでから、それを柱の上に持ち上げる方法です。もうひとつは大きい家屋の場合などで、先に柱を立てて屋根を上でじかに組む方法です。

図3 屋根を組んでから
持ち上げる方法の一例

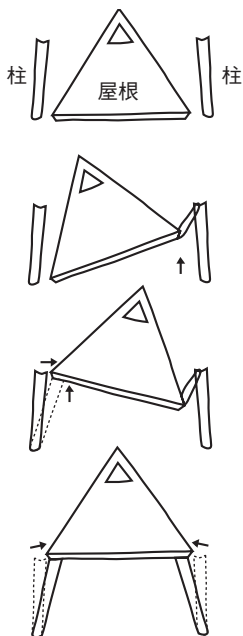


写真11 骨組みのようす（白老町：大正から昭和の初めごろ）

Posts are placed in holes dug into the ground.

Two different methods were applied for the building of a structure: either a roof truss was made already on the ground and lifted to the top ends of the posts or constructed above the posts in the case of building a big unit.

屋根の組み方のうち、よく知られているのは、屋根を支える枠に二つの三脚を結び付けるやり方です。これに他の材も渡して、屋根全体の枠組みをつくります。

図4 屋根の組み方の一例



写真12 骨組みの結び

In the well-known method of roof truss construction, two tripods were attached to the frame which supports the roof.

多くの場合、屋根と壁とは同じ材料で葺かれたようです。



写真13 カヤで屋根を葺いているようす

写真14





写真15 ササで壁を葺いているようす

Roofs and walls may have been thatched often with the same materials.

屋根の頂上部分の端に、煙を出す口を小さく開けておきます。採光を兼ねた天窗を
炉の上のあたりにつくるところもあります。



写真 16 煙を出す口

A unit has a small opening on the edge of the rooftop to allow smoke to escape.
Some units have a skylight above the hearth to allow light to enter as well.



写真17 天窓（内側から屋根裏を見上げたようす）

儀式 — 家を建てる前・家を建ててから

建築にかかる前には、場所を占ったり、無事に作業できるよう神々に祈ったりします。

家ができあがると、家の守り神をつくって部屋に置いたり、これから無事に暮らせるよう、神々に祈ったり魔よけをしたりします。また、親戚や近所の人びとを招いてお祝いがおこなわれます。

Religious rites are conducted for general safety and prevention of accidents during the construction, and the festivities were held together with relatives and neighbors when the house was built.

② 間取りと内装

部屋には、神々が入り出すとされる窓が設けられました。広く知られているのは、この窓を尊いとされる方向（p.11）へ向けるつくり方です。

この窓と、中央部の炉とのあいだの空間は、^{かみぎ}上座として尊ばれます。客がここに案内されることもあります。



写真 18 上座に置かれた宝物など（帯広市：大正の終わりごろ）

② Room Arrangement and Interior Finishing

One of the windows faces in a sacred direction according to well-known teachings.

Between this sacred window and the hearth around the center of a room is deemed the sacred space in the room.

上座から出入口の方を見て右の炉ばたは、その家のあるじたちの座とされました。左は、家族の座とも客の座ともなります。

図5 静内町における間取りの一例

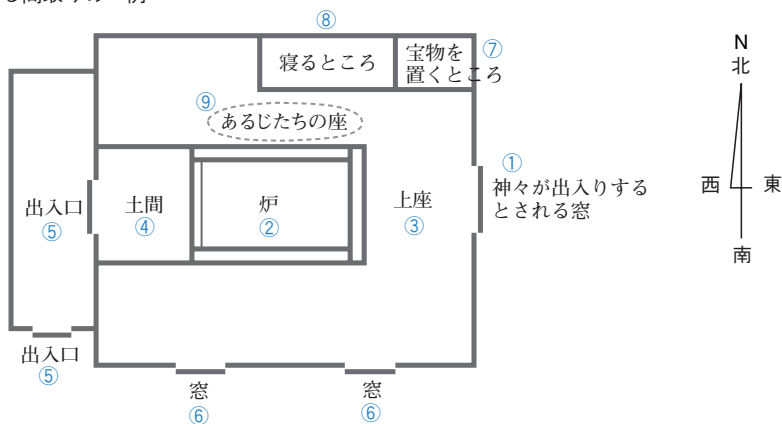
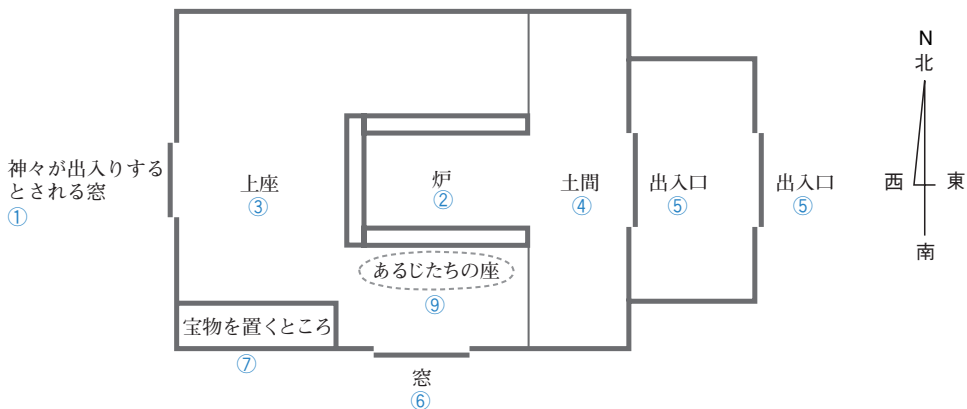


図6 帯広市（伏古）における間取りの一例



A type of room arrangement in Shizunai (above) and Obihiro (below):

- ① sacred window, ② hearth, ③ sacred space, ④ unfloored part of a house, ⑤ gateway,
- ⑥ window, ⑦ storage area for valuables, ⑧ sleeping area, ⑨ a space for heads of a family

多くの場合、出入口の外側に、玄関や物置などを兼ねた小屋を付けました。ここから外への出入口は、部屋への出入口と同じ向きだったり横向きだったりします。

部屋の内ではござを^{つる}吊して仕切ったり、小部屋を増築したりすることもありました。

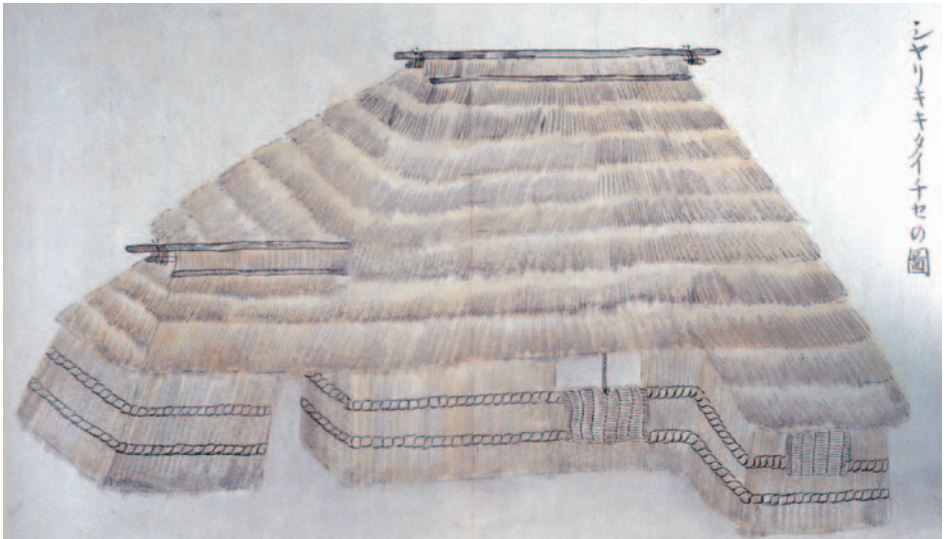


写真 19 - 1 出入口の小屋と小部屋のある家

 [出入口の小屋の内側を撮影した写真はこちら](#)

床にはふつう、草などを敷きつめてすだれを載せ、その上にござなどを敷きます。

壁ぎわに床から少し高い台を設け、寝床をつくることもありました。

A unit often had a small building outside the doorway as an entrance and for storage. In some cases, a room was divided by hanging a mat as a partition or a small room was added for more space.

Floor is covered with layers of grass, reed screens and matting.

A low platform was sometimes placed by the wall for a bed.

炉のつくり方はさまざまです。たとえば、地面を掘り、木の葉・^{じゃり}砂利・火山灰の順に敷き入れる、という方法があります。

縁は、木の太い枠で囲みます。

炉の上座側の^{すみ}隅に木の台を埋め込み、そこでものを切る作業などをする場合もあります。

炉の上には^{ひだな}火棚が設けられます。

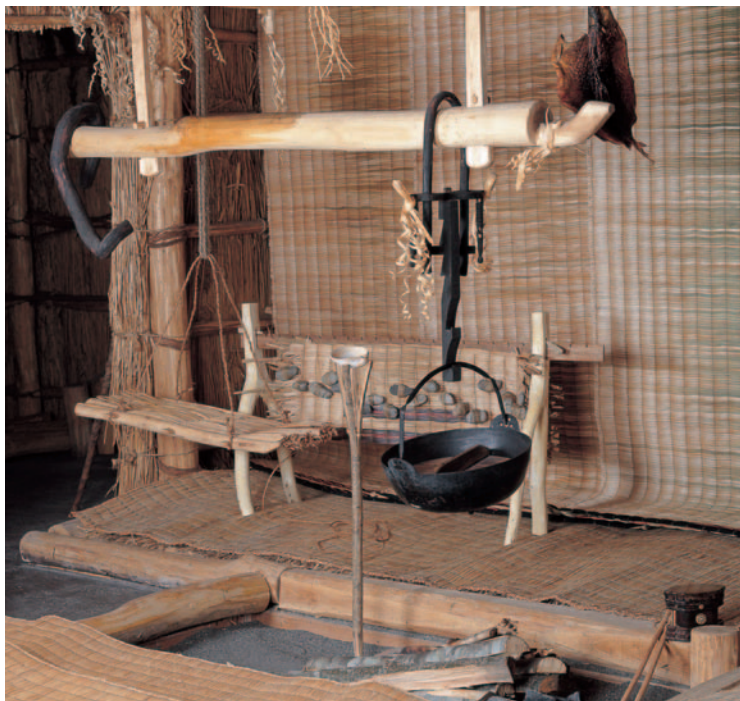


写真20 復元された炉のようす

In one method of making a hearth, a hole is dug and then layers of leaves, gravel and volcanic ash are placed in that order, and finally a thick wooden frame is placed at the rim. A rack is placed above the hearth.

内側の壁には、ござを張って仕上げるなどします。
窓や入り口には、すだれやござなどを下げたりします。



写真21 模様をついたござを張った室内のようす

The walls inside the room are occasionally finished with matting while the window or the doorway is sometimes finished with hanging reed screens or matting.

③ ^{あか}灯りや水など

室内ではこのような灯りを用いることもありました。燃料には魚の油などを用います。



図7 ホタテ貝を使ってつくった灯り

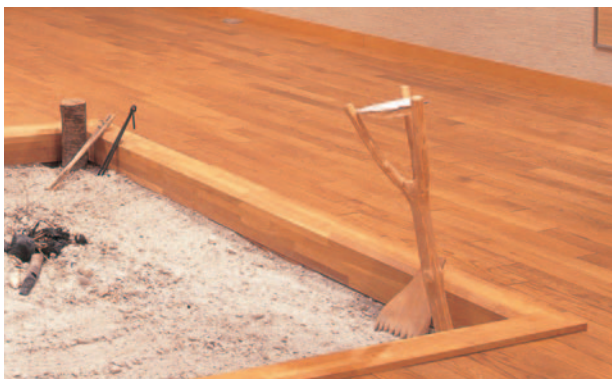


写真22

煮炊きは、炉の火でおこないます。

水は、家の近くの沢水や湧き水や井戸水などを汲み、家の中の樽やかめに貯めておきました。

③ Light and Water

Fish oil was used in some cases as a fuel to provide light inside the room.

Dwellers cooked over the hearth. Water was brought from an adjacent stream, spring or well and stored in a cask or an earthenware pot inside the house.

④ 主屋の周辺

主屋の周りには、祭壇^{さいだん}や熊などの檻^{おり}、倉などを設けることがあります。
祭壇は、神々が入り出すとされる窓（p.20）の外側正面に設けます。



写真 23 主屋の周りに祭壇や檻などが設けられているようす

④ Surroundings of A Main Unit

An altar, a cage for a bear and a storage area are in some cases located around the main unit. The altar for Ainu traditional rituals is placed facing the sacred window.

倉は高床になっていて、はしごで昇り降りします。



写真 24 倉（萱野茂二風谷アイヌ資料館）

便所は、男女別につくこともあれば、共用のこともあります。

The storage area has an elevated floor and a ladder was used.
Toilet is separated by sex if not otherwise shared.

家から少し離れたところに、ごみ捨て場を設けました。糠や炉の灰などはごみと別にすることもありました。

そのほか主屋の周りには、魚や肉などを干すための棚や竿、洗濯物を干すための竿などを設けることもありました。

風や雪をよけるために、カヤなどで垣を設けるところもありました。



写真 25 家の周りのようす（帯広市：大正の終わりごろ）

→ このほかにも、家屋やそれに関わる生活用具などについて、『アイヌ文化紹介小冊子8 民具』の16～21ページで紹介しています。

In the proximity of the house, the waste disposal area was designated by some households, and rice bran and ash from the hearth were sometimes separated from the rest of the waste. Some dwellers used racks and rods for the drying of fish and meat and used rods for laundry.

●協力

財団法人アイヌ民族博物館／旭川市博物館／帯広市図書館／帯広百年記念館
萱野茂二風谷アイヌ資料館／斜里町立知床博物館／社団法人北海道ウタリ協会
北海道開拓記念館／財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構

●写真提供、出典等（敬称略）

表紙：中川潤

写真1：『蝦夷島奇観』（復刻版 佐々木利和，谷澤尚一研究解説）雄峰社

写真9, 10, 11, 13, 14, 26：財団法人アイヌ民族博物館

写真3, 15, 17：旭川市博物館

写真4, 22：社団法人北海道ウタリ協会

写真5, 6, 7, 19-1：『蝦夷生計図説』（復刻版 河野本道，谷澤尚一研究解説）北海道出版企画センター

写真8：斜里町立知床博物館

写真18, 25：帯広市図書館，帯広百年記念館

写真20：北海道開拓記念館

図2：山本祐弘『樺太アイヌの住居』をもとに作図

図3, 4：高倉新一郎『アイヌ家屋の調査』をもとに作図

上記以外の写真は当センター所蔵写真（写真19-2は久保寺逸彦文庫）



この小冊子は、環境に配慮した用紙を使用しています。
古紙配合率100%・白色度70%

◆発行—平成11年3月

◆編集—北海道立アイヌ民族文化研究センター
HOKKAIDO AINU CULTURE RESEARCH CENTER
〒060-0001 札幌市中央区北1条西7丁目 プレスト1・7 5階
TEL.011-272-8801

ハシドイ
(ドスナラ)



pon

kanpi-sos

ポン カンピソシ



5

◆ アイヌ文化紹介小冊子



祈る



本書のねらい

北海道立アイヌ民族文化研究センターでは、国連の定めた「世界の先住民の国際10年」への取り組みの一環として、1995（平成7）年度より、アイヌ文化を紹介する小冊子を毎年1冊ずつ刊行しています。

これまでに、1冊目に「言葉」を、2、3、4冊目ではそれぞれ「衣」、「食」、「住」を紹介してきました。

5冊目では「イノミ」と題して、信仰についてとりあげました。神に対する考え方や神と人間との関係、先祖に対する考え方などについて説明しています。さらに、アイヌの信仰について学ぶための文献などを紹介しています。

ポン カンピ ソシ
pon kanpi-sos → 小冊子
小さい 紙 束

イノミ → お祈りする、お祭りする
inomi

目次

[1] アイヌの信仰のあらまし	2
1 アイヌの信仰	2
2 様々なカムイ	8
3 カムイを送る	13
4 先祖に対する考え方	16
[2] いろいろな儀式	18
1 カムイに祈ること	18
2 いろいろな祈りごと	26

[1] アイヌの信仰のあらまし

1 アイヌの信仰

アイヌの信仰は、どのような考えにもとづいていたのでしょうか。

アイヌの信仰では、あらゆるものには“魂”が宿っていると考えられました。なかでも、植物や動物など人間に自然の恵みを与えてくれるもの、火や水、生活用具など人間が生きていくのに欠かせないもの、あるいは天候など人間の力の及ばないものなどをカムイとして敬^{うやま}いました。

そして、この世界は人間とカムイとがお互いに関わりあい影響を及ぼしあって成り立っているものだと考えられていました。

1. Ainu Religion

What is the basis of the Ainu religion?

Ainu beliefs hold that everything is endowed with a spirit. These beliefs hold respect for *Kamuy* including plants and animals which give of themselves for human use, fire, water, daily living implements, etc., and forces beyond human control, such as the weather.

It is also believed that these interactions between humans and *Kamuy* are the basis of this world.

Outline of Ainu Religion

このような考え方は、自然との関わりを深く持っていた昔の暮らしにとっては、生活に必要なものを手に入れたり使いこなしたりするための知識やしきたり、あるいは天災や病気への心構えなどを表すものでした。

「カムイ」というアイヌ語は、日本語では「神」などと訳されることが多いようです。けれども「カムイ」という言葉は、日本語の「神」や「仏」などとは、ある程度意味の重なる部分もありますが、一致するものではありません。

そこで、この小冊子では「カムイ」というアイヌ語を用いることにします。

It is tremendously difficult to translate the Ainu word *Kamuy*. None of the usual renderings "gods", "spirits", "deities", and the Japanese "Kami (gods)" captures its meaning. Therefore, in this brochure the word is left untranslated.

ここ100年あまりの間に、アイヌの信仰をめぐる環境も大きく変化しました。それは、周辺の他の民族や社会と同じように、近代化の中で人々の生活様式が変化し、自然環境との関わり方も変わったことなどによりますが、アイヌの場合は、明治時代以降の同化主義のもとで、アイヌの伝統文化を否定する風潮が強まったことや、伝統的な儀式を行なう機会が減ったりしたこともその一因です。

そうした中でも、折りにふれて昔通りの儀式を行っていた人、カムイへの祈りの言葉やしきたりなどを記録した人、あるいは昔ながらのしきたりや考え方を暮らしのよりどころとして生活してきた人などは少なくありませんでした。



写真1 ^{なべさわもとぞう}鍋沢元蔵さんが記録したノートをもとに1966年に刊行された『アイヌの祈詞』(門別町郷土史研究会)

For the past century, the environment surrounding Ainu religion has undergone dramatic changes, as is the case in other ethnic groups in surrounding areas. Policies of assimilation since the Meiji era have led to less value being placed on the Ainu traditional culture and have lessened the opportunities to engage in rituals.

However, some people continue to conduct customs in the traditional manner; others record prayers to *Kamuy*; still others actively follow their traditional customs and beliefs.

現代では、日本に住んでいる他の多くの人々と同じように、アイヌも一人ひとりが様々な信仰観を持って生活しています。

一方で、今日のアイヌ文化の復興・継承の動きともあいまって、アイヌの精神文化についても関心が高まり、近年、各地でアイヌ独自の信仰や儀礼を学ぶ動きが見られたり、昔の儀式が復活したり、あるいは新たに創造されたりしています。

この小冊子では、アイヌの信仰について、明治から昭和初期に生まれ育った人たちが伝統的なこととして意識してきたことを中心に説明します。



写真2 北海道ウタリ協会登別支部の人たちによって復活した儀式の様子
(第5回・1991年)

Today, as in Japanese society at large, Ainu live their lives according to various religious beliefs. Still, with the recent movement to restore and preserve Ainu culture, interest in Ainu spiritual culture has increased.

In recent years, Ainu beliefs and rituals have been taught in various places. Some traditional rituals have been restored, some created.

This brochure describes traditions as understood by people born and raised between the Meiji era and the early Showa era.

アイヌの信仰についての昔の記録

アイヌの信仰の歴史について、これまでにどのようなことがわかっているのでしょうか。

今から200～300年ほど昔の文献には、現代のアイヌが行なっている儀式とほぼ同じような儀式の様子が描かれていたり、信仰に関係するアイヌ語が記録されたりしています。

さらに古い時代のことは、文献の中に信仰に関係する記録が見られたり、遺跡から祭具が発掘されたりしていますが、まだはっきりしたことはわかっていません。

また周辺の民族の儀礼に互いに共通する点があることから、周囲の地域と影響を及ぼしあってきたことも指摘されていますが、似たような要素があるという以上に十分な根拠が示されているものではありません。アイヌの信仰も、世界の他の民族と同じように長い年月を経て今日に至ったものだと思われませんが、その成り立ちや時代ごとの変化などについては未解決なままといえます。



写真3 上ノ国町の遺跡から発掘された祭具（23ページ参照）

アイヌの信仰には、決まった教義や教典があるわけではありません。儀式の作法やカムイに対する意識などには、多くの地域で共通してみられる決まりごとや考え方がある一方で、地域ごとに、あるいは人によって異なる点もあります。

また、どの民族の伝統文化についてもありえることですが、みだりに人に話したり聞いたりしてはならないことや、その人の年齢や性別、立場によってそれぞれに、ふるまいや関心の持ち方を慎むべきことがあったりします。

In many regions, the manner in which rituals are conducted and awareness of *Kamuy* are similar, but there are variations to this in some regions and among individuals. Ainu consider it sacrilegious to talk about religion, or to listen to someone talk about it. Certain behaviors are proscribed, depending on a person's age, gender and status.

2 様々なカムイ

どのようなものをカムイと考えるかは、地域や個人によって様々です。大まかには火や水、太陽や月、動物や植物などのほか、地震や雷などの自然現象や病気もカムイであったり、カムイが引き起こしたこととして考えられました。

また、このような自然のものばかりでなく、人間の手で作られた舟や炉鉤、臼や杵などの道具類もカムイであるといわれています。

カムイたちは、いつもはカムイの世界で人間と同じような姿で暮らしており、彫刻や刺しゅうなどの手仕事をしたり、結婚して家族を持ったりしながら、仲間たちと一緒に暮らしているといわれています。



写真4 クマ

2. Various kinds of *Kamuy*

Ideas of *Kamuy* vary with regions and individuals. It has been commonly said that *Kamuy* are fire, water, sun, moon, animals and plants. Some *Kamuy* are thought to cause disease, earthquakes, thunder and other natural phenomena.

In addition to these naturally occurring *Kamuy*, man-made implements –boats, hearth hooks, mortar and mallet–are believed to be *Kamuy*.

When *Kamuy* inhabit their own world, they take human form.

カムイは人間と同じように様々な個性と喜怒哀楽きどあいらくの感情を持ち、人間に対して良い行ないをするものばかりでなく、悪いことをするものもいると考えられています。

カムイは、何らかの役割を担ったり、遊びに行きたくなくなったりして、カムイの世界から人間の世界へやって来ます。そのときに動物や植物、あるいは道具や自然の現象などに姿を変えるのだといわれています。



写真5 キツネ

Kamuy have emotions and individual characters as well as humans do. Some are believed to act favorably toward humans, others unfavorably.

Kamuy come to human world when they have some roles and wishes to visit. At such times, they dress according to the role they wish to play. For example, the Bear-*Kamuy* put on a bearskin.

① 人間の生活に役立つカムイ

カムイとは人間にとって、どのような存在なのでしょう。

動物の肉は食料になり、毛皮は衣服になったりします。また植物は食料や薬となるほか、道具を作る材料になったり、その繊維が衣服の材料になったりするものもあります。

このようにカムイには人間の生活に必要なものや便利なものを与えてくれたりするものがあります。



写真6 樹皮をはぐ様子

① *Kamuy* beneficial to humans

It is believed that some *Kamuy* provide humans with necessities for life and offer conveniences. Animals provide meat for food and fur for clothing. Plants serve as food, provide medicines, and are used to make tools and fabric.

人間が無事に暮らせるように守ってくれたり、人間の力だけでは足りないところを補ってくれたりするカムイもあります。

火のカムイは、大切で身近なカムイとされています。火は人間に温もりや^{あか}灯りを与え、その熱で煮炊きをさせてくれるばかりでなく、人間の訴えや願いを聞き入れて他のカムイへ伝えてくれます。もし、人間の祈り言葉に足りないところがあれば、それをうまく補う役目も果たしてくれます。

シマフクロウは、村を見守る役目があるカムイとされ、アイヌの人々からとても尊敬されています。

植物のカムイには、魔物を近づけない力を持つものがあります。



写真7 炉で燃える火



写真8 シマフクロウ

Some *Kamuy* protect humans, so that they can live in safety. Other *Kamuy* offer assistance beyond human ability.

② 恐ろしいカムイ

人間の世界へは、恵みを与えてくれる良いカムイばかりでなく、人間が太刀打ちできない恐ろしい力を持ったカムイもやって来ます。人間の命を奪ってしまうような天然痘てんねんとうなどのカムイは、人間の村に病気を流行らせることを目的にやって来て、その使命を果たさないうちはカムイの世界へ帰らないといわれています。また、暴風雨や雷なども大きな破壊力を持っており、人間が畏れ敬おそって接しなければならないカムイたちであるといわれています。

このような恐ろしいカムイに対しては、早くここから立ち去ってほしいと祈ったり、みだりに自分の村を襲わないよう願ったりしました。

② *Kamuy* with evil spirits

In Ainu beliefs, there are *Kamuy* with good spirits and *Kamuy* with evil spirits. The purpose for which the Smallpox-*Kamuy* comes to human world is to spread the disease, and until the mission has been fulfilled, the *Kamuy* can not go back to their world. Storm and thunder can bring catastrophe, so humans treat them as *Kamuy* with veneration. Therefore, Ainu pray that these *Kamuy* may leave quickly.

3 カムイを送る

人間の世界での役目を果たしたカムイは、いずれ家族や仲間が待っているカムイの世界へ帰ることになります。その際、人間は、自分たちの生活に必要なカムイたちが再びやって来ることを願い、カムイが喜ぶとされる木幣（22ページ参照）や酒、団子や干したサケなどの食べ物と一緒に感謝の祈り言葉を捧げてきました。

それらを受け取ったカムイは、その家族や仲間に対して人間に親切にされた体験を聞かせます。そうすることで、そのカムイはもとより、他のカムイたちもきちんとした礼儀を持って祭ってくれる人間のところへ遊びに行きたくなると考えられています。

このように丁寧^{ていねい}に送られて祭られたカムイは、さらに立派なカムイになり、仲間たちからも尊敬されるのだといわれます。

人間が動物などを捕らえて肉や毛皮を手に入れるのは、その動物の命を奪うこととなりますが、それは肉体から“魂”を解き放つことでもあると考えられました。人間はその肉体を受け取り、“魂”をカムイの世界へ送り帰すこととなります。



写真9 カムイを送る儀式に供えられたごちそう

3. Sending *Kamuy* back to their world

Kamuy return to their world when their missions are completed. At that time, humans pray for beneficial *Kamuy* to visit again and send them back to their world by addressing gratitude and offerings.

口頭文芸に語られるカムイ

アイヌの信仰観をうかがうことのできる資料のひとつに、アイヌの人々が伝承してきた口頭文芸があります。

アイヌの口頭文芸の内容や語られ方は様々ですが、ここでは、カムイがカムイの世界や人間の世界で体験した自分の身の上を物語るという形をとるものの中から、人間の世界へやって来たシマフクロウのカムイが物語るものの一場面を紹介します。

私が人間の村の上を通りかかると、子供たちが弓に矢をつがえて私をねらっていました。見ると、その中に立派な人の子孫らしい子供がいます。身なりはあまりよくないのですが、品格のある子で、私をねらっています。私は美しく飛んできたその子の矢を受け取ってやり、ひんきやく賓客としてその家に招かれ、ていねい丁寧な接待を受けてカムイの世界に送ってもらいました。

人間が祝い事などでお酒を造ったときは、木幣や酒を私に送ってくれるので、私も人間たちの村を見守っているのです。

*上の文は『アイヌ神謡集』に載っている物語を、当センターで要約したものです。

→ アイヌの口頭文芸については、『アイヌ文化紹介小冊子6 口頭文芸』を参照してください。

紹介した場面には、人間がシマフクロウを射止めてからその“魂”をカムイの世界に送り返した後の様子までが描かれています。

矢が当たるシーンでは、カムイが自らすすんで当たったように語っています。またカムイがどのような人間の矢を受けるのかということや、人間がカムイへ敬意を払いつづけることで村の安全が守られるという考えなども読み取ることができます。

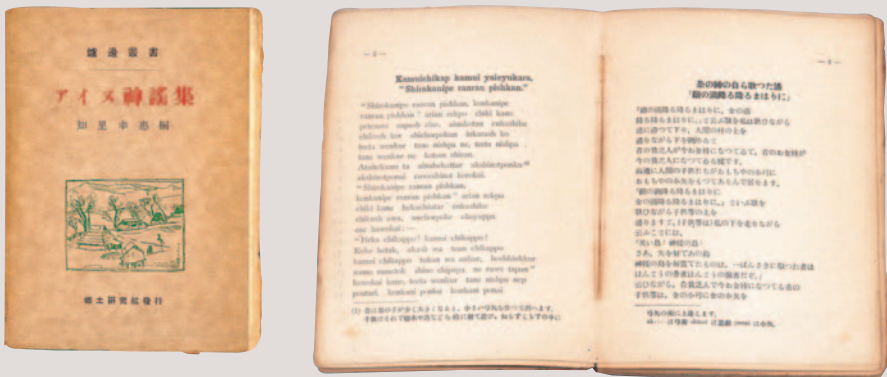


写真 10 1923年に刊行された知里幸恵編『アイヌ神話集』（郷土研究社）

4 先祖に対する考え方

① 死んだ人のいくところ

アイヌの人々は、人間が亡くなった後は「死後の世界」へ行くと考えました。

そこでは、亡くなった人たちが生前と同じように村を作って、生活しているといわれています。その一方で、あの世の様子などはあまりよくわからないのだという人もいます。



写真11 「死後の世界」の入り口といわれた洞穴のひとつ（白老町）

4. Beliefs in ancestors

① The afterlife

In Ainu beliefs the deceased go to "the world after this world", where they make villages as they did in life. While some others say that the details of the afterlife are not so clearly known.

② 先祖に対する意識のあり方

「死後の世界」で暮らす人々は、子孫から送られる酒やタバコや料理などの供物を受け取ることで、豊かな生活を送ることができると考えられています。

人が亡くなったときは、その人が「死後の世界」での暮らしに使うための衣服、道具、家などを傷つけたり燃やしたりしました。そうすることで、それらは「死後の世界」へ送ることができると考えられました。

先祖の供養は、家の中やその周囲で行なうので、墓参りという習慣はありませんでした。

② Regarding ancestors

Offerings of liquor, tobacco, and prepared foods etc. are given to ancestors. It is believed that by giving these things the ancestors' lives will be enriched in "the world after this world".

[2] いろいろな儀式

1 カムイに祈ること

カムイへの頼みごとやお礼など、人間から伝えたいことがあるときにカムイに対する祈りを行ないます。

これらの祈りは、ちょっとした頼みごとから集落全体の安全などを祈るものまで、様々な形で行なわれます。また、日常生活のいろいろな場面で行なうもの、舟を作ったり家を建てるなど大切なことがらの際に行なうもの、あるいは豊漁の祈願やそのことに対する感謝のように行なう時期が一年の中である程度定まっているものがあります。



写真 12
さいだん
祭壇で祈る男性

1. Praying to *Kamuy*

Whenever Ainu wish to convey something to *Kamuy*, such as requests or thanks, they pray. Prayers are a part of regular life and also use on special occasions, such as the building of a boat or a house. Some prayers are for particular seasons, such as those for big fish catches.

A Variety of Rituals

カムイに祈る儀式のときには、年齢や性別によって、その儀式の中での役割が決まっていたり、制限されていたりすることがあります。

男性には、カムイへ捧げるための木幣を削って祭壇さいだんを作ったり、祈り言葉を唱える役目があります。特に大切なカムイへの祈りには、十分に経験を積み、しきたりをよく知っている人でなければ執り行なえないものがあります。

女性はカムイへ捧げるための酒や料理を準備します。酒を汲んだり注いだりするにも作法があり、しっかりとした振る舞いのできる女性とその役にあたりました。



写真13 木幣を作る



写真14 酒を作る

When Ainu conduct prayers or rites, their roles are assigned or limited, depending on their age and sex.

① 祈るところ

カムイに祈る儀式を行なう場所は、それぞれのカムイや、祈りをする理由などによって異なります。普段の暮らしの中での祈りは、家の中の炉端^{ろばた}で行ないますが、必要に応じてそのカムイのそばへ行って祈る場合もありました。外にいて何か危険が迫ったことを感じたときなどは、その場で近くの立ち木のカムイや川のカムイへ助けを求めたりするようなこともあります。

比較的に重要な儀式のときには、家から少し離れた場所に設けた祭壇へ行き、祭るカムイに新しい木幣を捧げて祈りました。祭壇は家ごとに設けることもあれば、川辺や浜辺、山などにその集落の祭壇を設けて、祈る場所を決めておく場合がありました。ただし、社^{やしろ}や教会のような建物を作ることはありませんでした。

① Places to pray

The places to pray vary depending on the *Kamuy* appealed to and the purpose for the prayer. The prayers and rituals are usually conducted around the hearth. And in case of necessity some rituals are held at an alter outside.

大きな儀式では、性別や年齢、知識や経験の違いなどにより、家の中や祭壇の前での席が決められていました。同じような目的で行なう儀式であっても、それぞれの地域や人ごとに多少の違いが見られるようです。



写真 15 - 1 祭壇（白老町：大正から昭和の初めころ）

 このほかにも、阿寒地方の祭壇の写真をこちらで見ることができます。

② 祭具

カムイへ祈るときには、これまで紹介してきた写真に見られるような様々な祭具が使われます。用いる祭具の種類や大きさ、アイヌ語の名前などには祈りの内容や地域によって差があります。ここではそれらの中から、比較的重要とされたり、博物館などで展示されることの多いものを紹介します。

木幣は、ヤナギやミズキなどを切って皮をはいだものの外側を削って房のようにしたものです。様々な形状のものがあり、神へ捧げたり、魔ものを払うときに使ったり、その木幣の本体を「家を守るカムイ」として祭ったりと、いろいろな用途があります。

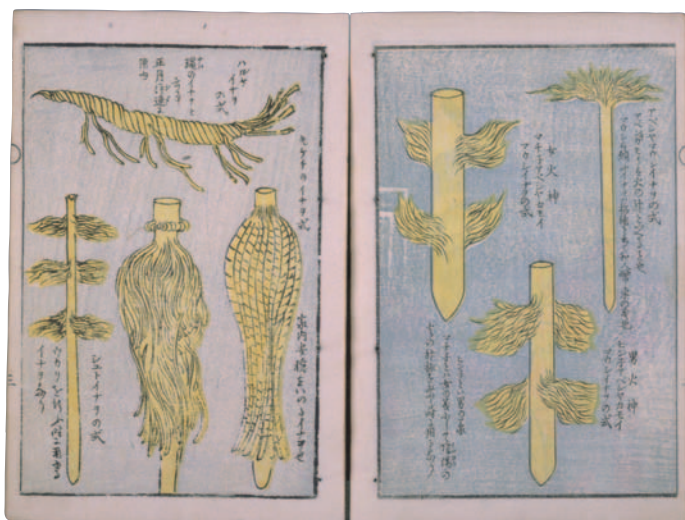


写真16 いろいろな木幣

→ このほかにも、儀式のとき身につけるもののいくつかを、『アイヌ文化紹介小冊子8 民具』の12～13ページで紹介しています。

② Ritual utensils

A variety of utensils are used in Ainu rituals. These photographs show some examples.

彫刻が施されたへら状のものは、カムイや先祖へ酒を捧げるために作りました。へらの先端を酒につけ、その滴を火のカムイや木幣などにふりかけます。



写真17 酒を捧げるためのへら

カムイに捧げる酒を入れる椀は、食事用の椀と区別して用いられました。写真18は、椀を台に乗せ、その上に酒を捧げるためのへらを置いた状態です。



写真18

Photo 16: The sacred sticks are decorated with shavings. They have various uses :to offer to *Kamuy* and to exorcise evil spirits. And also sticks themselves are *Kamuy*.

Photo 17: sticks to offer liquor to ancestors and *Kamuy*

Photo 18: bowls for sacred liquor

祈るときの手順

カムイへ祈る儀式の手順や作法も地域や個人によって様々ですが、ここでは、静内町の葛野辰次郎さんが執り行なった儀式の流れを見てみましょう。



写真19 ヤナギ
木幣にするための木を選び、必要な分を切ってきます。

A ritual being conducted by an elderly man.

写真 20

儀式の当日、木幣を削り、炉や家の外に設けた祭壇に木幣を立ててから火のカムイへ祈ります。



写真 21

外に出て、祭壇の前でいろいろなカムイへ祈ります。

写真 22

炉の前にもどり、火のカムイへ感謝の言葉を唱え、最後に火のカムイへ木幣を捧げます。



2 いろいろな祈りごと

カムイへの祈りは、いろいろな目的のもとに行なわれます。ここでは、そのいくつかの儀礼をとりあげます。

① クマのカムイを送る儀式

クマのカムイの“魂”は、山で獲った人がその場で、あるいは仕留めたクマを村へ運んでから皆で送ったりしました。初春に冬眠中の親グマを獲ったとき、その巣穴に仔グマがいた場合にはその仔グマを生け捕りにして、村で2年ほど飼育してからカムイの世界へ送る儀式を行なうことがあります。



写真 23 『蝦夷島奇観』に描かれたクマを送る儀式の様子

2. Various prayers

① The rituals sending Bear-Kamuy to their world

Ainu return the souls of captured bears and those raised in the village back to the *Kamuy* world. Rites for the latter have special importance and are regarded as particularly important sending back ceremonies. Many people are invited from neighboring villages.

村の人々が大切に仔グマを育て、たくさんの土産を持たせてカムイの世界へ送り帰すことで、それに感謝したクマのカムイが再び人間の世界へ訪れることを期待したものです。このような儀式は、カムイの“魂”を送る儀式の中でも特に重要な儀式とされ、近隣の村から大勢の人を招いて盛大に行ないます。

このようなクマを送る儀式について、「何かに捧げる“いけにえ”としてクマを殺している」と説明されていることがありますが、決してそのように考えられていたわけではありません。

② サケを迎える儀式

サケの漁期が始まる前にその年が豊漁になることを祈り、漁期の終り頃には豊漁だったことを感謝する祈りをします。



写真24 そじょう 遡上するサケ

② The ritual welcoming salmon

Before the fishing season for salmon, Ainu pray for a big catch and at the end of the season they offer their gratitude for the catch.

③ 伝染病のカムイを避ける祈り

伝染病が流行りそうなときや流行ったときには、臭いの強い植物を家の戸口や窓、庭先などに置いたりして、伝染病のカムイがよその土地へ行ってくれるように祈ります。



写真25 ギョウジャニンニク

④ 先祖供養の儀式

先祖の暮らす「死後の世界」へ供物を届けてもらえるよう火のカムイに頼みます。お菓子や果物は砕いたり割ったりして供え、タバコもちぎって撒きます。このとき、自分の名前や先祖の一人ひとりの名前をはっきり口に出さないと、供物はきちんと届かないともいわれています。



写真26 先祖供養する女性

③ A Prayer to ward off the Epidemic-Kamuy

By putting herbs with strong odor at a front door and windows, Ainu pray that the Epidemic-Kamuy may stay away.

④ Rituals for ancestors

●協力（敬称略）

上ノ国町教育委員会 葛野辰次郎 財団法人アイヌ民族博物館
静内町アイヌ民俗資料館 社団法人北海道ウタリ協会登別支部
萩中美枝 村岡優美

●写真提供、出典等

表紙：後藤昌美

写真1：門別町郷土史研究会編『アイヌの祈詞』門別町郷土史研究会 1966年

写真2：社団法人北海道ウタリ協会登別支部

写真3：上ノ国町教育委員会

写真4：山本盛雄

写真5：塩谷秀和

写真6, 16：松浦武四郎『蝦夷漫画』（児玉マリ所蔵）

写真7, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15-1, 18, 24：財団法人アイヌ民族博物館

写真8：松野有秀

写真10：知里幸恵編『アイヌ神謡集』郷土研究社 1923年

写真17：ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館資料

写真15-2, 19：当センター（15-2は久保寺逸彦文庫）

写真20, 21, 22, 25, 26：静内町アイヌ民俗資料館

写真23：秦憶麿『蝦夷島奇観』（復刻版 佐々木利和、谷澤尚一研究解説）雄峰社 1982年



この小冊子は、環境に配慮した用紙を使用しています。
古紙配合率100%・白色度70%

◆発行—平成11年11月

◆編集—北海道立アイヌ民族文化研究センター
HOKKAIDO AINU CULTURE RESEARCH CENTER
〒060-0001 札幌市中央区北1条西7丁目 プレスト1・7 5階
TEL.011-272-8801



pon

kanpi-sos

ポン カンピソシ



6

◆アイヌ文化紹介小冊子 **ウエネウサラ** 口頭文芸



本書のねらい

北海道立アイヌ民族文化研究センターでは、国連の定めた「世界の先住民の国際10年」への取り組みの一環として、1995（平成7）年度より、アイヌ文化を紹介する小冊子を毎年1冊ずつ刊行しています。

これまでに、1冊目「イタク 話す」で言葉を、2冊目「イミ 着る」、3冊目「イペ 食べる」、4冊目「チセ 住まい」で衣・食・住を、5冊目「イノミ 祈る」では信仰について紹介してきました。

この6冊目では「ウエネウサラ」と題して、口頭文芸についてとりあげました。アイヌの口頭文芸のあらましについて、物語の例などを挙げながら紹介しています。またアイヌの口頭文芸について学ぶための文献や、実際の語りの様子などを聞いたり見たりできる資料や施設などについて紹介しています。

ポン カンピ ソシ
pon kanpi-sos → 小冊子
小さい 紙 束

ウエネウサラ → (物語、よもやま話などを)語り合う／語り合い楽しむ
uenewsar よもやま話、世間話

目次

[1] アイヌの口頭文芸のあらまし	2
口頭文芸とは	2
歴史と現状	4
[2] さまざまな口頭文芸	8
英雄叙事詩	10
神謡	16
散文説話	20

[1] アイヌ口頭文芸のあらし

口頭文芸とは

アイヌ民族が育んできた文化の一つに、様々な口頭文芸こうとうぶんげいがあります。

口頭文芸とは、文字で書かれたものを読むのではなく、語り手の話を聞いて楽しみ味わうことで伝えられてきたものです。口承文芸こうしょう、口承文学などとも呼ばれます。文字で書かれた文芸と違って、同じ話でも語り手によって、また同じ語り手でもその場やその時によって、語り方や表現などにその人その時ならではの味わいが含まれるのも特徴です。

Oral Literature

Among the cultural assets the Ainu people have created and passed on is the tradition of oral literature which was developed in various forms and styles. As opposed to the reading of written texts of literature, such oral literature produces a richness in artistry and entertainment for the audience who then transmit such traditions to the following generations. In contrast to written literature, even performances of the same tales characteristically vary greatly depending upon the reciters, occasions, the timing of performances, the aesthetics of the recitation technique as well as on expressions generated ad lib during the recitation and performance.

Introduction to Ainu Oral Literature

アイヌの文芸の中で口頭で演じられるものには、広く見ると、昔話や神話、伝説などの物語のほか、歌謡、なぞなぞ、あらたま^{あいまつ}った場での挨拶の言葉、祈りの言葉など様々なものがあります。

この小冊子では、これらの中から、物語を中心に紹介します。

Within the wider spectrum of orally performed Ainu literature, in addition to such tales as are found in folklore, mythology and legend, there appear genres and styles of various sorts including songs, riddles, words exchanged in the formal course of salutations and greetings and prayers. This handbook sheds lights on Ainu oral literature focusing on that literature which is representative of stories.

歴史と現状

明治時代以降、日本語による教育をはじめとする同化政策のもとで、アイヌ語は日常生活では次第に使われなくなり、アイヌ語の口頭文芸が語られる機会や、語ることのできる人、聞いてわかる人も少なくなっていました。

儀式のときや大人たちの集まりの場などでは、集まった人々がごく自然に様々な口頭文芸を語りあい楽しんでいましたが、子どもたちには敢えてアイヌ語を教えようとしない人が多かったといえます。また、これはアイヌに限ったことではありませんが、ラジオ、テレビなどの娯楽が登場することで、親や年寄りから物語を聞く機会が減っていったとも言われています。

このような時代の中でも、自分の知っている物語を自ら記録したり、周囲のお年寄りたちから物語を聞いて書きとめた人たちがいました。こうした採録に協力を惜しかなかったお年寄りもいましたし、ふだんの暮らしの中で様々な物語を語りあうことが途絶えたわけでもありませんでした。

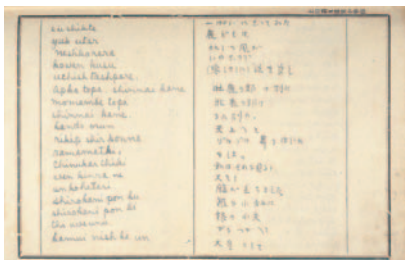


写真1 知里幸恵遺稿ノート

1909 (明治42) 年から1922 (大正11) 年まで旭川に住んでいた知里幸恵さんが自分の知っている口頭文芸などを書きとめたノートです。

Under the assimilation policies, including education in Japanese, which were enforced from the Meiji era onward, the Ainu language has gradually disappeared from daily use. This disappearance has resulted in much less opportunity for the performance of the Ainu literary tradition and in the almost entire loss of the ability to perform or to appreciate the literature on the part of the Ainu people.

People had spontaneously and naturally recited various sorts of oral literature during ritual occasions and among gatherings of adults, but we may suppose many of those adults dared not to teach the Ainu language to the children. As has been the case with other ethnic groups, the advent of alternative forms of entertainment, most notably radio and television, reduced the opportunities for children to hear the tales recited by their parents or grandparents. Despite the cultural changes of the times, some people made written records of tales they have memorized and the tales they had heard from the elderly people living in the communities. Elderly people responded collaboratively to such initiatives as these, and therefore the tradition of reciting various stories did not entirely cease in their daily lives.

近年、アイヌ語の復興や継承が唱えられるようになり、口頭文芸をめぐる環境も大きく変わりました。各地でアイヌ語やアイヌ文化を学ぶ教室などが開催されるようになり、それらの場で教材や学習の手引きとして物語が用いられています。口頭文芸の公演なども行なわれるようになりました。アイヌ語の辞書や入門書なども刊行されるようになり、物語を録音した学習用の教材や、長年にわたって採録した物語をまとめたシリーズなども刊行されています。



写真2 アイヌ民族博物館主催の「アイヌ文化教室」で物語を語る上田トシさん

In recent years, the climate surrounding oral literature has changed as seen in the increasingly renewed need to revive the Ainu language. Educational programs for studying Ainu language and culture provide venues where the tales are used as textbooks and guidebooks for learning. Furthermore, the Ainu oral literature has come to be performed for the public. Ainu language dictionaries and handbooks for introductory language courses have been published and tapes of tales are used for learning. In addition, tapes of stories which have been collected over a period of many years have been released in serial form.

アイヌ口頭文芸の調査・研究の歴史

アイヌの口頭文芸を記録したり調べたりすることはいつごろから行なわれてきたのでしょうか。

早い例では、18世紀頃の日本の江戸時代の文献に少しずつですが記述が見られます。その後では、例えば1792年に書かれたとされる上原熊次郎^{うえはらくまじろう}の『もしほ草』には、物語のアイヌ語原文と、その一部を日本語に訳したものなどが記されています。

明治以降になると、物語のアイヌ語そのものを筆録し訳を付け、さらに物語の様々な種類に注目してそれらの区分や特徴について研究することが行なわれるようになりました。イギリス人の宣教師ジョン・バチェラー(1854～1944)は、1880年頃から主に北海道の南西部を中心にアイヌ語やアイヌ文化を記録し、いくつかの物語を採録しています。



写真3 もしほ草(復刻版)



20世紀の初頭、ポーランド出身のブロニスワフ・ピウスツキ（1866～1918）は、主にサハリン（樺太）でアイヌ語やアイヌの民俗についての調査を行ない、口頭文芸を記録しました。このとき現在のレコードにあたる蠟管^{ろうかん}を使って録音を行っており、これが現在確認されるアイヌ語の音声記録としてはもっとも古いものとされています。

同じ頃から、^{きんたいち きょうすけ}金田一京助（1882～1971）は、北海道各地やサハリンでアイヌ語の調査を行ない、多くの物語を採録してそれらの研究を進めました。その弟子の^{くぼでらいつ}久保寺逸彦（1902～1971）や^{ちりましまほ}知里真志保（1909～1961）はさらに、様々な種類の物語を採録し、その整理・調査を行ないました。これらの成果は、現在までの研究に大きな影響を遺^{のこ}しています。



写真 4
久保寺逸彦が1935（昭和10）年に録音した
レコード（北海道立図書館所蔵）



[2] さまざまな口頭文芸

アイヌの口頭文芸には、メロディーを伴って謡うように語るものもあれば、それよりは比較的単調に、話し言葉のようにして語るなど、様々な語り方をするものがあります。また物語の内容にもいろいろな種類があります。これらの種類の区別のされ方は、おおまかには各地域で共通するところはあるものの、違っているところもあります。アイヌ語での呼び名も地域によって異なります。

現在のところ、アイヌの口頭文芸のうち物語については、一般には大きく3つに区分して説明され、それぞれ、「英雄叙事詩」「神謡」「散文説話」などの呼び方が用いられています。この小冊子でも、この区分に従って説明することにします。

Ainu oral literature is performed using different styles of recitation. Some tales are sung to melodies while others are recited in a relative monotone similar to ordinary speech, and the content of the folkloric tales varies greatly. The categories of oral literature are designated in almost the same manner in various regions. There are, however, different ways of categorizing material according to content and furthermore, varying Ainu words are used to designate and describe respective categories among different regions.

Ainu oral literature in which stories are related is broadly divided into three general categories, namely those of "heroic epics," "mythic epics" and "prose tales." This handbook describes each of the three categories in accordance with this classification by genre.

「ユーカラ」という言葉

アイヌの口頭文芸の呼び名として、「ユーカラ」という語が比較的よく知られているようです。

この「ユーカラ」という言葉は、英雄叙事詩を指す呼び名の一つである「ユカラ」から来ているものと思われます*。

この小冊子でも述べているように、アイヌの口頭文芸には様々な種類があり、それぞれにアイヌ語での呼び名も異なります。同じ英雄叙事詩でも、地域によってはサコロベ、ハウキなどと呼ばれるものがあります。

したがって、アイヌの口頭文芸全体をさして「ユカラ」と呼んだり、あるいはそれをアイヌの口頭文芸の代表的なものとして紹介したりするのは適切な表現とは言えません。

* 「ユカラ」を現在一般的に用いられているアイヌ語のローマ字表記法で書くと *yukar* となります。最後の *r* は、後ろに母音が付かない音です。現在のカタカナ表記では、このような場合、小文字で「ラ」と書いて *ra* 「ラ」とは区別します。また、この言葉のアクセントは「ユ」のところにあるため、この音がやや長く「ユー」と聞こえることがあります。

"Yukara"

The term "yukara" may be relatively well known as a word referring to Ainu oral literature. The word "yukara" presumably derives from "yukar," which is one of the terms referring to the heroic epics.

As discussed in this handbook, there are various categories in the oral literature of the Ainu people and the Ainu words used in referring to the respective categories are different. The heroic epics, for instance, are designated differently depending on region and they are called "*sakorbe*" in one region while termed "*hawki*" in another region.

Therefore, we can argue that the use of the word "yukar" when referring to Ainu oral literature as a whole, or presenting the term "yukar" as being representative of Ainu oral literature may not be entirely appropriate.

英雄叙事詩

短いメロディーを繰り返しながら物語の言葉をのせるようにして語られます。

語るときのメロディーは、語り手がそれぞれに独自のものを持っているとされており、他の人から聞いて覚えた物語でもその人が演じるときには自分のメロディーで語ると言われています。また、物語の途中で節回しふしまわが変えられる場合もあります。

語り手や聞き手は、木の棒などを持って、座っている近くを叩きながら拍子ひょうしをとります。聞き手や、ときには語り手自身も、物語の展開に応じて短い掛け声をかけたりします。

いっばんに長大な物語が多く、語り終えるのに数十分から数時間あるいはそれ以上かかると言われています。



写真 5
英雄叙事詩を語る八重九郎さん

Heroic Epics

The main text is sung to a short repetitive melody and each reciter has his or her own melody. Even though the reciters have memorized the tale by listening to others, they may perform using their own personal melodies, and the melody could shift to another melody in the middle of the recitation. The reciter and the listeners tap out the time by beating blocks of hand-held wood while seated. The listeners, and occasionally the reciter as well, interject short, rhythmical exclamations at certain points of story development in the song.

The heroic epics are usually long, lasting a few hours or even longer, although some are as short as several minutes.

物語の内容は、空を飛んだり海にもぐったり、土の中を突き進んだりできるような、超人的な力を持つ主人公の少年が、自分の生い立ちや、冒険や恋愛や戦いなどの体験を自ら語る、といったものがこれまではよく知られています。

このような物語では、主人公たちの日常の暮らしぶりも描かれますが、例えば主人公の戦いの場面では手に汗を握るような激しい描写が繰り返されるなど、壮大で血湧き肉躍るようなストーリーのものが多いことも特徴とされています。

いっぽうで、若いときにはいさかいもしたけれど今は仲良く暮らすようになったという夫婦の物語など、必ずしも上に述べたような枠にはあてはまらない内容の物語もあります。

Among the well-known epics are the tales which deal with a young boy with the superhuman ability of flying in the sky, diving into the sea and cleaving his way under the earth. His life, adventures, courtships and battles are spoken using first person narration.

In such stories as these, vignettes of heroes' everyday lives are also presented. These include, for instance, a battle scene depicted over and over in fiery and passionate language which can cause the hands to sweat. The heroic epics are characterized by many spectacular, stirring and thrilling stories. However, not all of these tales fall into the category of heroic stories from the viewpoint of content. Some are about a married couple who led a discontented life while young but who came to live together happily eventually.

物語紹介：「鹿の角のある衣を身につけた少年の物語」*

これは釧路地方の鶴居村^{つるい}の八重九郎さんが語った英雄叙事詩の一つです。
物語のあらすじは次のようなものです。

私は小母^{おぼ}に大事に育てられていました。私の家の家宝を置くところ、寝台の枕もとに、牡鹿が立っているのとそっくりな、鹿の角のある衣が置いてありました。毎日寝ないで番してくれていた小母が、あるとき眠くてたまらない様子でいるうちに眠ってしまったので、私はその衣の中に身を入れて、鹿の姿になって外へ出ました。そして、人は行ってはいけないという道を行って、神の遊び場に着きました。池に飛び込んで泳いだりしていたら、男たちが騒いでやってきます。中に大きな男が一人います。男たちは私を見つけて、「鹿だぞ、射止めろ」と矢を撃ってきます。私はそれを角でぼんぼんと受けて、一発も体にあたらせなくて、角を振りまわして向かって行くと、男たちは逃げてしまいました。大きな男は向かってきたけど、角ですくて池の中に逆さまにして沈めてやりました。そして家に帰ってみたら、小母はまだ眠っていたので、静かに衣を脱いで、もともと寝ていたようにして寝ました。小母は目をさますと、またいろいろご馳走^{ちそう}を作ってくれます。

そうしているうちに日がたって、私が池に沈めた大男を、悪い力を持った女が助けて自分の夫にして、みんなで私のことをやつつけてしまおうと相談していると小鳥たちが噂して教えてくれました。どうしたらいいかと思っていると、また小母は前のように眠ってしまったので、私は鹿の姿になって静かに外へ出て、その男と悪い女のいる国へ跳ねて行きました。そしたら大きな家があって、中でみんなが騒いでいます。その連中と戦争になって、戦っていると、雲に乗って雷のように音をたててやってきた者がいて、それは私を育ててくれていた小母でした。小母は、「あなたさま、私に黙って出かけるということがありますか。私が来たからには心配しないでください」と言って、相手をどンドン倒していきます。二人で戦って、連中をどんど

*アイヌの口頭文芸には、もともと題名が決まっているわけではありません。たいていは、語り手の説明や物語の内容をもとにして題名を付けています。この小冊子でも、それぞれの物語について、出典の文献をもとに題名を付けました。

ん倒し、大男と悪い女が手に手をとって逃げるのを追いかけて、悪いやつばかりの国でも戦ってやっつけて、そしたらまた男と女は逃げるので……と、どんどん戦って追いかけて行くと、いよいよ、もうそれより行くところのない世界のはずれにきました。そこで相手二人との戦いになって、激しい激しい戦いのすえ、私は大男を、小母は悪い女をたおしてしまいました。

戦いも終わった今となっては、安心して家に帰るのです。

(北海道教育委員会生涯学習部文化課編『アイヌ民俗文化財 口承文芸シリーズ 八重九郎の伝承(6)』北海道教育庁 1998年 所収。このページと18、22ページに掲載した物語のあらすじは、それぞれ出典の文献をもとに当センターで作成したものです。)



写真 6
『アイヌ民俗文化財 口承文芸シリーズ
八重九郎の伝承(6)』



この物語の、主人公の戦いに小母が加勢^{かぜい}にかけつけた場面を紹介します。左側がアイヌ語のカタカナ表記とローマ字表記、右側がその日本語訳です。*

アンコロ an=kor	私の
イレス i=resu	育ての
コンナラペ konnarpe	小母さんが
「トカイペウタリ "tokay pe utari	「こいつら
ウェン ペ ウタリ wen pe utari	悪者どもを
テケ アニ teke ani	手づから
エチウタリ eciutari	お前らを
エミンピー emimpi-	懲ら
-チャココ -cakoko	しめて
エヌキ ネ」クス enuki ne" kusu	やるぞ。」と
ハウキ カネ hawki kane	言いながら
テレケ シリ terke siri	飛ぶようす、
オッ アニ ワ op ani wa	槍 ^{やり} を持って
トカイ ベ tokay pe	そいつら
ウタリ utari	どもの
ポロ シリケ poro sirke	ほとんど
アイヌ ウタリ aynu utari	人間たちの
テッサマケ tessamake	そばを
テレケ terke	飛んで
シユプ シリ siyupu siri	走るようすに

*物語のアイヌ語原文を書き表わすとき、英雄叙事詩のようにメロディーを伴うものは、たいていの文献では、語りの様子を伝えるために、そのメロディーの区切りに合わせて改行する表記が行なわれています。この小冊子でも、出典の文献の表記に従って掲載しました。

コヤイカタヌ koyaykatanu
エヌキ enuki
キ コ ki ko
オッ エトクタ op etok ta
コマム パッケ komam patke
コヤイカタヌ koyaykatanu
エヌキ enuki
キナ ki na

恐れ入って
おり
ますと、
槍の先で
枯れ葉の散るようになるのには
恐れ入り
まし
た。

口頭文芸によく見られる表現

例えばこのページで紹介した英雄叙事詩では、この後の場面で、戦いが長く続く様子を「二年がかり／三年がかりで／戦って……」と対句のような表現を使って語られています。19ページで紹介した神話で、「着物の／（縫い目の）二つの間に／二つの光が／きらきらと光り／三つの光が／きらきらと光りました」とあるのは、縫い物が上手で縫い目がたいへん美しいことを述べるときによく見られる表現です。このような、ある様子を述べる際に似たような表現を用いることは、アイヌの口頭文芸の特徴の一つです。

また、「窓の縁の上」を言うのに「窓の縁／縁の上で」と繰り返しのような表現を使うことや、ものの呼び名などに日常の会話などで用いるものとは違った言葉を使う例もあり、後者は、特に英雄叙事詩に多く見られます。

こうした表現は、語るメロディーにのせやすい言葉になっていることも多く、それらをたくさん覚えて、場面に合わせて使いこなせるようになることで、物語をより巧みに語れるようになるのだとされています。

神謡

短いメロディーを繰り返しながら物語の言葉をのせるようにして語られます。

それぞれの物語ごとに、おおよそ決まったメロディーがあります。また、語るときには、決まった言葉が繰り返し挿入そうにゅうされることが特徴です。その言葉はそれぞれの物語によってだいたい決まっています。19ページの例では、「アテヤテヤテンナ テンナ」という言葉がそれにあたります。このほか、アオバトのカムイ*の物語で「ワオリ」、シマフクロウのカムイの物語で「フム フム カト」などの例が見られます。ただし、伝えられてきた地域や語る人が違えば、内容が同じような物語でも挿入される言葉が同じとは限りません。また、これらの言葉は神謡の主人公であるカムイの鳴き声などからきているものが多いという説もありますが、言葉の意味がよくわからない場合もあります。

一つの物語は数分で終わるものもあれば、一時間以上かかる長いものもあります。

Mythic Epics

The main text is sung to a short, roughly defined, repetitive melody for each story. The mythic epics are characterized by persistently repeated refrains which are uttered between the lines. Choruses are specifically connected with each tale, as shown in the example on page 19 in which "*ateyateyatenna tenna*" appears as a refrain.

The refrains to be inserted may differ even in tales with more or less the same content if they are narrated by different reciters who live in different regions. One may speculate that these refrains, in many cases, are onomatopoeic, featuring the sound of the cry of the "*kamuy*", a leading character of some stories, and the meanings of these refrains are often not understood. The recitation of the tales takes from a few minutes to more than one hour depending upon the individual tales.

In view of content, the mythic epics deal mostly with "*kamuy*" of all sorts including "*kamuy*" of fauna and flora, and thunder or illness. They appear as speakers using first person narration, introducing vignettes of their experiences in the world of "*kamuy*" as well as in the world of human beings.

These tales teach people the proper mindset and attitude with which they should be prepared for dealing with animals, plants and natural phenomena, and present the wisdom they should learn to acquire. In addition to these tales which have an educational purpose, some stories describe the deeds and emotions of "*kamuy*".

物語の内容は、動物や植物のカムイ、雷やあるいは病気のカムイなどさまざまなカムイが、カムイの世界や人間の世界で体験した身の上を語るものが多く見られます。また、このような物語を通じて、動植物や自然界の出来事などに対する人間の心構えなどが語られるものもあります。



写真 7

知里幸恵『アイヌ神謡集』
神謡13編のローマ字表記のアイヌ語
原文と日本語訳を載せた文庫本です。

*カムイ

アイヌの信仰では、あらゆるものに“魂”が宿っており、中でも動植物、火、水、生活道具など人間の生活に関わりの深いもの、あるいは自然現象など人間の力の及ばないものの多くを「カムイ」として敬いました。この「カムイ」というアイヌ語は、日本語では「神」などと訳されることが多いようですが、「神」などの日本語と必ずしも意味が一致するものではありません。そこで、この小冊子では、出典の文献の記述をそのまま引用する場合を除き、「カムイ」というアイヌ語を用いることにします。

→ 「カムイ」という言葉については、『アイヌ文化紹介小冊子5 信仰』の2～3ページなどを参照して下さい。

"Kamuy"

According to Ainu belief, a spirit is believed to dwell within every single being.

Ainu people have faithfully worshiped "kamuy" as referring to much of what was deeply involved in their daily lives. This includes fauna, flora, fire, water and utensils for daily use, as well as natural phenomena and other forces which are beyond human control. The term "kamuy" is often translated into "Kami(God)" in Japanese, yet the Ainu word for god is not necessarily identical to the Japanese counterpart in its semantic context. This handbook, therefore, uses the Ainu term "kamuy" without translating it except for quotations from reference sources.

物語紹介：「火の神」

これは千歳市の白沢^{しらさわ}ナベさんが語った神謡の一つです。

物語のあらすじは次のようなものです。

私は昼も夜も針仕事にいそしんでおりました。家の中にはたくさんの着物が掛かり、夫は宝物の刀の鞘^{さや}づくりに余念がありません。ある日、夫は外へ出かけたようでしたが針仕事に夢中になっていた私は見もしませんでした。しばらくすると窓の外にシジュウカラがやってきて、窓を何回もつつき、その音が言葉となって聞こえてきました。「あなたの夫は水の女神のところに行っちゃってますよ！」と。

そこで私は、祖母伝来の袋から、千里の道を走る下駄^{てっこう}と手甲を取り出し、それを付けて川を上って行きました。水の女神のところに着いた私は小鳥に姿を変えて窓のところでさえずると、声に気づいた二人は夫婦のように振り向きます。私は怒って、雲のカムイに頼んで、その力で女神の家のもの全てを外に運び出してもらい、女神の着ているものも全て取り除いてもらいました。しかし二人はそれに気づきもしないで笑っているの、夫の着物も全て取り除いてもらいました。すると水の女神もはじめて気がつき、音をたてて天に昇ってしまいました。

それから私は夫と一緒に我が家に帰り、いつものように私は針仕事、夫は彫り物の毎日を送ったのです——

と、火のカムイが物語りました。

(片山龍峯編『カムイユカラ』片山言語文化研究所 1995年 所収)

写真 8

片山龍峯編『カムイユカラ』

白沢ナベさん、中本ムツ子さんが語った神謡6編について、カタカナとローマ字のアイヌ語原文だけ記した絵本、日本語訳のほか言葉の意味などを詳しく説明した解説書、音声資料 (CD) の3点がセットになっています。



この物語の最初の部分を紹介します。火の神が針仕事にいそしみながら暮らしている様子を述べているところです。

アテヤテヤテンナ テンナ ateyateyatenna tenna

クンネ ヘネ kunne hene

トカブ ヘネ tokap hene

ケム ルエトク kem ruetok

ケム ルオカ kem ruoka

アシッコテス a=sikkotesu

アテヤテヤテンナ テンナ ateyateyatenna tenna

アカラワ アン ペ a=kar wa an pe

ウ トウ ウトウル u tu uturu

トウ イメル クル tu imeru kur

コトウイトウイケ ナ kotuytuyke na

レ イメル クル re imeru kur

コトウイトウイケ ナ kotuytuyke na

アテヤテヤテンナ テンナ ateyateyatenna tenna

ランケ カケンチャ ranke kakenca

リクン カケンチャ rik un kakenca

コエレウェウセ koerewewse

夜も

昼も

針の縫う先

針の縫う後

私は見つめました。

私の作った着物の

(縫い目の) 二つの間に

二つの光が

きらきらと光り

三つの光が

きらきらと光りました。

低い^{えもん}衣紋掛け

高い^{えもん}衣紋掛けは

たわむばかりでした。



散文説話

日常の会話に近いような語り口調、あるいはそれよりもやや単調に聞こえる口調や、逆にやや大きく抑揚よくようをつけたりする口調などで語られます。

物語には十分前後で語り終える短いものもあれば、数時間に及ぶ長いものもあります。

物語の内容は、主人公も話のあらすじもバラエティーに富んでいます。

人間が主人公で、自分の体験したことやカムイとの関わりなどを語るもの、カムイが自分の体験などを語る、内容としては神話に近いもの、英雄叙事詩と同じような、人間にはない力を持った少年を主人公とする内容の物語などがあります。

Prose Tales

The texts of the tales in this category are recited in prosaic diction which is close to everyday conversation, in a relative monotone, although some are spoken with emphasis on distinct modulation.

Some tales are as short as ten minutes while others may last a few hours.

Prose tales are characterized, from the aspect of content, by the rich variety of heroes and heroines and by the synopses. The leading roles in some tales are given to human beings who speak about their own experiences and their relations with "kamuy", while in other stories "kamuy" speak of their own experiences where the content is very similar to that of mythic epics. Superhuman boys appear as leading characters in some tales just as in the heroic epics.

Many tales in which human beings play leading roles seem to be highly educational, teaching the attitudes and values people need to embrace. The characters ultimately lead happy lives after having overcome hardships and dangers of all sorts, while humans and "kamuy" whose natures are evil are punished.

Besides the tales cited above, there are some tales which are designed to transmit to following generations events of historic importance to their community and the experiences of predecessors of immediate kinship to them. These are also spoken in the same recitation manner as prose tales.

人間が主人公になる物語には、主人公が様々な苦勞をしたり危機におちいったりしながらも、最後は、よい心がけの主人公は幸せな結末を迎え、悪者や悪いカムイは懲らしめられる、といったかたちで、社会で生きていく上での心がけを伝えるようなものが多いとされます。

自分たちが住んでいる土地での出来事や直接の先祖が体験したことを大切な事柄として伝える物語も、散文説話と同じようにして語られます。



写真 9

知里真志保『アイヌ民譚集』
散文説話の中に、「ベナンベ」と「パナンベ」を主人公とした、隣に住んでいる者が成功して裕福になったのを真似して失敗してしまうという内容の物語があります。この本はこの種類の散文説話を中心に集めたもので、ローマ字表記のアイヌ語原文と日本語訳を載せています。

物語の“語り役”

18ページの「火の神」の話の終わりは「～と火の神様が語りました」となっています。つまりこの物語は、主人公である火の神が自分で「私は」と語るかたちになっています。このように、アイヌの物語では、いっばんに主人公がその物語を自分で述べるものが多く、日本の昔話によく見られるように、主人公たちの動きが「むかしむかし、おじいさんとおばあさんがいました。おじいさんは山へ出かけました……」と語られるものはあまり見られません。

22ページの散文説話は、物語の最初は娘が主人公ですが、途中で主人公はその息子へと交代します。このような場合は物語の中で「私は」と語る役も息子に交代していきます。

物語紹介：「六重の喪服を着た男」

これは日高地方平取町の上田トシさんが語った散文説話の一つです。
物語のあらすじは次のようなものです。

（娘が語ります）私は物心ついたときから、誰もいない家に一人でいて、来る日も来る日も掃除をして暮らしていました。ある日、家に六重の喪服を着た男が現れ、一緒に暮らすようになりました。男は獵の名手で働きものだったので、何不自由なく幸せに暮らしました。私はやがて男に求婚され、子どもを身ごもるようになりました。

あるとき夫は、「実は自分はイシカりに暮らしていて、妻ももらっていたが、山獵から帰ると妻がいなくなっていた。今まで六回妻をもらったが、皆いなくなってしまったので、自分は家を出て六重の喪服に身を包み、放浪していたのだ」と告白し、一緒にイシカりに来てほしいと言いました。私は身重の体ではありましたが、夫とともにイシカリに行きました。ところが夫はそこで毒を盛られて殺されてしまいました。悲しみにくれる私の前に、夫の先妻（の幽霊）が現れ、夫は狩も上手で何をしてもよくできたので、悪い心を持った父親たちに妬まれ殺されてしまったのだ、私たちもそうやって殺されたのだ、あなたも早く逃げないと殺される、と告げられました。私は先妻たちに護られてようやく逃げ帰り、男児をもうけました。

（ここからこの息子が語ります）私が大きくなったある日、母が父のことを語って聞かせてくれました。それからというもの、私は父のかたき討ちのことばかり考えて暮らしていました。そしてあるとき、ついにイシカリへ行って父のかたきを討つことができました。村人たちは、かつて殺された父のことをたいそう気の毒がり、「罰があつたのだ」と私のかたき討ちを喜んでくれました。そして私は父の先祖を供養し、母のもとへ帰り、やがて美しい妻をもらい、子どもをもうけました。

私は祖父母も父も知らずに大きくなったのだけれど、今は先祖を供養しながらたくさんの子どもに囲まれて、「いつまでも祖父母、父を供養しておくれ」と言い残して死んでいくのです——と、一人の男が語りました。

（財団法人アイヌ民族博物館編『アイヌ民族博物館 伝承記録3・昔話 上田トシのウエベケレ』財団法人アイヌ民族博物館 1997年 所収）

この物語の最初の部分を紹介します。娘が自分の生い立ちを語りはじめるところ
 ず。

🔊 [ここをクリックすると、この部分の上田トシさんによる実際の音声聞くことができます](#)

マク イキ ワ アナン ベアネ ルウェ カ mak iki wa an=an pe a=ne ruwe ka	どうして自分がそうなのか
アエランペウテック ノ、 トウムン トウム タ a=erampewtek no, tumun tum ta	わからないけれど、ほこりの中で
ヤイエシカルンカアン マッカチ yayesikarunka=an matkaci	ものごころついた娘が
アネ ヒネ アナン ワ、 オラノ a=ne hine an=an wa orano	私であって、そして
オナ カ サク ウヌ カ サク ノ ona ka sak unu ka sak no	父もなく母もなく
トウムン トウム タ アナン ペネ。 オラノ、 tumun tum ta an=an pe ne. orano,	ほこりの中で暮らしていた。そして、
ヤイエシカルンカアン ヒ オラノ yayesikarunka=an hi orano	ものごころついた時から
ケスト アン コロ トウムン kesto an kor tumun	毎日ほこりを
エソイネ アルラ アルラ、 esoyne a=rura a=rura,	外に運んで運んで、
チセ オンナイ アルラ コロ アン。 cise onnay a=rura kor an.	家の中（のほこり）を運んでいた。

写真 10

アイヌ民族博物館編『アイヌ民族博物館 伝承記録3・昔話 上田トシのウエベケル』上田トシさんによる散文説話2編について、カタカナとローマ字表記のアイヌ語原文と日本語訳を載せ、音声資料(CD)をつけています。



●協力（敬称略）

萩中美枝 上田トシ

財団法人アイヌ民族博物館 旭川市博物館 国立民族学博物館 北海道立図書館
札幌テレビ放送 社団法人北海道ウタリ協会

●写真提供、出典等

表紙：月岡陽一

写真 1：旭川市博物館

写真 2：財団法人アイヌ民族博物館

写真 4：北海道立図書館

写真 5：『サコロベの世界』札幌テレビ放送 1978年

写真 11：国立民族学博物館

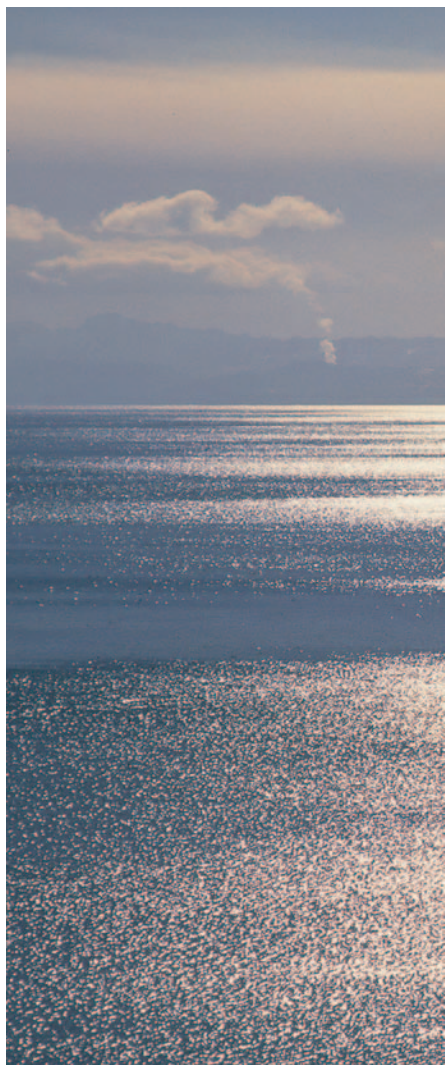
上記以外は当センター所蔵写真。



この小冊子は、環境に配慮した用紙を使用しています。
古紙配合率100%・白色度70%

◆発行—平成12年10月

◆編集—北海道立アイヌ民族文化研究センター
HOKKAIDO AINU CULTURE RESEARCH CENTER
〒060-0001 札幌市中央区北1条西7丁目 プレスト1・7 5階
TEL.011-272-8801



pon

kanpi-sos

ポン カンピソシ



7

◆アイヌ文化紹介小冊子

芸能



本書のねらい

北海道立アイヌ民族文化研究センターでは、国連の定めた「世界の先住民の国際10年」への取り組みの一環として、1995（平成7）年度より、アイヌ文化を紹介する小冊子を毎年1冊ずつ刊行しています。

これまでに、1冊目「イタク 話す」で言葉を、2冊目「イミ 着る」、3冊目「イペ 食べる」、4冊目「チセ 住まい」で衣・食・住を、5冊目「イノミ 祈る」で信仰を、6冊目「ウエネウサラ 口頭文芸」では口頭で伝承されてきた物語について紹介してきました。

この7冊目では、芸能についてとりあげました。アイヌの芸能のあらましについて、歌や踊り、楽器のいろいろなどを挙げながら紹介しています。またアイヌの芸能について学ぶための文献や、実際の歌や踊り、楽器の演奏などを見たり聞いたりできる資料や施設などについて紹介しています。

ポン カンピ ソシ
pon kanpi-sos → 小冊子
小さい 紙 束

目次

[1] アイヌの芸能のあらし	2
[2] 歌と踊りと楽器	8
1 歌と踊り	10
2 楽器のいろいろ	16

[1] アイヌの芸能のあらまし

アイヌ民族が育んできた文化の一つに、様々な歌や踊りなどの芸能があります。

どの民族にも、それぞれが育んできた歌や踊りなどがあり、お祭りや儀式の中で演じられたり、あるいは日々の暮らしの中で伝えられてきました。

アイヌの昔話などにも、様々な歌や踊りが、儀式のときに行なわれたり、日々の生活の中で楽しまれるようすを語っているものがあります。日本の江戸時代や明治の初期に書かれた文献の中にも、このような歌や踊りの記録が見られます。

Among the several forms of culture the Ainu people have long fostered are folk performing arts represented by a variety of music, songs and dance.

Music, songs and dance have developed in every one of the ethnic groups and have been transmitted through performances on such occasions as festivities, rituals and in informal activities in daily life.

Some vignettes from old Ainu folk-tales tell how very much songs and dances of various sorts are enjoyed by Ainu people when performed during rituals and in the course of daily life. Activities of the Ainu people such as these are described in some of the documents written by non-Ainu people in the Edo and early Meiji periods.

Introduction to the Folk Performing Arts of the Ainu People

明治時代以降、アイヌの芸能をめぐる環境は大きく変化し、昔のような踊り方や歌い方、楽器の演奏などを受け継ぐ人はしだいに少なくなりました。その背景として、他の民族や社会と同様に、ラジオやテレビをはじめとする新たな娯楽が登場したり、学校教育などを通じて西洋風の音楽が広まったことなどが挙げられます。また特にアイヌ民族の場合、いわゆる同化主義のもとで、伝統的な歌や踊りを演じる機会が減少したことなども要因です。

そのような時代の中でも、儀式などで集まったときに歌や踊りを楽しむことは各地で見られましたし、ふだんの暮らしの中で折りに触れて昔ながらの歌を口にした人も多かったといえます。また、観光地などで披露^{ひろう}することを通じて伝承されてきた歌や踊りもあります。

Drastic changes in the climate surrounding Ainu folk performing arts since the Meiji era have resulted in a gradual decrease in the number of people who have learned traditional Ainu styles of dancing, singing and the playing of musical instruments. This is attributable to the emergence of new forms of entertainment, to radio and television and to the wider introduction of Western music influences as is the case with other ethnic groups and societies. Yet, the assimilation policy, particularly in the case of the Ainu, has been another factor contributing to the fewer opportunities of experiencing their traditional performing arts.

Despite the cultural changes of the times, their performing arts, including singing and dancing, were still appreciated when they gathered for rituals and ceremonies and some people still sang their traditional songs in their daily lives. Some of the songs and dances have been preserved and transmitted through performances for visitors at tourist sites.

現代では、他の多くの人々と同様に、アイヌも一人ひとりが様々な歌や踊りに親しんでいます。それとともに、先祖から受け継がれてきたものを学び伝えることも行なわれています。

近年、アイヌの伝統文化の復興・継承の気運の中で、アイヌの芸能についても関心が高まり、学習・伝承へ向けた動きもおこってきました。道内のいくつかの地域では、舞踊の保存会などが組織され、それぞれの地域で伝承されてきた歌や踊りを学んだり、新たに他の地域のものを採り入れたりする活動が行なわれてきました。



写真 1 帯広カムイトウウポポ保存会の公演
(1997年、春採アイヌ古式舞踊釧路リムセ保存会 30 周年記念公演)

Today, every Ainu person enjoys various sorts of songs and dances including both traditional and contemporary ones, just as do many others. Some of them are learning and transmitting traditional styles of performing arts which their ancestors have passed down.

Amid the recently increasing trend toward restoration and transmission of traditional Ainu culture, more Ainu people today are learning and transmitting their performing arts in their respective areas, while in some cases adopting the traditions of other areas in their own regions. Organized efforts to

1984 (昭和59) 年には、「アイヌ古式舞踊」が国の重要無形民俗文化財の指定を受け、道内の8つの地域の保存会がその保持団体として認定されました。1994 (平成6) 年には、さらに9つの保存会が追加認定されています。こうした動きの中で、各地で公演なども行なわれるようになり、伝統的な歌や踊り、楽器の演奏を録音・録画したものが出版され、鑑賞や学習に利用されています。現代的な音楽の要素を採り入れるなどした創作活動も見られます。

この小冊子では、これらの中から、伝統的な歌や踊りと楽器について紹介します。

アイヌの伝説や神話などの物語のほか、祈りの言葉、あらたまった場での挨拶の言葉などには、語られるときにメロディーがついており、歌のように感じられるものもあります。これらのうち、物語については、→『アイヌ文化紹介小冊子 6 口頭文芸』でとりあげています。

preserve Ainu traditional dancing have been made in some areas in Hokkaido. These activities led to public performances at various locations and traditional songs and dances were recorded for learning and pleasure.

Some elements of contemporary music have been incorporated into the innovative styles of performance which are emerging today.

This handbook shows some of the wide variety of traditional styles of Ainu folk performing arts.

アイヌの芸能についての調査や採録の歴史

早い例では、17世紀末の日本の江戸時代の文献に、少しずつですが、アイヌの踊りについての記録が見られます。1799年に成立したとされる『蝦夷島奇観』には、踊りや歌に関する説明が見られ、楽器や踊りのようすが描かれています。

20世紀になると、録音や録画によってアイヌの芸能が記録されるようになりました。早くは、1897年にフランスのリュミエール社が日本各地を撮影した映像フィルムの中に、室蘭での録画とされるアイヌの踊りの映像が含まれています。1900年ころには、ポーランド出身のブロニスワフ・ピウスツキ(1866～1918)が、サハリン(樺太)で現在のレコードにあたる蠟管ろうかんを使ってアイヌの歌や物語の録音を行なっています。



写真2 蝦夷島奇観（復刻版）

1923（大正12）年には、音楽学者の田邊尚雄（1883～1984）がサハリンでアイヌの音楽の録音を行なっています。同じ頃から、金田一京助（1882～1971）、久保寺逸彦（1902～1971）、知里真志保（1909～1961）らアイヌ語やアイヌ文化の研究者も、物語とともに歌や踊りを採録しています。

戦後には、伝統的な芸能の記録を目的とした組織的な調査も行なわれるようになりました。例えば、日本放送協会（NHK）の事業の中でも札幌放送局による1961～63（昭和36～38）年の調査では、北海道の各地で300名以上の伝承者から採録しています。



写真3 日本放送協会（編）『アイヌ伝統音楽』
上記のNHK札幌放送局による調査をもとに刊行されたものです。ソノシートが付いています。



写真4 田邊秀雄監修
『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』
田邊尚雄が1923年にサハリンで録音した音楽も収められています。

[2] 歌と踊りと楽器

アイヌの歌や踊りには、日常の暮らしの中で歌われるものや、儀式のときに演じられるものなど、様々な種類があります。

伝統的な踊りは歌とともに行なわれます。手拍子などを除いては声だけで行なう曲がほとんどですが、古い記録やサハリンの踊りには楽器の伴奏をとこなうものもあります。

それぞれの歌、踊り、楽器の種類呼び名は地域により違いがあり、同じような呼び名でも地域により内容などが違うこともあります。例えば、立って輪になって歌いながら踊るものを胆振いぶりの白老しらおい地方では主にリムセと呼びますが、日高さかの沙流地方では主にホリッパといい、旭川地方では主にウポポと呼んでいます。



Ainu songs and dances are classified in various categories such as songs that are sung during everyday life and those performed during rituals and ceremonies.

Traditional dances are performed accompanied by singing. These songs generally are sung by keeping time using hand-clapping alone. References to singing in other styles of performance which were accompanied by musical instruments are recorded in old documents, and some Ainu dances in Sakhalin are performed to instrumental accompaniment.

Songs, dances and instruments

アイヌの芸能は、特定の専門家によって作られたり演じられたりしてきたものではありません。その多くは、それぞれの地域や家庭で、実際に歌ったり踊ったりすることを通じて伝承されてきました。

メロディや踊りの動きなどを細かに記した楽譜や教本のようなものがあってもありません。歌詞は曲ごとにおおむね決まっていますが、掛け声などを即興的に加えたり、曲の種類によっては歌い手のそのときそのときの感情などを歌詞にして歌うこともあります。

いっぽうで、演じる場がある程度決まっていたり、演じる人が年齢や性別によってある程度決まっている場合もあります。こうした決まり方も地域や個人、時代によって様々です。

The performing arts of Ainu people have never been connected with specific experts. Instead they have been transmitted mostly through the active involvement of family members in singing and dancing at home and in the local communities where the people have resided.

There are no music scores or texts describing the detailed movements of dancing. The words are already determined for most pieces, although singing is at times improvised by adding shouts or substituting words expressive of a singer's emotions at the time, all depending upon the types of songs being sung. Some songs and dances are performed on specific occasions and the age and sex of the performers are determined as well. The rules to determine these things vary depending on area, individual performer and era.

1 歌と踊り

様々な種類の歌や踊りの中から、いくつかをとりあげて紹介します。

●座って数人で歌う歌

数人の歌い手が漆塗りの器の蓋^{ふた}を囲んで座り、全員で蓋を手で軽く叩いて拍子^{うるし}をとりながら歌います (図1)。

このように二人以上で歌う時の歌い方にはいくつか種類がありますが、比較的良好知られているのは、一人ずつ、または何人かのグループに分かれて、同じ歌を一定の間隔をおいて歌い出す、というものです。ひとつのメロディを少しずつ間をおいて歌っていくことによって、複雑だけれどもまとまりをもった響きを生み出しています。

こうした歌い方は、他の踊りの曲などでも使われます。



図1

1 Singing and Dancing

Some of the music, songs and dances from a variety of examples are described in the following sections.

Sitting songs

A few singers are seated around the lid of a lacquer ware container and all parties sing together while tapping the lid to beat time.

Circle dance

All the performers stand in a circle facing the center and dance moving clockwise while singing.

旭川市で伝承されている歌の一例です。「ポン クトシントコ イタソ カ タ エトゥニン トゥニン エトゥニン チャリ pon kutosintoko itaso ka ta etunin tunin etunin cari」という歌詞を繰り返し歌っているところです。

歌い手A … **ポン**クトシントコ イタソーカタ エトゥニントゥニン エトゥニンチャリ **ポン**クトシントコ イタソー …
 歌い手B …り **ポン**クトシントコ イタソーカタ エトゥニントゥニン エトゥニンチャリ **ポン**クトシントコ イタ …
 歌い手C …ンチャリ **ポン**クトシントコ イタソーカタ エトゥニントゥニン エトゥニンチャリ **ポン**クトシントコ …

●は漆塗りの器の蓋を手で叩くところ)

この歌では「ポン」のところが高い裏声で歌うので、全体に低めの声で歌われる響きの中で、この部分に来ると **ポンポンポン** …と、次々と浮かび上がるように聞こえてきます。

🎧 上の譜例は、2003年に旭川の杉村フサさん、太田シゲエさんほかに演唱していただいたときの録音をもとに、当センターで作成したものです。ここをクリックすると、このときの演唱の音声を聞くことができます。

(座って数人で歌う歌は、通常、いくつかの曲を次々と歌いついでいきます。ここでの音声も、前の歌の最後の部分から、この歌に入り、次の歌になるところまでを収録しています。)

● 輪になって踊る踊り

一同が中心を向いて円陣をつくり、歌いながら時計回りに進んでいく踊りです。

踊りはおおむね、簡単な足さばきや手さばきをいくつか組み合わせさせて繰り返していくものです。歌詞は「ホイヤ」などの掛け声のような言葉によるものが多く、メロディも比較的短いまとまりでできています。



写真5 財団法人アイヌ民族博物館『アイヌ古式舞踊』より

● 杵搗き^{きねつ}をしながら歌う歌

穀物などを搗く^つときに、その動作にあわせて歌います。近年ではこれをひとつの芸能の演目として行なうようにもなりました。作業のための簡単な掛け声のようなものから、ある程度まとまった歌詞を持つものまでいろいろあります。



写真 6 杵搗きのようす

Songs sung accompanied by pounding

The songs in this category are sung in accordance with the rhythms and movements associated with pounding grain. The pieces have been played as part of the repertoire in recent years.

Dances mimicking animal movements

The major components of dances of this kind are body movements mimicking the most representative motions of animals and the dances passed down through the generations vary depending on area. For instance, there are dances for crane, snipe, swift, sparrow, fox and grasshopper.

● 動物のしぐさをおりこんだ踊り

動物のしぐさを真似た動きをおりこんだ踊りです。地域によって伝承されている曲は様々です。ツル、シギ、アマツバメ、スズメ、ネズミ、キツネ、バッタなどの踊りがあります。

歌詞にも、それらの動物の名称や鳴き声をあらわす言葉が使われたりしています。



写真7 鶴の舞（財団法人アイヌ民族博物館『アイヌ古式舞踊』より）

アイヌの伝統的な歌では、音の高い低いだけではなく、声の出し方にもなう音色^{ねいろ}を組み合わせたりすることも、大事な要素となっているようです。

歌の中では例えば、ふつうに話すときとそれほど変わらない声、^{うな}唸るような声、細い裏声など、いろいろな音色が聞かれます。息を吐いたり吸ったりする音を使う場合もあります。また、ふつうの声と裏声とをすばやく往復させたり、喉の奥を使って声を小刻みに出すなど、独特な響きを出す方法も聞かれます。また、「^{ルルル}rrr」と連続して舌先を震わせる音がありますが、これを鳥のしぐさをおりこんだ踊りの中で鳥の鳴き声として用いたり、他の踊りで掛け声に使ったり、子守歌（14ページ）の中で赤ん坊をあやすための音として歌詞に組み込んだりします。

こうしたいろいろな声の使い方は、曲の中で音楽的な効果を生み出す要素のひとつにもなっているものです。時代や地域、一人ひとりの声の質やその人なりの工夫によって違ってくることもあります。例えば11ページの歌で「ボン」を裏声で歌うなどのように、音色の使い分けなどが伝えられているものもあります。

● 男性が舞うもの

床をゆっくり踏みしめながら両腕を上下させおごそかに舞います。比較的知られている例では、主に年長の男性が行ない、舞いながら、唸^{うな}のような独特な声を出していきます。このときのメロディには、その人その人に固有な節まわしがあると言われていいます。このほか、短い祈りの言葉などをおりこんで唱えたりする場合もあるなど、地域によって様々なやり方があるとされています。

男性を主として踊るものには、このほか、弓矢を手にして踊る踊りや、刀を手にして踊る踊りなどもあります。

● 子守り歌

赤ん坊をあやしたり寝かしつけながら歌うものです。歌詞の内容としては「育てのゆりかごが／高い天からおりてくるよ／おまえがよい眠りをすれば／立派な人になるよ」といったものや「泣かないで／おまえは眠るのだよ／眠らなければ／ばけもの鳥がやってくるぞ」というものなどが知られています。

Dances performed by men

Performers dance solemnly with both arms moving up and down while stepping on the floor slowly and firmly. In other dances which are performed mostly by men, performers dance with a bow and arrow or a sword in hand.

Lullabies

These are songs Ainu people sing while rocking babies and small children to put them to sleep.

Lyric songs

Singers sing to express emotions of joy, happiness, sorrow and love that they feel in their present lives or that they connect with old memories.

● 自分の気持ちを歌う歌

歌い手が、昔の思い出や、そのとき感じた喜びや悲しみや愛しさなどの気持ちを歌うものです。「ヤイサマネナ」「アヨロロペ」などの掛け声のような言葉や、悲しくて泣けることを表わす「二つの清い涙／三つの清い涙を／私は流す」などの言い回しを歌詞に組み込んだりします。メロディは人により様々です。他の人の歌を覚えて歌うこともあります。

【歌詞紹介】

平取町の鍋沢キリさんに歌っていただいた歌の出だしの部分を紹介します。

[🔊 ここをクリックすると、この部分の鍋沢キリさんによる実際の音声を聞くことができます](#)



写真8 鍋沢キリさん
(アイヌ民族博物館主催
「アイヌ文化教室」にて)

ホレ コレンナ ホレ ホレンナ hore koreнна hore horeнна	
ホレ ホレ ホレ ホレンナ hore hore hore horeнна	
ホレ ホレ チカッ タ クネ hore hore cikap ta ku=ne	鳥になりたい
とり タ クネ ネワネ ヤクン TORI ta ku=ne ne wa ne yakun	鳥になりたい そうしたら
ホレ コレンナ タパン テワノ hore koreнна tapan te wano	今から
ク キ ホプニ ク キ ホプニ ku=ki hopuni ku=ki hopuni	私は飛ぶ 私は飛ぶ
ネワネ ヤクン ホレ ホレンナ ne wa ne yakun hore horeнна	そうしたら
ホレ ホレ ホレ ホレンナ hore hore hore horeнна	

(1994年9月6日に録音したものを当センターで文字にしたものです)

2 楽器のいろいろ

● 口琴こうきん

写真 9、10は、一般にこうきん口琴と呼ばれる楽器の一種です。



写真 9 竹製の口琴



写真 10 金属製の口琴

竹製の口琴は道内でも比較的多くの地域に伝わっていますが、昔はそのような楽器はなかったというところもあります。

長さ10～15cmでいどの薄いもので、中央に弁べん（振動させる細い部分）となる切り込みを入れてあります。弁の根もとあたりにつけた紐ひもを引いて弁を振動させ、それを口の中の空間に響かせます。このとき、息を吸ったり吐いたり、舌を上下させたり、口の中を広くしたり狭くしたりすると、音の響き方がいろいろに変わります。その変化を曲として繰り返し広げていきます。

多くの場合独奏どくそうするほか、数個の口琴で合奏したりもします。

金属製の口琴は、主にサハリンで見られます。弁の先端は少し^そ反っています。弁は直接指で^{はじ}弾くなど、竹製のものとは演奏のしかたが違います。

口琴は、他の民族にも様々な材料や形のものがみられます。



写真 11 『安東ウメ子・ムックリの世界』 幕別町教育委員会
幕別町在住の安東ウメ子さんによる口琴の演奏を収録
したCDです。

🔊 [ここをクリックすると、このCDに収録されている安東ウメ子さんの演奏の音声の一部を聞くことができます](#)

2 Musical instruments

Ainu jaw's-harp

Bamboo instruments are distributed relatively extensively throughout areas of Hokkaido, although instruments of this type did not exist in the past in some areas. Metal instruments are seen mainly in Sakhalin.

● 五弦琴ごげんきん

サハリンや北海道の一部には、弦げんを指で弾はじいて演奏する楽器が伝わっています。弦の数がたいてい五本であることから五弦琴ごげんきんと訳されたりしますが、弦が六本や三本のものであることが知られています。

演奏は、独奏するほか、何人かで合奏することもあります。

また、短い歌詞が伝わっている曲もあり、五弦琴ごげんきんの弾ひき手が同時にそれを歌うこともあります。

そのほか踊りの伴奏にも使う曲として伝えられているものもあります。



写真 12 五弦琴

楽器の曲について

伝統的な演奏では、口琴の曲も五弦琴の曲も、基本的には動物の鳴き声やその他の自然界の音もほうの模倣などを中心に組み立てられています。何の模倣であるかによって曲の呼び方を区別したりもしますが、必ずしも固定的な題名や作曲になっているというわけではありません。

Five-stringed zithers

These musical instruments are played by plucking the strings with the fingers.

Other Types of Musical Instruments

● その他の楽器

サハリンでは、写真のような太鼓^{たいこ}を用いていたことが知られています。直径は40～50cmくらいで、楕円形^{だえん}の木の枠^{わく}の片面に革を張ってあります。裏側に持ち手があり、細長いへら状の木に毛皮などを巻いたバチで革や枠を叩いて鳴らします。楽器というよりも、儀式の道具として使われていました。

このほか昔の文献には、笛のような楽器として、ヨブスマソウの茎を利用したものや、木の皮をねじり巻いて管としたものなどがあることが知られています。



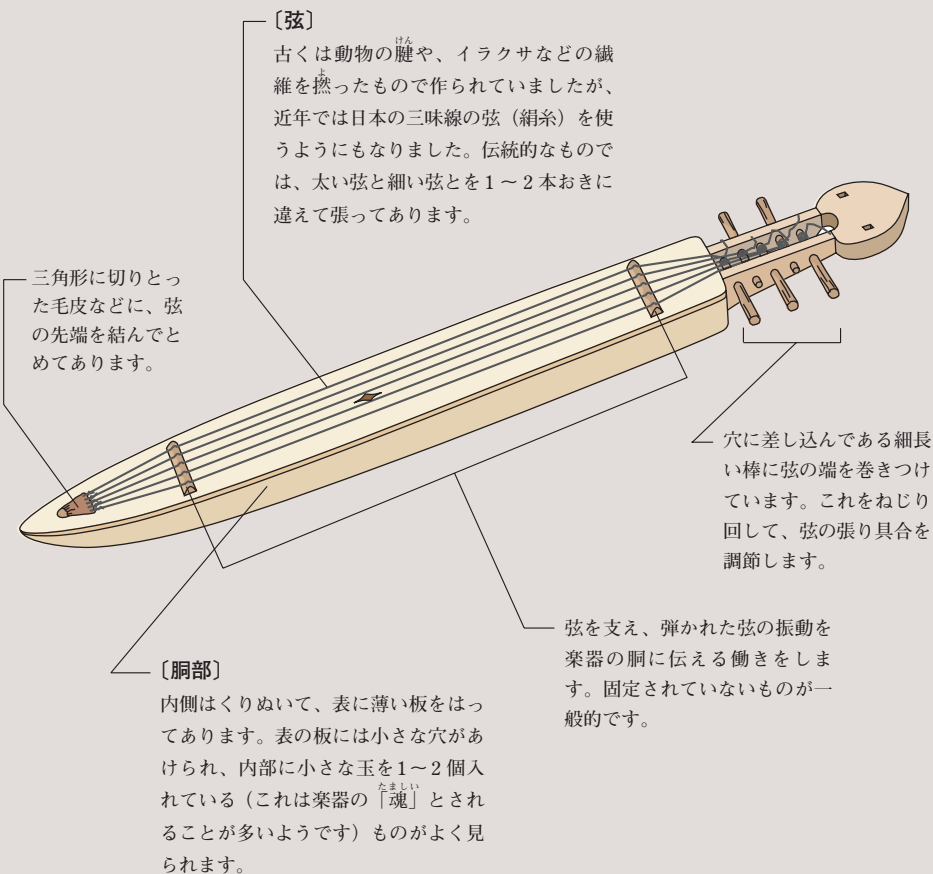
写真 13 太鼓とバチ



写真 14 松浦武四郎『蝦夷漫画』に描かれたさまざまな楽器のようす

五弦琴のつくりと演奏のしかた

【五弦琴のつくり】



【演奏のしかた】

演奏の前には、それぞれの弦がその曲の演奏に必要な高さの音になるよう、張り具合を調節しておきます。このときの基準となる音の高さはその人の声の高さに合わせるなどして決めていきます。

伝統的な演奏では弦を指で押さえて音の高さを変えることはせずに、両手の指先でじかに弾きます。

写真15は座って演奏しているところです。また写真16のように、立って弾きながら歌ったり踊ったりすることもあります。

サハリン出身の西平ウメさんによる演奏のようす（富田友子氏撮影）



写真 15



写真 16

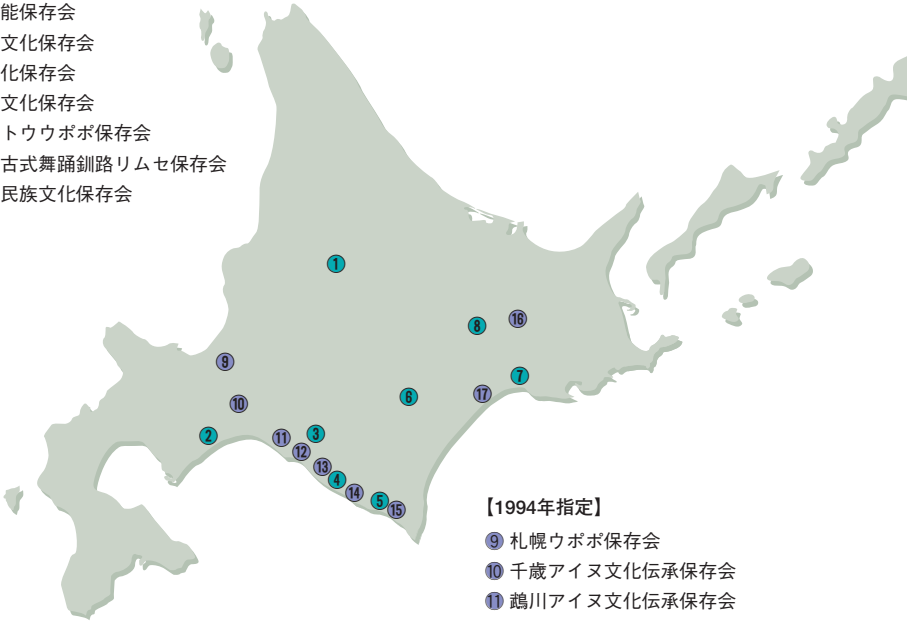
🔊 [ここをクリックすると、西平ウメさんによる五弦琴の演奏（1967年に網走市で録音されたものです）の音声を聞くことができます。](#)

*この音声は、東京藝術大学音楽学部小泉文夫記念資料室所蔵の音楽資料で、この小冊子作成のため特に許可を得て収録したものです。他の目的での使用及びこの小冊子からの一切の複製を禁じます。

《国の重要無形民俗文化財「アイヌ古式舞踊」の保持団体の認定を受けた保存会一覧》

【1984年指定】

- ① 旭川チカップニアイヌ民族文化保存会
- ② 白老民族芸能保存会
- ③ 平取アイヌ文化保存会
- ④ 静内民族文化保存会
- ⑤ 浦河ウタリ文化保存会
- ⑥ 帯広カムイトウウボボ保存会
- ⑦ 春採アイヌ古式舞踊釧路リムセ保存会
- ⑧ 阿寒アイヌ民族文化保存会



【1994年指定】

- ⑨ 札幌ウボボ保存会
- ⑩ 千歳アイヌ文化伝承保存会
- ⑪ 鶴川アイヌ文化伝承保存会
- ⑫ 門別ウタリ文化保存会
- ⑬ 新冠民族文化保存会
- ⑭ 三石民族文化保存会
- ⑮ 様似民族文化保存会
- ⑯ 弟子屈町屈斜路古丹アイヌ文化保存会
- ⑰ 白糠アイヌ文化保存会

- 北海道アイヌ古式舞踊連合保存会：
札幌市中央区北2条西7丁目 かでの2・7（7階） 電話 011-221-0462
- 財団法人アイヌ無形文化伝承保存会：
札幌市中央区北2条西7丁目 かでの2・7（7階） 電話 011-221-0019

● 協力（敬称略）

鍋沢キリ 富田友子 西平多美 清水キクエ 杉村満 杉村フサ 久保寺美美子 児玉マリ
安東春江

財団法人アイヌ民族博物館 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園 国立劇場
幕別町教育委員会 東京芸術大学音楽学部 小泉文夫記念資料室

● 写真提供、出典等

写真1 『北海道アイヌ古式舞踊写真集』北海道アイヌ古式舞踊連合保存会（CD）1999年

図1 杉山寿栄男画 『アイヌ民族誌』第一法規出版 1969年

写真5, 7, 8, 10, 17 財団法人アイヌ民族博物館

写真9, 12 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園

写真13 『ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵アイヌ資料目録』草風館 1998年

写真14 松浦武四郎『蝦夷漫画』（児玉マリ所蔵）

写真15, 16 富田友子

上記以外は当センター所蔵写真



この小冊子は、環境に配慮した用紙を使用しています。
古紙配合率100%・白色度70%

◆発行—平成13年9月

◆編集—北海道立アイヌ民族文化研究センター
HOKKAIDO AINU CULTURE RESEARCH CENTER
〒060-0001 札幌市中央区北1条西7丁目 プレスト1・7 5階
TEL.011-272-8801

<http://www.pref.hokkaido.jp/kseikatu/ks-ambkc/hacrc/hp/>



pon

kanpi-sos

ポン カンピソシ



8

◆ アイヌ文化紹介小冊子

民具



本書のねらい

北海道立アイヌ民族文化研究センターでは、国連が定めた「世界の先住民の国際10年」への取り組みの一環として、1995（平成7）年度より、アイヌ文化を紹介する小冊子を毎年1冊ずつ刊行しています。

これまでに、1冊目「話す」で言葉を、2冊目「着る」、3冊目「食べる」、4冊目「住まい」で衣・食・住を、5冊目「祈る」で信仰を、6冊目「口頭文芸」、7冊目「芸能」では口頭で伝承されてきた物語や、歌と踊りなどについて紹介してきました。

この8冊目では、民具についてとりあげました。アイヌの伝統的な暮らしの中で使われてきたいろいろな民具のあらましについて、写真を交えて説明しています。また、民具について学ぶための資料や学ぶことのできる施設なども紹介しています。

ポン カンピ ソシ
pon kanpi-sos → 小冊子
小さい 紙 束

目次

[1] アイヌの民具のあらまし	2
[2] いろいろな民具	8
1 身にまとう、身につける	10
2 家のうちそと	16
3 野や山で、海や川で	22

[1] アイヌの民具のあらし

どの民族にも、暮らしの中で用いられてきた様々な民具があります。

アイヌの昔の暮らしの様子を記録した文献などには、当時使われていたいろいろな民具が描かれています。アイヌの昔話などで語られる暮らしにも、様々な民具が登場します。

A variety of handicrafts that have been used in the activities of daily living and in subsistence-related activities and rituals are found in all of the ethnic groups. Handicrafts of various kinds which were in use are depicted in records found in archives dealing with the early lifestyles of the Ainu. A range of handcrafted materials often appears in the orally transmitted folktales of Ainu people.

Ainu Folk Art: Overview of Ainu Handicrafts

現在、これらのアイヌの民具で身近に見ることができるのは、博物館などで展示されている品々です。これらは、古いもので今からおおよそ100～200年ほど前のものです。

The most accessible materials are those displayed at the museums and the origin of some of the oldest ones can go back to 100 to 200 years or more.

明治時代以降、アイヌの生活環境も大きく変化しました。新たな道具や機械が生活に取り入れられるいっぽうで、それまでの暮らしで用いられてきた民具はしだいに姿を消していきました。

このような変化は、他の民族でも同じように見られたことですが、アイヌの場合は、伝統的な民具を作る材料の入手が困難になったこと、同化主義の圧力のもとで昔からの民具を使う機会が減少したり、作る技術を伝承しづらくなったりしたことなども原因です。また、家庭に残されていた民具が、商売などを目的とする人たちの手に渡っていったことなども多かったとされています。

そうした中でも、古い民具を大切に残しておいた人や、その作り方などを学び伝えた人たちも少なくありませんでした。また、土産物や工芸品として、伝統的な技を活かした新たな木彫りや衣服なども創られるようになっていきます。

Ainu people have undergone a series of drastic changes in lifestyles after the Meiji era as seen in the introduction of new tools and equipment and the gradual disappearance of the handicrafts which were traditionally in use in their daily lives. These sorts of changes have been seen in many cases with other ethnic groups. However, there are other contributing factors to the changes in the case of Ainu people. These include the difficulty of obtaining materials to make traditional handicrafts and much less opportunity under the pressure of assimilation both to use those handicrafts and to transmit their traditional techniques to the younger generation. Remaining handicrafts often have been traded as antique objects.

However, some old items of handcraft were well preserved and the skills to make them were taught by the Ainu in spite of these changes in lifestyle. Today new styles of woodcarving and dressmaking based on their traditional techniques have been developed producing souvenir handicrafts as well as those with high artistic value.

Ainu people today are leading their lives in the same manner as other people. The handicrafts described in this handbook are usually not in use in their daily lives. The momentum created in recent years for the restoration and transmission of traditional cultures has led to more opportunities for exhibitions and workshops to learn techniques and skills.

This handbook intends to shed light mostly on those handicrafts that were used from the end of the Edo era to the beginning of the Meiji era.

現代では、アイヌも普段は周囲の人びとと同じような暮らしをしています。この小冊子で紹介するような民具の多くは、実際に日常の生活で用いられているわけではありません。

また、近年の伝統文化の復興・継承の気運の中で、伝統的な民具の作り方を学ぶ講習会や作品の展覧会が開かれたりすることも増えてきました。

この小冊子では、おおよそ江戸時代の終わりごろから明治時代の初めごろにかけて用いられていたとされる民具を中心に紹介します。



写真 1 北海道立アイヌ総合センターにおける編み袋の講習会

この小冊子ではアイヌの様々な民具について紹介していますが、これらのうち、衣・食・住に関係するものについては、小冊子の → 2、3、4冊目「着る」、「食べる」、「住まい」でも取り上げています。また、信仰や儀式に関するものについては → 5冊目「祈る」、楽器については → 7冊目「芸能」でも取り上げています。

アイヌの民具には、工芸品としてもすぐれたものが多いことが早くから知られていました。これらは、交易を通じて本州など周辺の地域や社会にもたらされ、紹介されています。



写真2 盆



写真3 はし
箸入れ

現在アイヌの工芸品として有名なものに木彫りのクマなどがありますが、このようなものが作られるようになったのは、ここ70～80年ほどのことです。サハリンではクマなどをかたどった木彫りが古くから見られますが、これは主に儀式のために作られていたものです。

北海道では、動物や人間の姿をしたもので置きものとして飾っておくような木彫りは作られなかったとされています。その理由については、このようなものを作ると「魂」が宿るとされ、もしそれが悪い「魂」だと人間に害をもたらしたりするおそれがあるからだ、ということがよく言われているようです。

現在よく見られるような木彫りのクマは、1920年代ごろに八雲町で作られるようになり、ほぼ同じころから旭川のアイヌの人たちが副業や工芸作品として自分たちの木彫りの技術を活かして作ったものが、各地に広まったと考えられています。



写真4 木彫りのクマ
1920年代ごろに旭川で彫られたものです。

[2] いろいろな民具

アイヌの民具は、基本的には、使う人たちが自分で作るか、または交易などを通じて入手したものです。専門の職人がいたり、工場があるわけではありません。そうした中でも、民具の種類によっては、年齢や性別、立場の違いによって、作ってよいとされる人がある程度決まっているものもあります。

昔の暮らしの中では、彫り物や縫い物などがきちんとできるようになることが、しっかりした大人になるために大切なこととされ、民具を上手に作ることでできる人は尊敬されたとされています。



写真5 ハマニンク（テンキグサ）で編んだ容器
主に千島で見られたものです。

Ainu's handicrafts were made not by the professional craftsman or at a workshop but basically by those who intended them for personal use or they were acquired through trade. People who were allowed to make handicrafts were determined to some extent by the type of craft and by their age and sex. They were also determined by the position within their own community, social status or their designated functions in ceremonial matters.

It was deemed indispensable for Ainu men and women to acquire the skills for carving and sewing in order to be treated as adults and those who could make handicrafts skillfully commanded respects.

A variety of Handicrafts

アイヌの文化は、北海道とサハリン、千島などでそれぞれ異なり、また、同じ北海道でも地域によって異なります。用いられてきた民具にも、地域によって種類などに違いがあります。同じような民具でも、その呼び名が地域によって異なることも多く見られます*。

博物館や本などでアイヌの民具が紹介されているのを見る場合にも、その民具や民具の名称がどの地域のものなのかといった点についての注意が必要です。

*例えば、儀式で酒を捧げるときに使うへら（→17ページ）は、北海道のほかサハリンなどにも見られますが、北海道では多くの地域で「イクパスイ」と呼ばれ、サハリンでは主に「イクニシ」と呼ばれます。



Ainu cultural patterns differ among Hokkaido, Sakhalin and the Kuriles, and for that matter even among the regions in Hokkaido. There is a difference in the types of crafts used among the areas in Hokkaido and even the same handicrafts are often called in a different way depending upon the regions. Due attention therefore, should be given to the origins of the handicrafts when they are introduced at the exhibition or in writing.

photo 5 : A basket often seen in the Kuriles

アイヌの様々な民具について、主にそれらの民具を使う場所や場面にしながら紹介します。

1 身にまとう、身につける

衣服や装身具とそれらに関係するもの、そのほか儀式のときや日常でよく身につけたり持ち歩いたりしたとされるものの中から、いくつかを紹介します。

● 衣服

アイヌの伝統的な衣服は、獣^{けもの}・魚・鳥の皮、樹木や草の内皮からとった繊維^{せんい}、木綿を素材とするものが知られています。



図1 『蝦夷島奇観』

200年ほど前に書かれたもので、輪になって歌いながら踊るようすを描いた部分です。わざといろいろな衣服をとりまぜて描かれています。

A variety of Ainu handicrafts are shown in this handbook according to the places and occasions they were used.


1 Items to Wear

Clothing

photo 6 : Cotton clothing collected in the Kuriles



写真 6-1 木綿を素材にした衣服
千島で収集されたものです。文様の部分の
布は絹を使っています。

 [この着物を前から写した写真はこちら](#)

博物館などで展示されている、様々な文様が施された衣服の多くは、儀式のときなどに着る晴れ着として用いられたものです。労働などふだんの暮らしで着た衣服には、文様はあまり見られません。

● 儀式のときなどに身につけるもの

写真7は、^{さいだん}祭壇で祈りをする男性たちのようすを写真にしたものです。



写真7

写真8は、儀式のとき男性が頭にかぶるもので、ヤナギやミズキなどを削ったものから作ります。写真7で立っている男性も、これを頭にかぶっています。

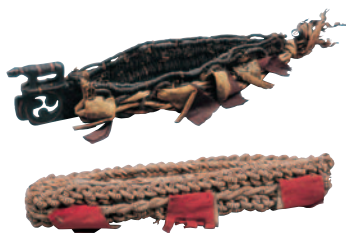


写真8

写真7で立っている男性と中央の男性は、肩からかけた帯に刀を吊り下げています。このような刀は、武器としてではなく儀式のときに身につけるものとされています。刀を吊るす帯は、樹皮を素材とした繊維などを使って編まれており、さまざまに文様などを編みこんだものが見られます。



写真9 刀を吊るす帯と刀(日高の^{さくら}沙流地方)
この刀に限らず、刀身は実際にものを切るようなつくりにはなっていません。また、鞘^{さや}などに見られる飾りは表側だけで、裏側には見られません。



写真 10 首飾り
 (左:門別町、右:新冠町)
 儀式のときなどに女性は首飾りを身につけます。



写真 11-1 女性の帯 (サハリン)
 帯の部分は皮製で、飾りの金具は皮紐で下げられています。サハリンでは儀式のときなどに女性がこのような帯を身につけたとされています。

この帯を反対側から写した写真は[こちら](#)

写真 12 1935 (昭和10) 年にアイヌ語研究者金田一京助氏と久保寺逸彦氏がサハリンでアイヌ語やアイヌ文化の調査をしたときに撮影したものです。左端の女性が写真11のような帯をつけています。



この写真をクリックすると、拡大した画像を見ることができます

Clothing and Items to Wear at a Ritual or Ceremonial Occasion

photo 7 : The reenactment of offering prayers at the altar

photo 8 : A headdress for men to wear during a ritual

photo 9 : A sword and sword strap that the standing man in photo 7 is wearing

photo 10 : Necklace

photo 11 : Women's skin belt with metal from Sakhalin

● 裁縫の用具

針入れや糸巻きなどには、丁寧な彫刻が施されているものが多く見られます。



写真 13 針入れ

針入れにはいろいろな材質や形のものが見られます。これは、鳥の骨でできており、中の布に針を刺しておくつくりになっています。



写真 14 糸巻き (静岡内町)

糸巻きにもいろいろな種類のものがあります。これは下に針入れがついているタイプのものです。

Items Used for Sewing

photo 13: Needle case

photo 14: Spool

Other

photo 15: Knife

photo 16: A tobacco container and a pipe for smoking

● その他

写真15のような小刀は、彫り物などの細工に使うほか、庖丁として使ったり、獣を狩るときに身を護る武器にもなるなど、いろいろな用途があり、日ごろから身につけていたとされます。長さはおおむね20～30cmでいどのもが多く、鞘や柄の部分にいろいろな彫刻が施されているものが多い見られます。



写真 15 小刀

上は鞘のみです。根付（帯に下げておくときに、落ちないように紐の端に付けておく留め具）が付いています。下はサハリンのものです。



写真 16 タバコ入れ(左)と煙管(右)

タバコをたしなむことは、昔のアイヌの暮らしにも見られ、タバコ入れもいろいろな彫刻を施したのが見られます。煙管には、交易で手に入れたものや自分たちで作ったものがあります。

これらの細かな彫刻を施したものは、自分たちが使うほか、土産物などとして早くから本州などにもたらされています。

2 家のうちそと

● 家屋

アイヌの住まいのつくりや材料などには、地域により様々な違いがありました。

柱や屋根、壁、床などの材料には、木の幹や枝、樹皮、カヤやササなどが用いられました。

部屋にはカムイ*が出入りするとされる窓が設けられていました。その窓と^ろ炉のあいだの空間は、いっばんに^{かみぎ}上座として尊ばれました。家の宝物を置く場所もおおよそ決まっていました。



写真 17 復元されたカヤ葺きの家屋
(アイヌ民族博物館)

博物館などの施設でアイヌの家屋やその一部を展示しているところがあります。これらは、おおよそ20世紀の初めごろまでに建てられた伝統的な家屋を復元しようとしたものです。



写真 18 上座に置かれた宝物など
(帯広市：大正の終わりごろ)

*カムイ：アイヌの信仰ではあらゆるものに「魂」が宿っており、中でも動植物、火、水、生活道具など人間の生活に関わりの深いもの、あるいは自然現象など人間の力の及ばないものの多くを「カムイ」として敬いました。「カムイ」というアイヌ語は、日本語では「神」などと訳されることが多いようですが、「神」などの日本語と必ずしも意味が一致するものではありません。そこで、この小冊子では、基本的には「カムイ」というアイヌ語を用いることにしています。

写真18では、左側の壁のところに、儀式のとき身につける刀や首飾りなど(→12ページ)が吊り下げられているようすがわかります。

その下に並べて置かれているのは漆塗りの器です。

このような漆塗りの器は、主に交易などによって手に入れたものです。



写真 20 儀式用の椀と台
儀式に用いる椀なども多くは漆塗りのもので、ふだんの食事用の椀とは区別して用いられました。



写真 19 漆塗りの容器
儀式に用いる酒を造ったり、造った酒などをに入れておく容器として用いられました。



写真 21 - 1 酒を捧げるためのへら
カムイや先祖に祈るとき、酒を捧げるために作られたものです。木や木の根などを削ったもので、彫刻が施されています。

 それぞれのへらの裏側の写真はこちら

2 Housing and Items Used Inside the Dwelling Place

photo 17: Reconstruction of a dwelling with a thatched roof

photo 18: Precious items placed in the sacred space

photo 19: A lacquered container in which grain was fermented in making sake for ceremonies.

It contained sake or precious items.

photo 21: A libation stick used when offering sake at a ritual

家の床には、ごごを敷きます。壁にもごごを張って仕上げる場合があります。



写真 22 模様をついたごごを壁に張ったようす
アイヌ民族博物館で復元されている家屋のようすです。
模様をついたごごは、儀式のときに敷くか、またはこの写真のように壁に張ったりして用いられるものです。

ごごは、ガマやスゲなどを編んでつくります。ごごを編むときは、写真23のような機具を使いました。



写真 23 ごご編みのようす（登別市・上武やす子さん）



写真24 ガマ

● 食器のいろいろ

食事のときには、写真25のような器^{うつわ}や箸^{はし}などを用いました。



写真25 食事のときの器など

photo 24 : A loom for ornamental mat

photo 25 : Table Utensils

Utensils such as these shown in the photo 25 were used when meals were served.

● 主屋のまわり

主屋のまわりには、祭壇さいだんやクマなどの檻おもり、倉などのほか、魚や肉を干すための棚や竿さおなどを設けることもあります。



写真 26 家のまわりのようす（帯広市）
大正の終わりごろの写真です。

photo 26 : Household scene at the end of the Taisho era.

photo 27 : Pounding grains in a wooden mortar.

This photo shows the reenactment of the pounding of grain according to the tradition of Ainu people. The woman seated is separating grain by the use of a winnow, while others are engaged in pounding the grain with a pestle. The clothes all women are wearing are not working clothes for everyday use, but are designed for ritual, celebratory occasions. An ornamental mat seen in the photo is not normally used during work time.



写真 28 箕

写真 27 杵搗きのようす

穀物などを杵で搗いているようすです。座っている女性は、箕で穀物をよりわけているところです。後ろに写っているのは、倉、クマを飼う檻、ものを干す竿などです。この写真は、昭和初期に白老で昔のようすを再現して撮影されたものですが、女性が着ている衣服はいずれも晴れ着であって日常の労働着ではないことに注意が必要です。また、敷かれているござには模様が見られますが、ふつう、日常の仕事のときにはにはこのようなござは使わないと言われています。



図 2



写真 29 穀物の取り入れのときには、鎌などを用いるほか、穂を摘み取るためにこのような道具も用いられました。(写真は日高の沙流地方のもので)

3 野や山で、海や川で

昔のアイヌの暮らしでは、食べ物を得るために、狩猟や漁撈^{ぎょろう}によって動物や魚をとらえたり、野山や海で山菜や木の実、海藻^{かいそう}などを採集したり、あるいは農耕を行ってヒエやアワなどの作物を栽培したりすることが行われていました。

ここでは、こうしたときに用いられたものの中からいくつかを紹介します。

● 狩猟の用具



写真 30 弓と矢

写真の弓はイチイ（オンコ）で作られています。ふつう、矢の先にはトリカブトの根などからとった毒を塗ります。



写真 31 トリカブト

動物をとらえるとき、下の図のような仕掛けを使うこともあります。

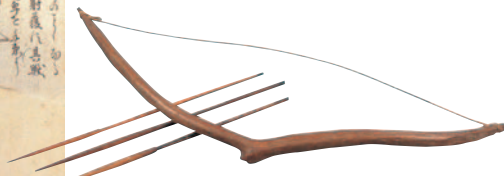


写真 32 仕掛け弓に用いた弓と矢

図 3 仕掛け弓
動物の通り道に仕掛けます。張ってあるひもに動物が触れると矢が発射され刺さるように作られています。

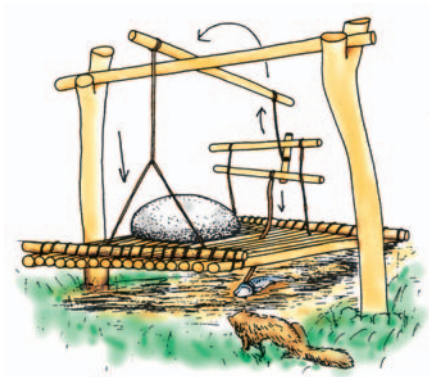


図 4 小動物用のわなの例
テンなどの小型の動物をとらえるための罠の一例です。下に置かれているエサをとろうとすると紐が引かれて石を載せた重しが落ちてくる仕掛けになっているものです。

3 Items Used for Activities in the Field and Mountains and in the Sea and Rivers

Utensils for Hunting

photo 30 : A bow and arrows

photo 31 : A set-bow

figure 4 : A type of a trap to catch small game

● 舟と漁具



写真 33 丸木舟 (北海道開拓記念館)
丸木をくり抜いて作られた舟です。川や海を行き来するときの交通手段として、また漁に出るときにも用いられました。カツラ、ヤチダモ、ハリギリ (センノキ) などいろいろな木で作られたようです。写真の舟はカツラの木で作られています。

Boat and Fishing Utensils

photo 33 : A dugout canoe

figure 5 : A large boat for navigating far from the coast. Planks are horizontally tied together with a rope to the dugout canoe. This made a layer of planks to increase the height so that a vessel could voyage to areas further offshore.

photo 34 : The top of a harpoon

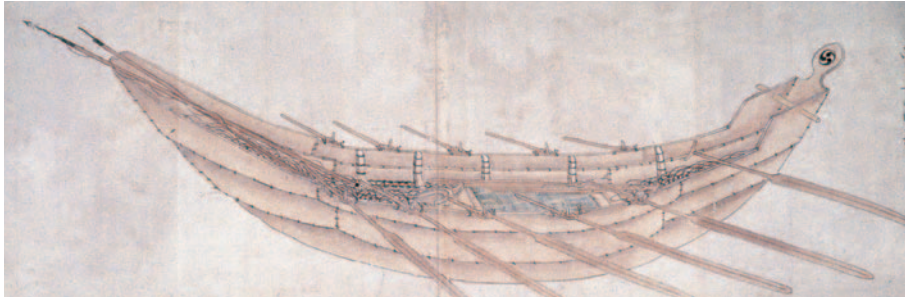


図5 『蝦夷生計図説』

沖まで航海できるよう、丸木舟に板を縄で綴^{つづ}って継ぎ足して大きくした舟の図です。舟の中には、漁で使う網や鉞^{もり}が置かれています。櫓をこぐほかに、帆を張って進むこともできます。



写真34 鉞^{もり}（先端の部分）

📷 この鉞先はサハリン（樺太）によく見られるタイプのもので、北海道によく見られるタイプの鉞先は小冊子3の写真7-2をごらんください

● 運ぶ・歩く

写真 35 編み袋

シナノキやブドウヅルの樹皮からとった繊維を編んで作ります。編み方にもいくつかの方法が見られます。山菜や栽培した穀物などを採るときに容器として広く使われるほか、乾燥させた穀物などを入れて保存するときなどにも使われます。これはシナノキを編んで作ったものです。



写真 36 背負い紐^{ひも} (上：石狩、下：千歳)

荷物などを背負うときに用いる紐です。両端の部分で荷物をしばり、中央部の幅広がっている部分を額にあてます。赤ん坊を背負うときにもこのような紐を用いることがあります。写真の下側の、棒が付いているものがそれで、棒の部分に赤ん坊を乗せて背負います。

Items Used for Carrying and Foot Ware

photo 35 : A woven bag

photo 36 : A carrying strap (A load is tied with both ends of a strap and the wider part in the center of the strap is placed on the forehead of the person who carries the load.)

photo 37 : A sleigh



写真 37 そり (模型)
サハリンでは冬に犬ぞりが
用いられました。

● は履き物

履き物としては、サケやシカなどの皮で作ったもの、ブドウヅルなどを編んで作ったものなどが知られています。



写真 38 ブドウヅル製の履き物
(旭川)



写真 39 トド皮製の
長靴 (千島)



写真 40 獣皮の靴とかんじき (サハリン)
動物の皮で作った靴に木製のかんじきを付けた
状態です。このような履き物は、冬に狩猟をする
ときなどに用いたとされています。

● 協力（敬称略）

北海道大学北方生物圏フィールド科学センター 植物園 財団法人アイヌ民族博物館
旭川市博物館 北海道立アイヌ総合センター 北海道開拓記念館

佐々木利和 津田命子 齋藤玲子 出利葉浩司 上武やす子 為岡 進

● 写真提供、出典等

写真1 北海道立アイヌ総合センター

写真2, 5, 8, 9, 10, 13, 14, 15, 25, 28, 29, 30, 32, 34, 35, 36, 38, 39 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター
植物園

写真3, 11 プダベスト民族学博物館所蔵バラートシコレクション

写真4 旭川市博物館

写真6, 21, 37, 40 ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館

写真7, 17, 20, 22, 27 財団法人アイヌ民族博物館

写真2, 16, 19, 33 北海道開拓記念館

写真18, 26 帯広市図書館

写真23 津田命子

写真31 静内町郷土館

図1, 3 秦憶麿『蝦夷島奇観』（復刻版：佐々木利和・谷澤尚一研究解説、雄峰社、1982年）

図4 出利葉浩司

図5 秦憶丸『蝦夷生計図説』（復刻版：河野本道・谷澤尚一解説、北海道出版企画センター、1990年）

上記以外は当センター所蔵写真



この小冊子は、環境に配慮した用紙を使用しています。
古紙配合率100%・白色度70%

◆発行—平成14年9月

◆編集—北海道立アイヌ民族文化研究センター
HOKKAIDO AINU CULTURE RESEARCH CENTER
〒060-0001 札幌市中央区北1条西7丁目 プレスト1・7 5階
TEL.011-272-8801 FAX.011-272-8850

<http://www.pref.hokkaido.jp/kseikatu/ks-ambkc/hacrc/hp/index.htm>

サハリンの東海岸



pon kanpi-sos
ポン カンピソシ



9 ◆アイヌ文化紹介小冊子

地名



本書のねらい

北海道立アイヌ民族文化研究センターでは、国連が定めた「世界の先住民の国際10年」への取り組みの一環として、1995（平成7）年度より、アイヌ文化を紹介する小冊子を毎年1冊ずつ刊行しています。

これまでに、1冊目「話す」で言葉を、2冊目「着る」、3冊目「食べる」、4冊目「住まい」で衣・食・住を、5冊目「祈る」で信仰を、6冊目「口頭文芸」、7冊目「芸能」では口頭で伝承されてきた物語や、歌と踊りを、8冊目「民具」では伝統的な暮らしの中の生活用具などについて、それぞれ紹介してきました。

この9冊目では、地名について取り上げました。北海道の地名は、その多くがアイヌ語に由来するものです。この冊子では、このようなアイヌ語地名のあらましについて、いろいろな例を挙げながら説明しています。また、アイヌ語地名について学んだり、調べたりするための資料なども紹介しています。

ポン カンピ ソシ
pon kanpi-sos → 小冊子
小さい 紙 束

目次

[1]	アイヌ語地名とは	2
	1 北海道の地名とアイヌ語地名	2
	2 アイヌ語地名の伝わり方	4
[2]	いろいろなアイヌ語地名	11
	1 地形などを表す地名	12
	2 動物や植物に関係する地名	16
	3 人々の暮らしに関わる地名	21

[1] アイヌ語地名とは

1 北海道の地名とアイヌ語地名

人が暮らしてきたところには、その土地で暮らした人が呼びならわしてきた川の名や道の名、町や集落の名など、様々な地名があります。現在の北海道にもたくさんの地名があります。その多くは、アイヌ語に由来するものです。

例えば、北海道には「登別」や「稚内」のように「ベツ」や「ナイ」の付く地名があちこちに見られることはよく知られています。これらはいずれも、アイヌ語で川や沢を意味する「ベツ」や「ナイ」に関する地名です（→13ページ）。アイヌの人たちの伝統的な暮らしの中では、川は交通路としても食料などを得る場所としても大切な存在だったことから、川の様子や特徴、暮らしとの関わりなどを表す地名が多く残っていると考えられています。

このように、アイヌ語の地名は、何らかの必要に応じて付けられたものであり、当時の人たちの暮らしが反映されているものです。

Place Names in Hokkaido and Place Names Derived from the Ainu Language

In the places where humans have resided, a variety of names are used indicating the rivers, roads, towns and small communities. The place names have been given by the local residents and most of these names in Hokkaido derive from the Ainu language.

As can be seen, place names with "-betsu" or "-nai", for instance, as in Noboribetsu and Wakkanai, are often found in various locations in Hokkaido. These names are related to the Ainu words *pet* and *ney* meaning "river" and "stream". Rivers were most essential to the traditional lives of Ainu people as a means of transportation and a source of food. Therefore, today many place names such as the above exist indicating geographic features related to rivers and the way the places were related to the lives of the Ainu.

Places were named in accordance with certain needs of Ainu people, thus reflecting the traditional Ainu way of life.

アイヌ語に基づく地名があちこちに多く見られるのは、その土地に昔からアイヌ語を話す人々が暮らしてきたことの何よりの証^{あかし}でもあります。

北海道でアイヌ語以外に由来する地名には、次のような例があります。

- 本州などから北海道に移住してきた人たちが故郷の地名などを付けたもの
鳥取^{とっとり}（釧路市）：鳥取県から移住してきた人々が多いことから村の名として付けられ、現在も釧路市内の町名となっています。
 - 仁木^{にき}（仁木町）：明治時代にこの土地に移住した仁木竹吉^{にきたけよし}という人の名前にちなんで命名され、現在も町の名となっているものです。
 - 地名の改正や住宅地の開発に伴って新たに付けられたもの
千歳^{ちとせ}（千歳市）：千歳市の中心付近がもともと「シコツ」と呼ばれていたのを江戸時代に改名し、それが現在の市の名になっているものです。
- *シコツは、「大きな・河谷」の意であると考えられています。昔の記録には「シコツ」などと書かれています。

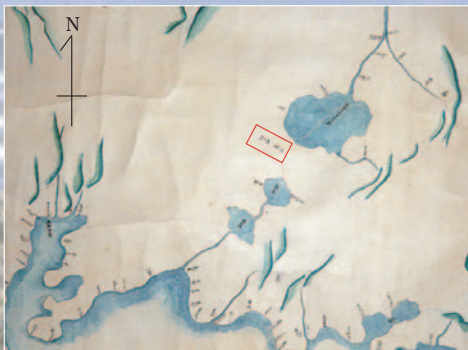


写真1『元禄国絵図』（1700年）の一部：
今の千歳付近には「志こつ」（シコツ）と記されています。

The fact that place names derived from the Ainu language are found in great number is evidence that people who spoke the Ainu language inhabited the area from early times.

2 アイヌ語地名の伝わり方

アイヌ語で呼ばれてきた地名は、カタカナやひらがな、漢字などで表され、記録されてきました（→8ページ参照）。それらの中には、今日までの間に、音や形が変わってしまったものが多く見られます。

アイヌ語の呼び名に漢字をあてたりすることで発音が変わったり、地名の呼び名が漢字の読み方に引かれて変わったりする例がよく見られます。

例 ▶ ^{むろらん}室蘭（室蘭市）：古い資料には「モルラン」あるいは「モロラン」と記されていますが、「室蘭」という漢字があてられ、呼び名も「むろらん」となりました。

^{しゅえん} ^{しゅり}朱円（斜里町）：かつては「しゅまとかり」（近くを流れる川がスマ・トゥカリ・ペツと呼ばれていたことに由来すると考えられます）と呼ばれていましたが、「朱円」という漢字があてられ、後に呼び名は「しゅえん」となりました。



写真2 ^{まつうらたけしろう}松浦武四郎「^{とうざいゑぞまんせんちりとりしらべず}東西蝦夷山川地理取調図」（1859年）に描かれた室蘭付近



写真3 1897（明治30）年製版の地形図「朱円」（縮尺5万分の1、陸地測量部発行）の一部：「朱円」（朱円）のところに小さく「シユマトカリ」とルビが付けられています。

同じ意味のアイヌ語でも、漢字をあてはめるときに異なる字をあてている場合も多く見られます。

例 ▶ ^{きなおし}木直 (^{みなみ}南 ^{かや}茅 ^べ部町) と ^{きねうす}杵臼 (^{うらかわ}浦河町) : どちらもキナ・ウシ (ガマなどの草が生えているところ) という地名 (→19~20ページ) に基づくと考えられています。

^{るべしべ}留辺蘂 (^{るべしべ}留辺蘂町) と ^{ほべつ}累標 (^{いずみ}現穂別町和泉) : どちらもルペシペ (ル・ペシ・ペ=道が・それに沿って下る・もの) という、沢沿いに峠を越えることのできるような交通路を指した地名 (→21~23ページ) に基づくと考えられています。



写真4 ガマ

Transmission of Place Names Derived from the Ainu Language

Place names originally pronounced according to the Ainu language's pronunciation came to be written and documented using Japanese katakana, hiragana and kanji characters. (see page 8)

During the course of transmission, these names have often become detached from the original pronunciation and meaning.

Among areas in Hokkaido, different kanji characters were chosen for the same Ainu word used for describing a geographical feature as long as the characters were phonetically applicable.

地名がもとの場所から移動した例もあります。

例 ▶ ^{むろらん}室蘭（室蘭市：4ページ参照）：もとは現在の室蘭市^{さきもり}崎守町付近を指す地名でしたが、明治になって現在の室蘭駅からその北側にかけて港と市街地が作られ、やがてこちらが「室蘭」となったものです。

^{おたる}小樽（小樽市）：もとはヲタルナイ（小樽内）川の河口付近の地名だったものが、江戸時代に漁業などのためにこの地域のアイヌの人々を現在の小樽市街に移したときに地名もそのまま移して「小樽内」と呼び、やがて「小樽」となったものです。

上の例では、どちらも昔は狭い範囲に付けられていた地名が現在では市の名前になっています。このように、かつては限られた場所を指していた地名が次第に広い範囲を指すようになった例も多く見られます。

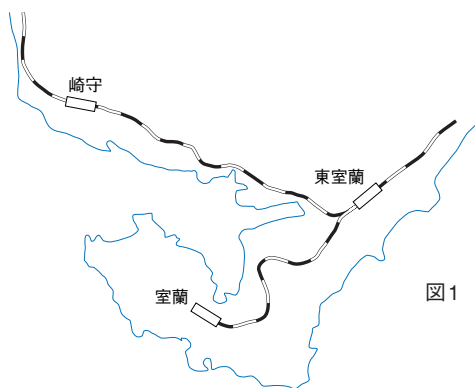


図1 現在の室蘭付近
4ページの図で「モロラン」と記された場所は、現在の崎守駅の辺りになります。

In some cases, a place name that originally described a specific area had evolved to be used to indicate either a different or a broader area.

このように、現在の地名は、その多くが、いろいろな経緯をたどってかつてのアイヌ語の呼び名から移り変わっています。現在では地形が変わってしまったところもあり、その地名がどの場所を指すのかがわからなくなったり、あるいは地名そのものが忘れられたり失われたりして、昔その地名が指し示していた意味を実際に確認することが難しくなっています。

この小冊子で紹介している地名も、多くは、もともとのその場所などをはっきりと確認できなくなっています。

時代の移り変わりによる社会や暮らしの変化に伴って、地名もまた変わっていくことは各地で見られます。ただ、特に北海道のアイヌ語地名の場合は、明治時代以降に本州などからの移民が急激に増えたことなどが大きな影響を与えたと考えられます。

いっぽうで、近年では、アイヌ文化や郷土の歴史に対する関心が高まる中で、アイヌ語の地名についても、地名の由来を学習したり、実際に現地を見学したりする催しが開かれるなどの動きも起きています。

Current place names have mostly undergone various changes and developed into those that are different from the original Ainu language designations. Due to changes in the geographic features and landscape as well as people's lifestyles, it is difficult to specify the place that the name formerly indicated and some place names have been lost as well. Today, it is increasingly difficult to actually confirm the original meaning of a place name people used in past times.

Along with the changes in society and lifestyles over time, place names have changed as well in some areas. Characteristic of changes in Hokkaido place names derived from the Ainu language is the enormous effect upon them caused by the drastic increase in the number of immigrants from the main island of Honshu beginning in the Meiji era.

On the other hand, amid the increased interest in Ainu culture and local history in recent years, there has been a variety of activities where the public can learn about the origin of place names related to the Ainu language and take field trips.

アイヌ語地名の記録と研究の歴史

3ページに掲載した地図は、1700（元禄13）年に松前藩が作成したとされ、現代に伝わる北海道の地図としてはもっとも古いものに属します。この頃の地図や文献に記録されている地名は海岸部が中心で、その数も多くはなく、伝聞などによる不正確な記述も少なからず見られます。

しかしやがて内陸部の地名も記録されるようになり、松浦武^{まつうらたけしろう}四郎（1818～1888年）のように、各地でアイヌの人たちから聞き取りを行いながら、多くの地名を書き込んだ地図を作ったり、地名の意味や由来などを記録したりする人も現れました。



写真5 はたのあわきまる ひがしえぞちめいこう
秦檜麻呂『東蝦夷地名考』（1808年）
アイヌ語地名の解釈を記した文献と
してはもっとも古いものとされてい
ます。



写真6 松浦武四郎「東西蝦夷山川地理取調図」
羽幌付近を描いた部分の、表紙と図の
一部です。

明治時代以降には、より詳しい地名の調査や、アイヌ語研究の知識に基づく地名の研究が行われるようになりました。

永田方正（1838～1911年）は、全道を廻って多くのアイヌ語地名を調べ、『北海道蝦夷語地名解』（初版1891年）という本を著しました。

日本のアイヌ語研究の基礎を築いたとされる金田一京助（1882～1971年）やその研究を引き継いだ知里真志保（1909～1961年）らは、言語学の立場から地名研究を進めました。特に知里真志保は、当時既に多く見られた科学的な知識に基づくものとは言えない地名研究の風潮を、厳しく批判しています。

山田秀三（1899～1992年）は、東北の地名に対する関心からアイヌ語地名の調査を進め、金田一・知里らの成果に学びつつ、アイヌ語地名の研究の水準を大きく高めるとともに、北海道や東北の地名に関する多くの業績を遺しました。先ず古い地図や文献をよく調べ、それに基づき実際に現地を訪ねて地形などを確認するという方法や、似た名前の地名を数多く調べてそれらの結果を重ね合わせながら考えを進めていくという研究の手順は、山田秀三によって確立されたものです。

この小冊子でも、本文の内容の多くは、山田秀三の記述を基本にしています。



写真7
永田方正『北海道蝦夷語地名解』（初版の復刻版）



写真8
知里真志保『地名アイヌ語小辞典』（→30ページ）



写真9
山田秀三『東北と北海道のアイヌ語地名考』（→31ページ）

アイヌ語地名の分布

北海道には各地にアイヌ語地名があることが知られていますが、サハリン（樺太）や千島（クリル）列島にも、同じような地名があることが確認されています。

本州でも、津軽海峡を挟んで、おおよそ宮城県の一部から山形県・秋田県の境のあたりまでは、アイヌ語地名と確認できるものが比較的多く存在することが知られています。

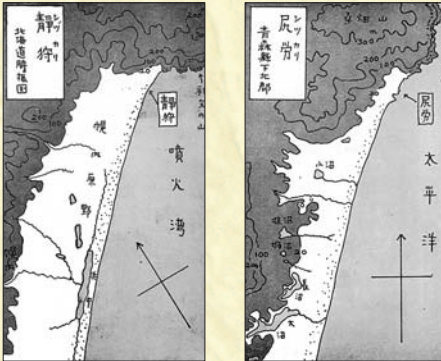


写真10 静狩



図2 おしゃまんべ 静狩 と 青森県 東通村 尻労 (山田秀三『東北と北海道のアイヌ語地名考』：どちらも、「シリ・トゥカリ＝山の手前」という、比較的長く続いた浜が急に大きな山(断崖)に突き当たる辺りの地名を指すと考えられています。

Distribution of Place Names Derived from the Ainu Language

It is a well-known fact that place names related to the Ainu language exist in various parts of Hokkaido, and place names similar to these also have been confirmed in Sakhalin and the Kuriles. Place names whose Ainu origin has been confirmed through academic research are distributed in the area of Honshu Island beyond the Tsugaru Strait. More of these place names are found in areas of Japan extending from Hokkaido down to the northern part of Miyagi Prefecture, near the border between Yamagata and Akita Prefectures, compared with areas of Japan to the south of that northern Miyagi border region.

[2] いろいろなアイヌ語地名

これまで見てきたように、アイヌ語の地名には、地形の様子を表したものや、その土地の人々の暮らしと関わって名づけられたものなど、いろいろな場合が見られます。ここでは、そうしたアイヌ語地名について、いくつかの例を挙げて紹介します。

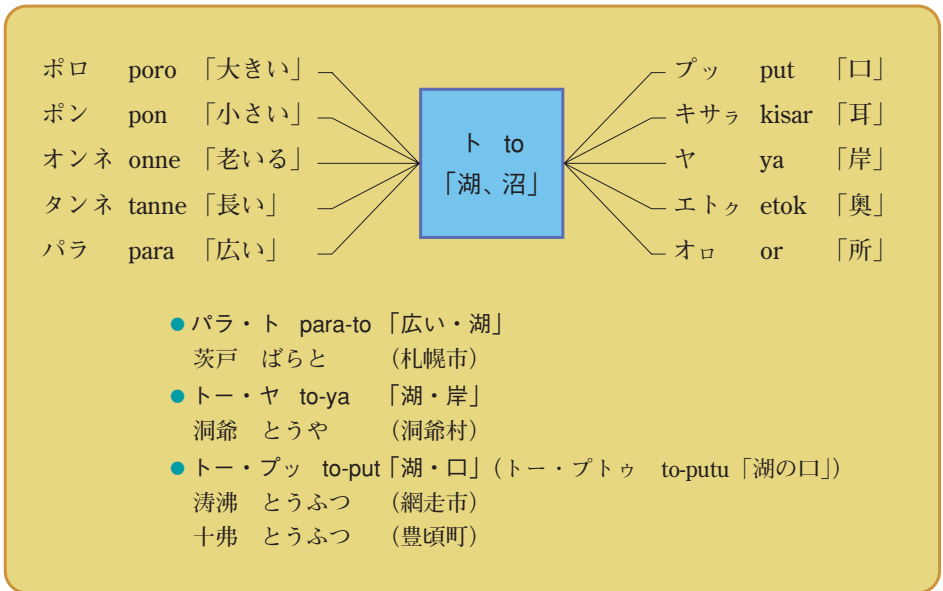
A Variety of Place Names Derived from the Ainu Language

As has been stated, place names of Ainu origin indicate various things including geographic features and landscape or the way the place had related to the lives of Ainu people.

1 地形などを表す地名

川や湖、崖や岬、海岸などの地形を表す言葉に、その性質やありさまを示す言葉が付いて、実際の地形の様子やそこに暮らす人々からみた特徴などを表したと思われる地名が数多く見られます。

例えば、湖や沼などを意味する「ト」という言葉に、次のようにいろいろな言葉が付いた地名が見られます。



Many names primarily show the geographic features of a river, lake, cliff, cape or sea coast, and they are combined with a word that describes details. These place names thus indicate actual geography and specific characteristics as viewed by local people related to the respective places.

「川」や「沢」を意味する「ペツ」や「ナイ」の付く地名には、次のような例が見られます。

例 ▶ ^{ほんべつ}本別（^{しかべ}本別町、鹿部町など）：「ポン・ペツ〈小さい・川〉」に由来すると考えられています。

^{きつない} ^{まくべつ}札内（幕別町）：「サツ・ナイ〈乾いている・川〉」に由来すると考えられています。ふだんは水が流れていても、雨の少ない季節になると地面に水が吸い込まれてしまって乾いて見える川を表す場合が多いようです。

^{ないぶな} ^{なよろ}内淵（名寄市）：「ナイ・プツ〈川・口〉」に由来すると考えられています。川の合流地点などを表す場合が多いようです。

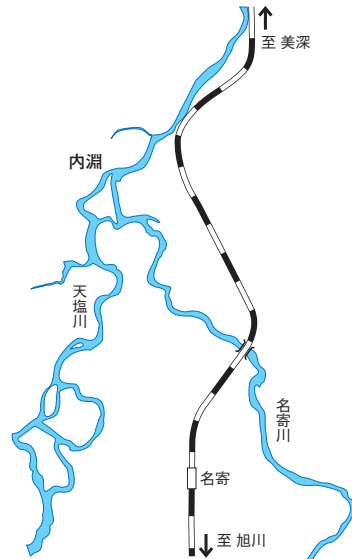


図3 内淵付近（大正時代の地形図をもとに作成）
内淵は、天塩川に名寄川などが合流する地点の近くにあたります。

The place name, "Honbetsu" as in Honbetsu and Shikabe Towns, appears to be derived from the two Ainu words pon (small) and pet (river) linked together.

その他、^{がけ}崖、海岸、滝などの地形に関わる地名には、次のようなものがあります。

● 崖

例 ▶ ^{ひらぎし}平岸（札幌市、赤平市）：「ピラ・ケシ〈崖・(の) 端〉」に由来すると考えられています。

^{びらか}平賀（門別町）：「ピラ・カ〈崖・(の) 上〉」に由来すると考えられています。

図4 平賀付近（山田秀三『北海道のアイヌ地名十二話』をもとに作成）

今の平賀の集落は平地にありますが、以前は、沙流川を挟んで東側の崖の上がありました。集落の移転に伴って地名も移動したものです。



● 砂浜

例 ▶ ^{うたすつ すつつ}歌棄（寿都町）：「オタ・スツ〈砂浜・(の) 根もと〉」に由来すると考えられています。オタスツとは、砂浜が海沿いに広がって、その端で磯浜や石浜に変わる手前の辺りを指すとされています。

オタモイ（^{おたる}小樽市）：「オタ・モイ〈砂浜・(の) 入り江〉」に由来すると考えられています。

"Otamoi" in Otaru is deemed to have originated from the combination of the two Ainu words ota (a sandy beach) and moy (a small bay).

● 滝

例 ▶ 層雲別（上川町）：「ソ・ウン・ペツ〈滝・ある・川〉」に由来するとされています。

例 ▶ 渚滑川（滝上町～紋別市）：川の名は「ソ・コツ〈滝・くぼみ（滝壺）〉」に由来するとされています。現在の滝上町の市街地のやや下流部に滝のような急流と淵が見られます。

● その他

例 ▶ 発足（共和町）：「ハッタラ〈淵〉」があったことに由来するとされています。

例 ▶ 遠軽（遠軽町）：「インカラ・ウシ・イ〈眺める・いつもする・ところ〉」に由来するとされています。この呼び名は、その上から周囲や遠くを望むことができるような山や崖を指すとされ、ここでは、町の市街地のすぐ傍らにそびえる瞰望岩かんぼうがそれにあたります。

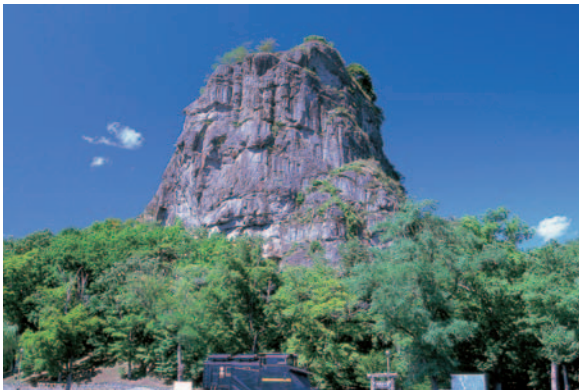


写真 11 遠軽の瞰望岩

2 動物や植物に関する地名

その土地に棲んでいる動物や生えている植物などに関する地名も多く見られます。たいていは、それらの動物や植物がその近辺に暮らす人々にとって食糧や生活の資源になっていることが多いようです。

● 動物に関する地名では、次のような例が見られます。

例 ▶ ^{いくとら}幾寅（^{みなみふらの}南富良野町）：近くを流れるユクトラシュベツ川（ユク・トゥラシ・ペックシカ・登る・川）という意味だと考えられています）に由来するとされています。

^{いそふんない}磯分内（^{しべちの}標茶町）：「イソポ・ウン・ナイ〈ウサギ・いる・沢〉」に由来すると考えられています。



写真12 エゾシカ

例 ▶ ^{ちかぶみ}近文（^{あさひかわ}旭川市）：近くの山にチカプニ（チカプ・ウン・イく鳥・いる・ところ）という意味だと考えられています）と呼ばれる大岩があることに由来するとされています。

例 ▶ トカラモイ（^{らうす}羅臼町）：今は昆布浜と呼ばれているところの昔の呼び名です。「トゥカラ・モイくアザラシ・(の)入江」に由来すると考えられています。



写真13 ゴマフアザラシ

Many place names are related to the animals and plants in the area, in which case those animals and plants were important sources of food and other basic needs of living. "Isobun'nai" in Shibecha Town, is likely derived from the three Ainu words *isopo* (rabbit), *un* (being) and *nay* (stream) combined with one another.

例 ▶ ^{ちらいおつ つきがた}知来乙（月形町）：「チライ・オックイトゥ・たくさんいる」に由来するとされています。

^{いちゃん ふかがわ}一己（深川市）：「イチャン〈サケの産卵場〉」に由来するとされています。

^{びばうし びえい}美馬牛（美瑛町）：「ピパ・ウシ・イ〈カワシンジュガイ・多くいる・もの（川）〉」に由来すると考えられています。



写真14 産卵のため川を上ってきたサケ

*カワシンジュガイは、カラス貝、沼貝等とも呼ばれます。

→ カワシンジュガイの殻を使った、穂を摘み取る道具の写真を小冊子8の21ページで見ることができます。

● 植物に関する地名では、次のような例が見られます。

例 ▶ 去場（平取町）：「サラ・パく葎原・（の）上手」に由来すると考えられています。

鬼斗牛（旭川市）：「キト・ウシ・イくギョウジャンニク・多い・ところ」に由来すると考えられています。



写真16 ギョウジャンニク

例 ▶ 蘭越（千歳市）、根志越（千歳市）：それぞれ、「ランコ・ウシ・イくカツラの木・群生する・ところ」、「ネシコ・ウシ・イくクルミの木・群生する・ところ」に由来するとされています。

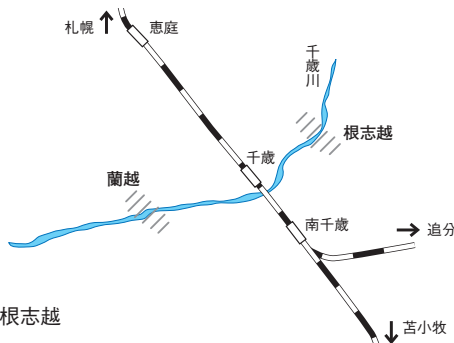


図6 蘭越と根志越

例 ▶ 多度志 (深川市) : 「タツ・ウシ・ナイ <樺・群生する・川>」に由来すると考えられています。

写真17 白樺の木と樺皮を使った民具



① 白樺の木



② 樺の皮



③ 樺皮を使った灯燭 (千歳: これに火をつけてたいまつにします)



④ 樺皮の容器 (千歳)

3 人々の暮らしに関わる地名

交通路、狩猟や採集、信仰や儀式など、生活の中の様々な営みに関係する地名があります。

● 交通路などに関する地名

5ページで紹介した「^{るべしべ}留辺蘂」「^{るべしべ}累標」も峠を越える交通路の例です。同じような地名は各地で見られます。

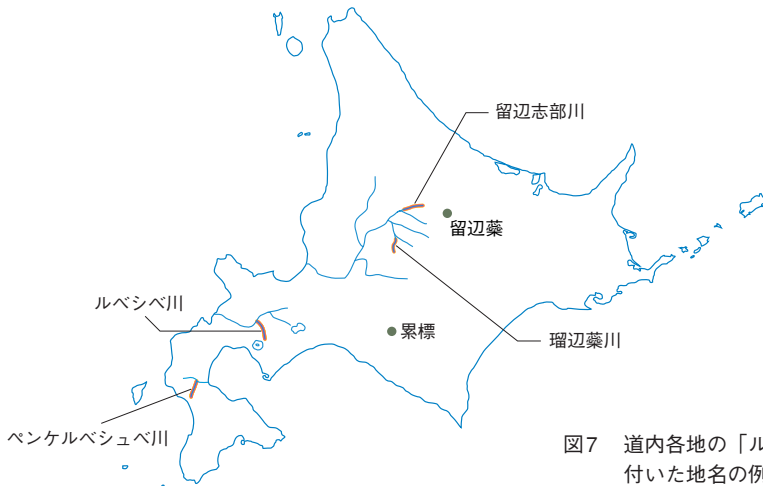


図7 道内各地の「ルベシベ」の付いた地名の例

Some place names are related to the various activities people had carried out in leading their lives, representing transportation roads, hunting and gathering activities and religion and rituals.

The place name "Rubeshibe" appears to be based on the combination of three Ainu words; ru(road), pes (descend along with) and pe (unspecified object). In this context, the name seems to indicate a road that people take to cross a mountain pass and which runs alongside a small river.

昔の暮らしでは、同じ目的地に向かうときでも、夏場と雪の降る季節とでは通り道を変えることがあったと言われています。

例えば咲来（音威子府村）は「サク・ル〈夏（の）・道〉」、又留内（稚内市）は「マタ・ル〈冬（の）・道〉」に由来すると考えられています。



図8 咲来付近

「パンケ」「ペンケ」とは、この場合、それぞれ「川下の」「川上の」という意味で用いられています。現在の咲来峠を越える道も、天塩川流域と歌登町やオホーツク海側とを結んでいます。

この他にも、交通路や交通の手段などに関する地名として、次のような例があります。

例 ▶ 伊香牛（当麻町）：「イ・イカ・ウシ・イくそれ・（を）越える・いつもする・ところ」で、川（現在の石狩川上流）を越えて渡る地点であったことに由来するのではないかと考えられています。

チプタウシナイ（今金町）：「チプ・タ・ウシ・ナイ〈舟・（を）彫る・いつもする・沢〉」に由来するとされています。かつて川筋を行き来するときの主な交通手段は、丸木舟でした。ここはそれを造るのに適した木の多い川筋であったためではないかと考えられています。



写真18 ① アイヌ民族博物館（白老町）における丸木舟の製作



② 湖に浮かべられた丸木舟

● 狩猟や採集に関する地名

16～20ページで動物や植物に関する地名を紹介しましたが、そうした動植物の狩猟や採集に関する地名も多く見られます。

例 ▶ 久保内（^{くぼない} 壮瞥町）：^{そうべつ}「ク・オ・ナイ〈仕掛け弓・多くある・沢〉」に由来する
と考えられています。



写真19 仕掛け弓



写真20 弓と矢

例 ▶ 浦士別（網走市）：「ウライ・ウシ・ペック〈^{やな}築・ある・川〉」に由来すると考えられています。

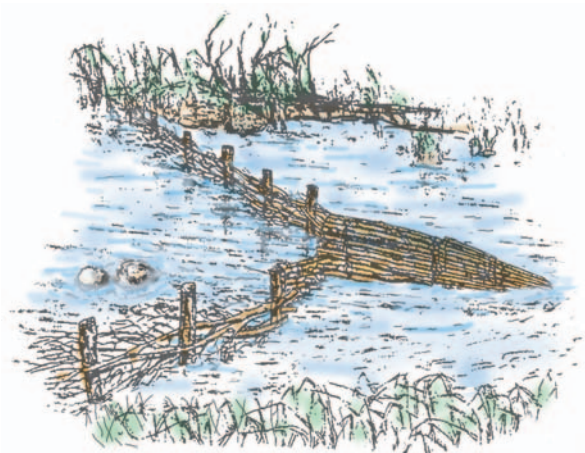


図9 築（川を上ってきた魚が、中央のカゴの中に入り込むしくみになっています）

例 ▶ シュルクタウシベツ川（士別市）：「スルク・タ・ウシ・ペック〈トリカブトの根・（を）掘る・いつもする・川〉」に由来すると考えられています。
トリカブトの根は、狩猟に使う矢に塗る毒に使いました。



写真21 トリカブト

例 ▶ ^{あっかるうすない}厚軽白内 ^{つきがた}(月形町) : 「アッ・カラ・ウシ・ナイ〈オヒョウの樹皮・(を)と
る・いつもする・沢〉」に由来するとされています。



写真22 オヒョウの木肌

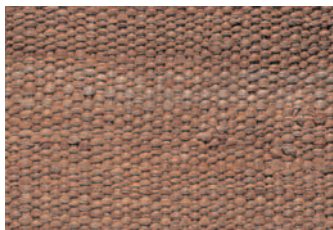


写真23 オヒョウの樹皮の繊維を編んだ布



写真24 オヒョウの樹皮衣 (サハリンのものです)

● 信仰や儀式に関する地名

儀式を行う場所や信仰にちなんだ地名なども各地に見られます。

例 ▶ ^{ちのみ}乳呑（^{うらかわ}浦河町）：ここにある海辺に突き出た丘が「チ・ノミ・シリ〈我ら・祈る・山〉」と呼ばれていたことに由来すると考えられています。かつてこの地域の人々がその丘の上に集まって祈りごとをしていたところだとされています。

^{ぬさまい}幣舞（^{くしろ}釧路市）：「ヌサ・オマ・イ〈^{さいだん}祭壇・ある・ところ〉」に由来すると考えられています。



写真25 祭壇で祈るようす（白老町：大正時代の頃に撮影されたものです）

アイヌ語地名の研究について

アイヌ語地名は、アイヌの人々の言葉、歴史、文化を伝える身近な存在として関心を寄せられることも多いようです。しかし現在では、もともとの地名の呼び方や指し示した場所、その意味や由来を確かめることが難しいところが多くなっています（→7ページ）。

また、例えば12ページの「ト（湖、沼）」の付く地名の例に見られるように、アイヌ語地名の付けられ方には一定のパターンや決まりごとがはたっていることがうかがえます。従って、アイヌ語地名についてより深く調べていくためには、アイヌ語の単語の発音や意味に関する知識だけでなく、文法（単語のなりたちに関するしくみ）や、単語を続けて発音するときの音の変化のしかたなどに関する知識を持っておくことが必要になります。

このほか、例えば、前ページで紹介した「チノミシリ」は、言葉の意味の解釈から「我ら・祈る・山」というところまでをつかむことができます。しかし、実際の地名には、その山が祈りの対象になっている場合もあれば、その山で祈りごとを行っていた場合などもあることが知られているので、その場所がどれにあたるのかについては、さらにその土地の伝承や記録なども調べてみなければなりません。

アイヌ語地名の調査や研究は、言葉の意味やアイヌ語の文法をつかんでおくことはもちろん、その土地の地形や伝承、昔の記録や似たような地名の比較などの様々な要素を厳密に調べて重ね合わせていくことによって、はじめて広がりをもって進めていくことのできるものだと言えます。

● 協力（敬称略）

財団法人アイヌ民族博物館 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園 北海道大学附属図書館
静内町教育委員会 様似町教育委員会 千歳サケのふるさと館 名寄市北国博物館

● 写真提供、出典等

表紙 (有)さっぽろフォトライブ

写真1, 5 北海道大学附属図書館北方資料室

写真3 陸地測量部5万分の1地形図「朱円」（1897年製版）

写真12 (有)さっぽろフォトライブ

写真13 水野文子

写真14 千歳市サケのふるさと館

写真15, 17③④, 20, 24 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園

写真18①②, 25 財団法人アイヌ民族博物館

写真19 秦穂鷹『蝦夷島奇観』（影印本、佐々木利和・谷澤尚一研究解説）雄峰社 1982年

写真21 静内町教育委員会

上記以外は当センター所蔵写真



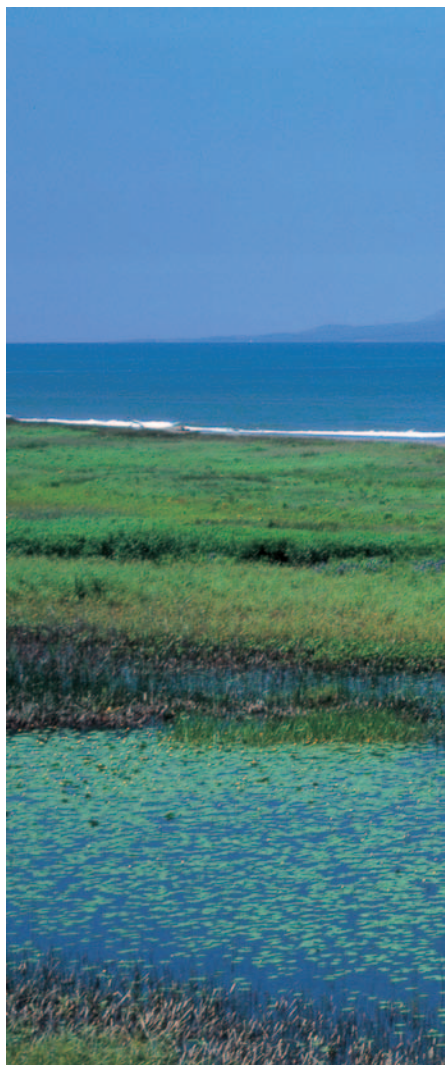
この小冊子は、環境に配慮した用紙を使用しています。
古紙配合率100%・白色度70%

◆発行—平成16年2月

◆編集—北海道立アイヌ民族文化研究センター
HOKKAIDO AINU CULTURE RESEARCH CENTER
〒060-0001 札幌市中央区北1条西7丁目 プレスト1・7 5階
TEL.011-272-8801 FAX.011-272-8850

<http://www.pref.hokkaido.jp/kseikatu/ks-ambkc/hacrc/hp/index.htm>

利尻岳



pon

kanpi-sos

ポン カンピソシ



10

◆アイヌ文化紹介小冊子

アイヌ文化を学ぶために

[1] 図書と視聴覚資料

アイヌ文化について学ぶにあたっての入門的な内容だと考えられる文献、概説書のほか、ビデオ・CDなどの視聴覚資料を紹介します。

2005年1月現在で市販されているものには価格を付けました。(原則として税込みの価格を記載しています)

1 アイヌ文化全般に関する入門書・概説書など

- 財団法人アイヌ民族博物館（監修）『アイヌ文化の基礎知識』草風館 1993年 1,680円
題名のとおり、アイヌ文化のさまざまな項目についてわかりやすく説明した本です。
- 【ビデオ】財団法人アイヌ無形文化伝承保存会（編）『アイヌ文化を学ぶ THE CULTURE OF AINU』財団法人アイヌ無形文化伝承保存会 1997年 4,500円
アイヌ文化のあらましに関する入門的な紹介のビデオです。日本語・英語の二カ国語版です。簡潔な解説書も付いています。
- 『静内地方のアイヌ文化』静内町教育委員会 1997年 400円
日高の静内地方のアイヌ文化についてわかりやすく説明したパンフレットです。儀式や食べ物、衣服などに関する民具について写真や図を使って紹介されています。



●【ビデオ】財団法人アイヌ無形文化伝承保存会『アイヌ無形文化記録映画ビデオ大全集』
財団法人アイヌ無形文化伝承保存会

1976年から1巻ずつ作成され、4～5巻毎にシリーズとしてまとめられ、公共の図書館などに販売されています。現在7シリーズまであり、いずれも、伝統的な衣食住の文化や儀式、口頭文芸、歌や踊りなどに関する内容です。所蔵している図書館などで閲覧することができます。各巻の詳しい内容などについては発行元であるアイヌ無形文化伝承保存会にお問い合わせください。
(電話 011-221-0019)

●【ビデオと解説書】『アイヌ生活文化再現マニュアル』財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構

伝統的な民具の作り方や儀式などを学習することを目的に製作されているシリーズで、ビデオと解説書がセットになっています。これまでに「織る」(樹皮衣)、「綴る」(板綴り舟)、「縫う」(木綿衣)などが発行されています。市販はされていませんが、発行元であるアイヌ文化振興・研究推進機構で貸し出しを行っていますのでお問い合わせください。(電話 011-271-4171)

●札幌学院大学人文学部(編)『アイヌ文化に学ぶ』札幌学院大学生協同組合 1990年
1,995円

大学の公開講座の記録です。アイヌ語の口頭文芸、アイヌ語の歴史、衣服、食用にする植物などについて、当時の研究の最前線を踏まえた解説になっています。

●北の生活文庫編集会議(編)『北の生活文庫』(全10巻)北海道新聞社 1995～2000年
1,631円

「北海道民のなりたち」(第1巻)、「北海道の自然と暮らし」(第2巻)など、各巻ごとに北海道の歴史や伝統的な生活文化、ことばと口頭文芸、祭りと芸能などのテーマをとりあげた概説書です。各巻ごとに、それぞれのテーマに関わるアイヌの文化や歴史について説明されています。

●榎森進(編)『アイヌの歴史と文化』Ⅰ、Ⅱ 創童舎 2003、2004年 2,100円

東北電力株式会社の広報誌の連載をまとめたものです。「松前藩とアイヌ」「開拓とアイヌ民族」「アイヌの口承文芸」「アイヌの狩猟」「アイヌ語地名の世界」「知里真志保とその家族」などアイヌの歴史と文化に関する約50のテーマがとりあげられています。



2 ことばと口頭文芸

アイヌ語や口頭文芸を学ぶ上で基本的な文献と思われるもの、概説書・研究書のなかで重要と思われるものや、物語の内容が書かれていたり実際に語っているところを聞いたりできるものを紹介します。

① アイヌ語の入門書

- 社団法人北海道ウタリ協会『アコロ イタク AKOR ITAK』1994年 1,500円
全道各地のアイヌ語教室で用いるために作成されたアイヌ語の入門書です。ていねいな説明に加えて、各地の方言を併記していることも特長です。ビデオ教材も発売されています。
- 中川裕・中本ムツ子『CD エクスプレス アイヌ語』白水社 2004年 2,940円
世界のいろいろな言葉の入門書のシリーズの中の1冊で、1997年に発行された『エクスプレス アイヌ語』にCDを付けたものです。アイヌ語千歳方言をベースに作成されており、文字と表記から会話や文法の入門までがいろいろな例文を使ってわかりやすく説明されています。
- 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構（編）『アイヌ語ラジオ講座テキスト』財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構
アイヌ文化振興・研究推進機構が1998（平成10）年度から開設しているアイヌ語ラジオ講座（STVラジオで毎週日曜日朝と土曜日夜に放送中）のテキストで、3カ月ごとに1冊ずつ発行されています。市販はされていませんが、希望者にはアイヌ文化振興・研究推進機構で配布しています。また、ラジオ放送を収録したテープ（ミニディスク）の貸し出しも行われています。詳細はアイヌ文化振興・研究推進機構にお問い合わせ下さい。（電話 011-271-4171）



② アイヌ語の辞典

- 中川裕『アイヌ語千歳方言辞典』草風館 1995年 9,991円
千歳市で採録した単語約3,700語を収め、簡単な解説や例文なども付けられています。カタカナ表記を主にしたアイウエオ順の配列になっています。
- 田村すず子『アイヌ語沙流方言辞典』草風館 1996年（再版1998年）18,900円
日高の沙流地方で採録した単語を収めており、見出し語は約9,700項目あります。文法などに関する解説や例文も付けられています。ローマ字表記を主にカタカナを併記し、アルファベット順の配列になっています。
- 萱野茂『萱野茂のアイヌ語辞典』三省堂 1996年（増補版2002年）10,500円
日高地方平取町に生まれ育った著者が聞いて学んだ言葉を中心に収録しており、見出し語は約8,000項目あります。カタカナ表記を主にしたアイウエオ順の配列で、生活用具などのイラストなども付けられています。全ての見出し語の音声などを収録したCD-ROM版もあります。（1999年発行）
- 切替英雄『アイヌ神謡集辞典』大学書林 2003年 10,500円
知里幸恵著『アイヌ神謡集』（→小冊子 6 17ページ）に見られるアイヌ語の辞典のほか、『アイヌ神謡集』のテキストやその解説などを一冊にまとめた本です。
- 服部四郎（編）『アイヌ語方言辞典』岩波書店 1964年（3刷1995年）
北海道内8か所のほかサハリン（樺太）、千島の方言について調査した結果をまとめた専門的な内容の辞典です。日本語のいろいろな言葉について、それぞれの地域のアイヌ語でどのように表現するかが書かれています。アイヌ語はローマ字で表記されています。
- 知里真志保『分類アイヌ語辞典』（『知里真志保著作集』別巻Ⅰ、Ⅱ）平凡社 1974年（6刷2000年）27,300円
「植物編」「動物編」「人間編」の3冊からなり、民俗学的な情報を多く含んでいることが特徴です。「動物編」は遺稿がまとめられたものです。

③ 口頭文芸に関する概説書など

《概説書》

- 中川裕『アイヌの物語世界』 平凡社（平凡社ライブラリー）1997年 979円
様々な物語の例を挙げながら、専門的な内容についても具体的にわかりやすく説明しています。

《アイヌ語原文の物語を中心にしたもの》

- 知里幸恵（編訳）『アイヌ神謡集』 岩波書店（岩波文庫）1978年 483円
→小冊子6 17ページ
- 知里真志保（編訳）『アイヌ民譚集』 岩波書店（岩波文庫）1981年
→小冊子6 21ページ
- 萱野茂『カムイユカラと昔話』 小学館、1988年、3,796円（税別）
著者が日高地方の平取町などで採録した51編の物語を収録しています。散文説話や子守歌などは日本語訳を、神謡はカタカナ表記のアイヌ語原文と日本語訳を載せています。
- 中本ムツ子（語り）・片山龍峯（編・解説）『アイヌの知恵 ウパシクマ 1』『同2』片山言語文化研究所（発売元：新日本教育図書）1999年、2001年 2,625円
千歳市に暮らす語り手の、先祖や親の教えなど幼い頃の思い出を絵本にしたものです。アイヌ語原文をカタカナとローマ字で載せ、日本語訳と文法の解説を付けています。



《童話や絵本として編集されたもの》

アイヌの物語を絵本にしたものはこれまでに多く出版されています。ここでは、もとの物語が比較的はっきりと記されているものの中から、シリーズになっているものを中心に紹介します。

- 川上まつ子（語り）・中村齋（文）・北市哲男（絵）『ポロシルンカムイになった少年』財団法人アイヌ民族博物館 2002年（第2版） 1,000円
平取町の川上まつ子さんから採録した、力強く成長していく少年のことを物語った散文説話を絵本にしたものです。
- 四宅ヤエ（語り）・藤村久和（文）・手島圭三郎（絵）『カムイ・ユーカラの絵本 ― 神々の物語』ベネッセコーポレーション
これまでに『カムイチカッ』、『ケマコシネカムイ』、『チビヤッカムイ』、『イツボカムイ』の4冊が刊行されています。いずれも釧路地方の四宅ヤエさんから採録した物語を絵本にしたものです。
- 萱野茂『アイヌ ネノアン アイヌ たくさんのふしぎ傑作選』福音館 1992年 1,365円
物語2編が収録されています。
- 萱野茂（文）・石倉欣二（絵）『アイヌの絵本』小峰書店 各 1,470円
これまでに、『オキクルミのぼうげん』『木ぼりのオオカミ』『風の神とオキクルミ』『火の雨 氷の雨 カムイユカラ・アイヌの神さまが話したこと』『パヨカカムイ ユカラで村をすくったアイヌのはなし』『アイヌとキツネ』『熊神とカパラペポンス』の7冊が刊行されています。
- 松谷みよ子（文）・西山三郎（絵）『ちいさなオキクルミ』ほるぷ出版 1985年 1,523円
知里幸恵『アイヌ神謡集』の中の物語を素材にして書かれた絵本です。
- 神沢利子（文）・赤木末吉（絵）『けちんぼ おおかみ』偕成社 1987年 1,470円
旭川の杉村キナラブックさんの語った物語を素材にして書かれた絵本です。

④ 専門書など

- 田村すず子「アイヌ語」(『言語学大辞典セレクション 日本列島の言語』三省堂 1998年 5,250円)
『言語学大辞典』の第1巻(三省堂、1988年)に掲載されたものの再録です。言語学を専門的に学ぼうとする人を対象に書かれたもので、約80ページにおよぶアイヌ語の解説です。文法を中心に、研究の歴史や口頭文芸などにも触られています。英語版も出版されています(『The Ainu Language』三省堂 2000年)
- 知里真志保『アイヌ語入門 ―とくに地名研究者のために―』北海道出版企画センター(復刻版) 1985年 1,274円
初版は1956年に出版されています。特に地名研究のありかたを意識して書かれた小型の文法書です。
- 『岩波講座 日本文学史 第17巻 口承文学2・アイヌの文学』岩波書店 1997年
アイヌの口頭文芸に関する最近の研究成果を述べた専門的な論文のほか、祈り言葉や歌謡の伝承、アイヌ語の復興活動の歴史や現状などについての、様々な立場からの文章が載っています。
- 知里真志保『知里真志保著作集』全6巻 平凡社 1973年
アイヌ語アイヌ文化について大きな足跡を遺した著者の論文などを集めたものです。第1、2巻にアイヌ口頭文芸に関するものを収録しており、神謡、散文説話などに関する論文や物語の紹介が載っています。



- 金田一京助『金田一京助全集』全 15 巻 三省堂 1992～1993 年 各 8,000 円前後
アイヌ語アイヌ口頭文芸に関する論文は主に第 7～11 巻に収録されています。
- 久保寺逸彦『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』岩波書店 1977 年（2 刷 1995 年）
1930 年代に採録した神謡など 124 編について、1 編のみ日本語訳と解説を載せ、他はすべてローマ字表記のアイヌ語原文と日本語訳で載せています。特に註解は詳しく記されています。
- 久保寺逸彦『アイヌの神謡』草風館 2004 年 5,040 円
もともと『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』の「説話編」として予定されていたもので、この本に収録された物語の現代語訳です。
- 中川裕（校訂）・大塚一美（編訳）『キナラブック口伝 アイヌ民話全集 1 神謡編一』北海道出版企画センター 1990 年
旭川の杉村キナラブックさんが語った神謡 29 編にカタカナ表記のアイヌ語原文と日本語訳を載せています。
- 杉村キナラブックほか『キナラブック・ユーカラ集 旭川叢書（第三巻）』旭川市 1969 年
上記の本と同じ語り手による物語 22 編について、英雄叙事詩と神謡はアイヌ語原文と日本語訳を、散文説話は日本語訳のみを載せています。ソノシートレコードが付いています。
- 鍋沢元蔵『アイヌの叙事詩』門別町郷土史研究会 1969 年
日高地方の門別町に住んだ著者が自ら筆録した神謡や英雄叙事詩をローマ字表記のアイヌ語と日本語訳で載せています。
- 金成マツ（筆録）・金田一京助（訳注、筆録）『アイヌ叙事詩 ユーカラ集』全 9 巻 三省堂 1959～1975 年（覆刻 1993 年）
1～7 巻は登別生まれの金成マツさんが筆録した神謡や英雄叙事詩にローマ字表記のアイヌ語原文と日本語訳を載せています。8 巻目からは、平取町の伝承者から採録したもので、第 9 巻は、校正中に著者が亡くなったため、その後に関係者の手で出版に至ったものです。

《各地の教育委員会などが発行する報告書など》

北海道教育委員会などで、口頭文芸をはじめとするアイヌの伝承を調査した記録を報告書にまとめて刊行しているシリーズがあります。ここでは、その中から口頭文芸を中心にしたシリーズを紹介します。物語については、原則としてカタカナとローマ字表記のアイヌ語原文と日本語訳を載せています。

▶ 静内町教育委員会（編）

『静内地方の伝承Ⅰー織田ステノの口承文芸ー』1～5 1991～1995年
静内町の織田ステノさんが語った物語を採録したものの報告書です。

▶ 財団法人アイヌ無形文化伝承保存会（編）

『アイヌ無形民俗文化財記録』1～7 財団法人アイヌ無形文化伝承保存会 1981～1986年
全道各地で採録された物語などの報告書です。

▶ 北海道教育庁生涯学習部文化課（編）

『アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ』1～17 1987～2004年
全道各地で採録した神謡や散文説話などの報告書です。

『アイヌ民俗文化財緊急調査報告書（ユーカラ シリーズ）1～26』1979～2004年
登別市の金成マツさんが書き遺した英雄叙事詩のノートをもとにカタカナとローマ字表記のアイヌ語原文と日本語訳を載せています。

『アイヌ無形民俗文化財調査報告書（口承文芸シリーズ1～19）』北海道教育委員会 1982～2001年

1～6は登別市の知里幸恵さんが書き遺したノートについて、7～10は門別町の伝承者から筆録した久保寺逸彦さんのノートについて、11からは鶴居村の八重九郎さんの語った物語についての報告書です。

『知里真志保フィールド・ノート1～3』北海道教育委員会
2002～2004年

アイヌ語研究者である知里真志保さんが口頭文芸などを採録したノートについての報告書です。



⑤ 視聴覚資料

アイヌの口頭文芸について、実際に語られたものを聞いたり、語っている様子を見ることができる視聴覚資料を紹介します。文献と同じく、現在も市販されているものには価格を記しました。道内の主な図書館などではこれらの資料を視聴できるところもあります。

- 【カセットテープ】札幌学院大学人文学部（編）『アイヌ文化に学ぶ』別売カセットテープ『カムイノミ・カムイユカラ・ユカラ』1,300円（税込）
図書（→3ページ）には、アイヌの口頭文芸に関する講義の記録のほか、静内町の織田ステノさんによる神謡、英雄叙事詩のそれぞれ一部分と、葛野辰次郎さんによるカムイへの祈り言葉が載っています。この別売のカセットテープには、これらの口頭文芸と祈り言葉が収録されています。
- 【CD、カセットテープ】片山龍峯（編）『カムイユカラ』片山言語文化研究所 1995年 CD版 7,300円、カセットテープ版 6,800円
→小冊子6 18～19ページ
- 【CD】財団法人アイヌ民族博物館（編）『アイヌ民族博物館 伝承記録3・昔話 上田トシのウエベケレ』財団法人アイヌ民族博物館 1997年 1,500円
→小冊子6 23ページ
- 【CD】同『アイヌ民族博物館 伝承記録5 虎尾ハルの伝承 鳥』財団法人アイヌ民族博物館 2001年 1,500円
静内町の虎尾ハルさんが伝承する鳥に関する言い伝えや物語などを集めた報告書です。アイヌ語はカタカナとローマ字で表記されており、物語と歌を収録したCDが付いています。



- 【ビデオとCD】 萱野茂『萱野茂のアイヌ神話集成』全 10 巻 ビクターエンタテインメント 1998 年 189,000 円 (税込)
日高の沙流地方の平取町や門別町などを中心に採録した神話 23 編、散文説話 13 編、英雄叙事詩 4 編のほか、多数の歌や祈り言葉などを CD11 枚と VHS ビデオテープ 1 本に収録した CD ブックです。解説書にカタカナとローマ字表記のアイヌ語原文と日本語訳を載せています。
- 【ビデオ】『国際先住民年記念 第 6 回アイヌ民族文化祭』 社団法人北海道ウタリ協会 1993 年
→ 17 ページ
- 【カセットテープ】 萱野茂『ウエベケレ集大成』アルドオ 1974 年
沙流川流域で伝承されてきた散文説話 11 編を地元に住む著者が集めたものです。本文にカタカナ表記のアイヌ語原文と日本語訳を載せ、音声資料カセットテープが付いています。
- 【CD】『蘇えるユカラ 萱野茂 (語り)』 KICC-5217 キングレコード 1997 年
門別町と登別市の英雄叙事詩 2 編を収録した CD です。解説書にカタカナ表記のアイヌ語原文と日本語訳を載せています。
- 【CD】『昔話 ふるさとへの旅【北海道】』 KICH-2312 キングレコード 1999 年 2,000 円
北海道の昔話などを収録したもので、アイヌに関しては鶴川町の神話 1 編と本別町の散文説話 2 編を収録した CD です。解説書に日本語のあらすじが載っています。
- 【カセットテープ】 貫塩喜蔵『アイヌ叙事詩 サコロベ』 白糠町 1980 年
白糠町の貫塩喜蔵さんと母のキシさんが語った英雄叙事詩を、ローマ字とカタカナ表記によるアイヌ語原文と日本語訳とを載せ、カセットテープを付けたものです。
- 【カセットテープ】 田村すず子『アイヌ語音声資料』 1～12 早稲田大学語学教育研究所 1984 年～2000 年 非売品
早稲田大学語学教育研究所での学習用に作成された教材です。日高の沙流川地方を中心に採録した様々な物語の録音カセットテープにローマ字表記のテキストがついています。アイヌ語原文についてはカタカナ表記の版もあります。

3 歌と踊りと楽器

アイヌの芸能について学ぶための基本的な文献や、歌や踊り、楽器の演奏などを視聴することができる資料などを紹介します。

① 概説書

- 金谷栄二郎、宇田川洋『ところ文庫 2 樺太アイヌのトンコリ』常呂町郷土研究同好会 1986 年
アイヌの五弦琴についての概説書です。主な研究書や古い文献を紹介し、五弦琴の構造や作り方、演奏方法などを掲載しています。
- 『アイヌ古式舞踊』財団法人アイヌ民族博物館 1993 年 800 円
白老町に伝承されている歌や踊りについての写真と説明文が掲載されています。
- 『岩波講座 日本の音楽・アジアの音楽 別巻 I』岩波書店 1989 年
アイヌ音楽の概説として、谷本一之氏による「アイヌ音楽」が掲載されています。
- 日本伝統音楽芸能研究会（編）『邦楽百科入門シリーズ CD ブックⅢ 日本の音 声の音楽 3』『同Ⅳ 日本の音 楽器の音楽』音楽之友社 1996 年 7,875 円
Ⅲには子守歌についての小林幸男氏による解説文が、Ⅳにも口琴についての同氏による解説文が掲載されています。付属の CD に、いずれも 1971 年におこなわれた国立劇場での公演から収録した曲が入っています。



② 専門書・調査報告書など

- 日本放送協会（編）『アイヌ伝統音楽』日本放送出版協会 1965年
→小冊子7 7ページ
- 谷本一之『アイヌ絵を聴く 変容の民族音楽誌』北海道大学図書刊行会 2000年 16,000円
アイヌの芸能の変容について考察した著作です。今世紀初頭のサハリンでの録音から現代までの録音を取めたCDが付いています。
- 知里真志保『アイヌに伝承される歌舞詞曲に関する調査研究』文部省文化財保護委員会 1960年（『知里真志保著作集2』平凡社 1973年 所収）
アイヌの歌、踊り、物語など、口頭で伝承され演じられるもの全般について論じたものです。

《教育委員会等が発行する報告書など》

- ▶ 門別町郷土史研究会（編）『沙流アイヌの歌謡 解説』門別町郷土史研究会 1966年
- ▶ 北海道アイヌ古式舞踊連合保存会（編）『北海道アイヌ古式舞踊・唄の記録』北海道アイヌ古式舞踊連合保存会 1987年
- ▶ 日本民俗舞踊研究会（編）『北海道アイヌ古式舞踊』日本民俗舞踊研究会 1987年
- ▶ 日本民俗舞踊研究会（編）『カラフトアイヌ古式舞踊』日本民俗舞踊研究会 1985年
- ▶ 北海道教育委員会（編）『アイヌ古式舞踊調査報告』Ⅰ～Ⅲ 北海道教育委員会 1990～92年



③ 視聴覚資料

《CD（コンパクトディスク）、カセットテープなど》

- 【CD】『日本音楽まるかじり』ビクター伝統文化振興財団 2003年 3,000円
サハリン（樺太）出身の伝承者による楽器の演奏や平取町二風谷の伝承者らによる歌のほか、物語の口演なども収録されています。音源は1970年代に発行されたLPレコードです。

- 【CD】『〈日本の民族音楽〉日本のハーモニー』キングレコード 1991年 2,854円
平取町二風谷で収録された歌3曲が収録されています。音源は1970年代に発行されたLPレコードに収録されていたものと同じです。

- 【CD】『〈日本の民族音楽〉 楽器玉手箱』キングレコード 1991年 2,854円
サハリン出身の伝承者から手ほどきを受けた演奏者による五弦琴の演奏と、阿寒町の伝承者による竹製の口琴の演奏が3曲収録されています。

- 【CD】『安東ウメ子・ムックリの世界』幕別町教育委員会 1994年
→小冊子7 17ページ

- 【CD】『シリピリカ 安東ウメ子・ムックリの世界 第2集』幕別町教育委員会 2002年 2,000円
上記の第2集として作成され、口琴の演奏のほか歌謡なども収録されています。

- 【CD】『アイヌのうた』ビクターエンタテインメント 2000年 1,995円
平取アイヌ文化保存会による各種の歌などが収録されています。

- 【CD】『ムックリの響き：アイヌ民族の口琴と歌』日本口琴協会 2001年 3,000円
阿寒町・弟子屈町・標茶町・浦河町それぞれの伝承者らによる口琴の演奏や歌が収録されています。

- 【CD】『昔話 ふるさとへの旅【北海道】』キングレコード →12ページ
鶴川町、本別町の伝承者らによる歌などが収録されています。

- 【CD】『アイヌラマチ（アイヌの魂）からのメッセージ』関東ウタリ会 2001年 3,000円
関東ウタリ会会員による五弦琴の演奏や歌が収録されています。
- 【CD】『ケウトウム ピリカ 一子どもたちと愉しむアイヌ舞踊―』パストラルレコード
（販売：游企画）2000年 2,500円（税込）
十勝地方に伝わる歌を中心に22曲を収録しています。主に学習教材用として製作されたものです。
- 【CD】『世界民族音楽大集成3 アイヌの歌と踊り』『同4 アイヌのユーカラ』キングレコード 1992年
シリーズ100枚組のうちの2枚です。『3』には白老町、阿寒町、平取町、静内町出身の伝承者らによる歌が、『4』には常呂町在住の伝承者による五弦琴の演奏ほか収録されています。音源は主に1970年代にLPレコードにされていたものですが、解説は新たに書き下ろされています。
- 【CD】『UNESCO COLLECTION Japan / Japon AINU Songs / Chants des Ainou』AUVIDIS / UNESCO 1993年
日高地方やサハリン出身の伝承者によるいろいろな種類の歌や口頭文芸などが14曲収録されています。1970年代に発行されたLPレコードをCD化したものです。
- 【カセットテープ】田村すず子『アイヌ語音声資料4 福満・鶴川の歌謡』（1987年）『同5 二風谷の昔話と歌謡・神謡』（1988年）『アイヌ語音声資料選集 韻文編』（1997年）
早稲田大学語学教育研究所
早稲田大学語学教育研究所が発行したアイヌ語の教材シリーズです（→12ページ）。沙流川流域の伝承者らによる歌などを中心に収録したカセットテープです。
- 【ビデオとCD】萱野茂『萱野茂のアイヌ神話集成』全10巻 ビクターエンタテインメント 1998年 →12ページ
10巻めに各種の歌などが収録されています。

《ビデオテープなど》

- 【ビデオ】『国際先住民年記念 第6回アイヌ民族文化祭』社団法人北海道ウタリ協会 1993年 8,000円(税込)
1993年に行なわれたアイヌ民族文化祭のもようを収録したものです。17の保存会(→小冊子7 22ページ)のうち15団体による歌や踊りを視聴することができます。
- 【レーザーディスク】藤井知昭(監修)『音と映像による新世界民族音楽大系 1. 北・東アジアⅠⅡ』ビクター+平凡社 1995年 25,486円
竹製の口琴や五弦琴の演奏、旭川の保存会による歌と踊り、旭川で行なわれた儀式の一部が収録されています。
- 【ビデオ】『北海道アイヌ古式舞踊の祭典』旭川市 2000年
2000年に開催された「ふるさと・旭川2000年記念事業」の一つとして行なわれた事業の中から「北海道アイヌ古式舞踊の祭典」ほかを収録したものです。旭川、浦河、静内、白糠、平取の各保存会が参加しています。旭川市図書館などで視聴できます。
- 【ビデオ】『十勝アイヌの唄と踊り』帯広市教育委員会 1993年
十勝地方に伝わる歌や踊り、儀礼のようすなどが記録されています。昭和44～46年にかけて記録された映画を再編集したビデオです。帯広市図書館などで視聴できます。



アナログ式のレコード盤や映画フィルムは、現在では限られた所蔵機関などで視聴できるのみですが、その中から伝統的な歌や踊りを記録した資料として参照されることの多いものを紹介します。いずれも 20 年以上前に製作されたものです。

◆レコード盤

- 知里真志保（監修）『アイヌ歌謡集 第 1 集 石狩 十勝 釧路 胆振 日高』（1948 年）『同 第 2 集 北見 天塩 釧路 胆振』（1949 年）日本放送協会放送文化研究所十日本コロムビア
1947 年と 1948 年に北海道の各地で収録された、合計 41 枚のシリーズになっている SP レコードです。
- 日本放送協会『樺太アイヌの古謡』日本放送協会 1951 年
サハリン出身の人々から 1951 年に採録した、合計 21 枚のシリーズになっている SP レコードです。
- 『アイヌの音楽』日本放送協会 放送業務局資料部音楽資料課 1967 年
NHK 札幌放送局が 1961～1962 年に北海道の各地で収録したのから 240 曲が選曲・編集されています。10 枚組の LP レコードです。
- 本田安次・萱野茂（監修）『日本の民俗音楽 別巻 アイヌ・オロッコ・ギリヤークの芸能』ビクター音楽産業株式会社 1976 年
釧路市、標茶町、平取町、旭川市、サハリンの出身者らによる伝統的な歌や楽器演奏などを収録した 3 枚組の LP レコードです。
- 田邊尚雄（録音・調査）、田邊秀雄（企画・監修）『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』東芝 EMI 1978 年
→小冊子 7 7 ページ

◆映画フィルム

- 『北方民族の楽器』NHK 放送文化財ライブラリー 1964 年 18 分モノクロ 16mm
- 知里真志保（監修）『サルンクルの舞踊』北海道放送 1958 年 10 分モノクロ 16mm
- 『アイヌの舞踊』北海道教育庁釧路教育局 1962 年 15 分カラー 8mm
- 『アイヌの古式舞踊』国際ナショナル映画 村田プロダクション 1952 年 20 分カラー 16mm
- 『ユーカラの世界』NHK 放送文化財ライブラリー（第一部 1963 年、第二部、第三部 1964 年）
30 分カラー 16mm
- 『阿寒アイヌ古式舞踊』ビデオタウン 1979 年 カラー 13mm

4 衣食住と暮らしの用具

アイヌの伝統的な衣食住などの暮らしの用具について、概説書のほか、写真をつけて詳しく説明した文献や、博物館などの所蔵資料を写真つきで解説した文献を紹介します。

① 概説書

《民具全般に関するもの》

- 萱野茂『アイヌの民具』すずさわ書店 1978年 10,500円
著者の生まれ育った平取町二風谷を中心に主に日高の沙流川筋で使われていた民具を写真と文章で説明しています。
- 佐々木利和『日本の美術 第354号 アイヌの工芸』至文堂 1995年 1,553円
東京国立博物館や海外の博物館が所蔵するアイヌの民具の写真を掲載しながら、アイヌの民具について工芸品としての側面に焦点をあわせて説明しています。

《衣服に関するもの》

- 児玉マリ「アイヌ民族の衣服と装飾品」『北海道の研究 7』清文堂 1985年
アイヌの衣服と装飾品についての比較的まとまった概説です。

《食事に関するもの》

- 萩中美枝ほか『日本の食生活全集 48 聞き書 アイヌの食事』農山漁村文化協会 1992年
北海道の浦河、静内、白老地方での聞き書きを中心とした概説書です。写真も多く、索引も付いています。『日本の食生活全集』全巻をまとめたCD-ROM版もあります（1997年 2,900円）
- 財団法人アイヌ民族博物館（編）『アイヌと自然シリーズ第2集 アイヌと植物〈食用編〉』財団法人アイヌ民族博物館 2004年 650円
帯広、静内、平取、白老地方の伝承者からの聞き取りにもとづく概説書で、写真も多く掲載されています。同じシリーズで「薬用編」もあります。（2004年 650円）

《住まいに関するもの》

- 萱野茂（文）、須藤功（写真）『チセ・ア・カラ』 未来社 1976 年

日高地方の平取町において伝統的な家屋を復元した記録にもとづくもので、実際に建物をつくっていくようすを、写真と解説文でたどることができます。

この記録を映画にしたものもあり、貸し出し及び販売が可能です

（民族映像文化研究所 03-3341-2865）

- 財団法人アイヌ民族博物館（編）『アイヌのすまい チセを考える』 財団法人アイヌ民族博物館 1998 年 1,200 円

白老町のポロトコタンに復元された家屋をめぐる 1997 年におこなわれたシンポジウムの記録です。家屋の建築過程などについての報告があります。

② 図録、目録、報告書など

《民具全般に関するもの》

- 東京国立博物館（編）『東京国立博物館図版目録・アイヌ民族資料篇』 東京美術 1992 年 8,000 円（税別）

同博物館が所蔵する 1,000 件余りのアイヌ民族資料を写真つきで紹介しています。

- 北海道立アイヌ民族文化研究センター（編）『バラートシ バログ コレクション調査報告書』 北海道立アイヌ民族文化研究センター 1999 年 1,340 円

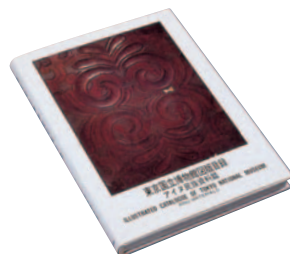
1914（大正 3）年に北海道とサハリンでアイヌの民具を調査した、ハンガリーの人類学者バラートシ・バログ・ベネデクが収集した資料のうちブダペスト民族学博物館が所蔵するアイヌ民族資料を、当センターが借り受け調査した報告書です。英語版もあります（1,210 円）。どちらも北海道行政情報センター（札幌市中央区北 3 条西 7 丁目、電話 011-241-7979）で販売しています。

- Spb-アイヌプロジェクト調査団（編）『ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵アイヌ資料目録』 草風館 1998 年 9,000 円（税別）

ロシアのサンクトペテルスブルクにある同博物館が所蔵するアイヌ民族資料のうち約 1,400 点についての調査報告書です。日本国内の博物館と比べ、資料の収集地などのデータが比較的はっきりしていること、古い時代に収集された資料やサハリンの資料が多く含まれていることなどが特徴です。

《衣服に関するもの》

- 静内町・北海道ウタリ協会静内支部（編）『静内地方のアイヌ衣服』 静内町・北海道ウタリ協会静内支部 1993 年
静内地方の衣服について、写真と図版を使ってくわしく説明されています。
- 財団法人アイヌ民族博物館（編）『アイヌの衣服文化 着物の地方的特徴について』 財団法人アイヌ民族博物館 1991 年
各地のアイヌの衣服を集めて開催された展示の図録です。
- 小川早苗・かとうまちこ『アイヌ文様を曾祖母から継いで五代』 アイヌ文化伝承の会手づくりウタラ 1996 年 2,500 円
- 天理大学・天理教道友社（編）『ひとものこころ 天理大学附属天理参考館 アイヌのきもの』 天理教道友社 1991 年 12,600 円
天理大学附属天理参考館が所蔵するアイヌの衣服について、写真・図版のほか解説文を載せています。大型の本なので写真も大きく見やすくなっています。
- 北海道教育委員会（編）『アイヌ衣服調査報告書』 1～4 北海道教育委員会 1986～1989 年
北海道教育委員会における調査の報告書です。1は北海道、2～4はサハリン（樺太）についての資料を掲載しています。



5 信仰と儀礼

アイヌの信仰について学ぶことのできる文献や、実際の儀式のようすや祈り言葉を記録した文献や音声資料を紹介します。

① 概説書・研究書

- 札幌学院大学『アイヌ文化に学ぶ』札幌学院大学生協同組合 1990年
→ 3ページ
- 別売カセットテープ
→ 11ページ
静内町出身の葛野辰次郎さんがカムイとアイヌの関係や祈り言葉について述べています。別売のカセットテープでは葛野さんによるアイヌ語の祈り言葉を聞くことができます。
- 中川裕『アイヌの物語世界』平凡社（平凡社ライブラリー）1997年
→ 6ページ
口頭文芸に関する概説書ですが、物語に登場するカムイについてわかりやすく解説されています。
- 萱野茂『五つの心臓を持った神 アイヌの神作りと送り』小峰書店 2003年 3,150円
日高地方の平取町に生まれ育った著者による、カムイを送るということ（→小冊子5 13ページ）や人の葬儀についての考え方や儀式のしきたりなどをまとめた論文です。
- 久保寺逸彦『アイヌ民族の宗教と儀礼 久保寺逸彦著作集1』草風館 2001年 7,140円
葬儀や家を建てるときなどのさまざまな儀式のほか、儀式に用いる木幣や酒などに関する専門的な論文を集めた著作集です。



② 儀式の記録・報告書など

- 財団法人アイヌ民族博物館『伝承事業報告書 2 イヨマンテ 日川善次郎翁の伝承による』
財団法人アイヌ民族博物館 2003 年

日高の沙流地方出身の日川善次郎さんの伝承を基本に、儀式の学習・伝承と記録を目的として1989、90年に行われたクマのカムイを送る儀式（→小冊子5 13 ページ）の報告書です。初版では2分冊になっていたものを合本して復刻されたものです。

- 財団法人アイヌ民族博物館『伝承事業報告書 ポロチセの建築儀礼』財団法人アイヌ民族博物館 2000 年

白老町のアイヌ民族博物館において1996年に復元家屋が火災に遭った際の儀式と、その後家屋を新たに復元したときの一連の儀式のようすを記録した報告書です。



6 地名

アイヌ語地名を含む北海道の地名について調べることのできる文献や、アイヌ語地名について学ぶための概説書、専門書などを紹介します。

① 北海道の地名に関する辞典類

- 山田秀三『北海道の地名 アイヌ語地名の研究 山田秀三著作集別巻』草風館 2000年 6,300円

アイヌ語地名研究の第一人者である山田秀三氏が、自身の研究に基づき、北海道の主な地名についてまとめた本です。過去の記録や文献についても広く取り上げ、それらの出典についても明記されています。

- 『角川日本地名大辞典 1 北海道』角川書店 1987年

上・下の2巻組です。上巻では北海道の地名約15,000項目を50音順に説明し、下巻では市町村ごとに主な地名など約7,000項目について説明しています。

- 『日本歴史地名大系 1 北海道の地名』平凡社 2003年 34,000円（税別）

昔の地名に関する解説に重点を置いた辞典です。北海道の主な地名など約5,400項目を取り上げているほか、北海道の歴史と地名に関する重要な項目については、特にページを多く使って説明していることが特徴です。



② アイヌ語地名に関する入門書・概説書

- 北海道環境生活部総務課アイヌ施策推進室（編）『アイヌ語地名ハンドブック』（増刷：財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構） 2003 年
アイヌ語地名のあらましを説明したパンフレットです。
- 山田秀三『アイヌ語地名を歩く』 北海道新聞社 1986 年 1,650 円
著者が自身のアイヌ語地名研究の歩みなどを振り返って、その思い出や逸話などを綴ったものです。新聞に掲載したもので、一つ一つの話は短いですが、アイヌ語地名の調べ方や考え方に関する大事な話や興味深い話題がたくさん含まれています。
- 知里真志保『アイヌ語入門 —とくに地名研究者のために—』北海道出版企画センター（復刻版）1985 年（初版 1956 年）1,274 円
→ 8 ページ
- 知里真志保『地名アイヌ語小辞典』北海道出版企画センター（復刻版）1984 年（初版 1956 年）1,019 円
「入門」「小辞典」と題していますが、一般的な意味での初心者向けの入門書というよりは、アイヌ語地名を調べ考えるために大切な問題や考え方を論じた本と言えます。復刻版には、どちらも山田秀三氏による簡単な紹介文が付いています。



③ 専門書・資料集

- 山田秀三『アイヌ語地名の研究 山田秀三著作集』（全4冊）草風館（新装版）1995年 各6,300円

山田秀三氏の1982年ごろまでの主な著作のほか、新たに書き下ろした論文を全4冊にまとめたものです。著者のアイヌ語地名研究の方法や業績をよく知ることができます。

収録されている主な著作は、次のとおりです。

「東北と北海道のアイヌ語地名」（初版1957年）

山田秀三による最初の単行本です。北海道と東北のアイヌ語地名を比較検討しています。

「北海道の川の名」（初版1971年）

北海道の主な河川の名前について説明しています。

「札幌のアイヌ地名を尋ねて」（初版1966年）

札幌の主な地名を紹介しています。考え方や調べ方の道筋が比較的詳しく述べられています。

「アイヌ語地名分布の研究」（書き下ろし）

同じような地名や地名に関係する言葉を手がかりに、地名の分布やその特徴を検討しています。

- 山田秀三『東北・アイヌ語地名の研究』 草風館 1993年 6,300円

主に上記の著作集の初版（1982年）以後の論文や、東北のアイヌ語地名などに関する著作集未収録の論文などをまとめたものです。

- 山田秀三『アイヌ語地名の輪郭』 草風館 1995年 6,300円

これまでの単行本に未収録の著作をまとめたもので、晩年に地名研究の方法や著者が長年抱いてきた疑問などについてまとめた論文などが収録されています。

- 山田秀三（監修）、佐々木利和（編）『アイヌ語地名資料集』 草風館 1988年 25,000円

北海道の地名に関する解釈を記した文献としては古い時期のものとしてされる 秦 穂麻呂『東蝦夷地名考』（→小冊子98ページ）をはじめ、松浦武四郎（→小冊子98ページ）による地図など、江戸時代から戦後までのアイヌ語地名に関する基本的かつ重要な資料や文献をまとめた資料集です。収録された資料に関する解説も付いています。



7 歴史と現在

アイヌの歴史や現在行われているいろいろな活動については、多くの文献などが出版されています。

ここでは、普及啓発用に作成されたパンフレット類のうち、学習のための概説として発行されているもの、北海道の施策の概要などが説明されているものなどを紹介します。

- 北海道環境生活部アイヌ施策推進グループ『アイヌ民族を理解するために』北海道環境生活部アイヌ施策推進グループ 2004年

北海道環境生活部アイヌ施策推進グループが作成している全36ページのパンフレットです。アイヌの文化と歴史に関する概要のほか、北海道及び国が進めている各種の施策の説明とその参考資料などをまとめています。

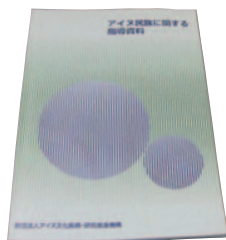
- 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構『アイヌ民族 歴史と現在』財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 2001年

アイヌの歴史と文化に関する副読本で、古代から現代までの文化と政治・社会のあらましを時代ごとにとりあげています。小学生用と中学生用があり、全国の学校に配布されています。

このほか、その下敷きとなった指導資料も発行されています（『アイヌ民族に関する指導資料』財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 2000年）。

- 【ビデオ】社団法人北海道ウタリ協会（企画・発行）『新・共生への道 日本の先住民族・アイヌ』 2000年 3,500円

アイヌの最大組織である社団法人北海道ウタリ協会による啓発用ビデオです。アイヌの歴史や同協会の活動と現在の状況などについて説明されています。



[2] 施設

1 博物館など

① 民具などの資料を展示している施設

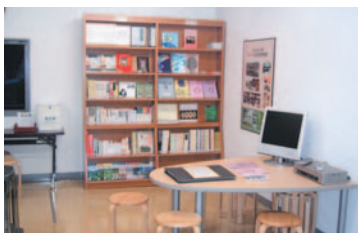
北海道内では、多くの博物館がアイヌの民具などの展示を行っています。また道外でも、アイヌの民具などを展示しているところがあります。

ここでは、これらの施設の中から、見学の手引きになるような所蔵品の解説図録が刊行されているところ、専門の学芸員や研究者がいるところ、貴重な資料を所蔵している施設、体験学習を実施していたり使いやすい学習用施設を有している施設のいくつかを紹介します。

*開館日や時間などの詳しいことについては、それぞれの施設にお問い合わせください。

《道内》

- 北海道開拓記念館：札幌市厚別区厚別町小野幌 電話 011-898-0456
- 北海道立アイヌ総合センター：札幌市中央区 かでる2・7（7階） 電話 011-221-0462
*資料展示室ではアイヌの歴史と文化に関する展示を見ることができます。
併設されている図書情報資料室では、この小冊子で紹介している主な文献や視聴覚資料を閲覧・視聴することができます。
- 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園：札幌市中央区 電話 011-251-8010
- 札幌市アイヌ文化交流センター：札幌市南区小金湯 電話 011-596-5961
- 財団法人アイヌ民族博物館：白老町若草町 電話 0144-82-3914
- 平取町立二風谷アイヌ文化博物館：平取町二風谷 電話 01457-2-2892
- 萱野茂二風谷アイヌ資料館：平取町二風谷 電話 01457-2-3215



アイヌ民族博物館学習おうえん室
アイヌ文化に関する図書や視聴覚資料を
閲覧・視聴することができます。

- 苫小牧市博物館：苫小牧市末広町 電話 0144-35-2550
- 市立函館博物館：函館市青柳町 電話 0138-25-5480
- 函館市北方民族資料館：函館市末広町 電話 0138-22-4128
- 帯広百年記念館：帯広市緑ヶ丘 電話 0155-24-5352
- 釧路市立博物館：釧路市春湖台 電話 0154-41-5809
- 旭川市博物館：旭川市神楽 電話 0166-69-2004
- 北海道立北方民族博物館：網走市潮見 電話 0152-45-3888
- 北方少数民族資料館ジャッカ・ドフニ：網走市大曲 電話 0152-43-1149

《道外》

- 青森市歴史民俗展示館「稽古館」：青森県青森市大字浜田 電話 0177-39-6422
- 東北歴史資料館：宮城県多賀城市浮島 電話 022-368-1010
- 東京国立博物館：東京都台東区上野公園 電話 03-3822-1111
- 国立民族学博物館：大阪府吹田市千里万博公園 電話 06-6876-2151
- 天理大学附属天理参考館：天理市守日堂町 電話 0743-63-1515
- アイヌ文化交流センター：東京都中央区八重洲 電話 03-3245-9831

* 民具の展示などは行っていないが、この小冊子で紹介した文献や視聴覚資料を閲覧することができます。

日本国外の資料について

海外の資料は、そのほとんどが欧米諸国の博物館などにあります。これらのアイヌ関係資料の点数は、確認されているだけでも、ロシアとヨーロッパ諸国に約10,100点、北米には約3,200点にもものぼります。これらの資料の多くは、かつてそれらの国々の研究者らが調査し収集したもので、日本国内のもの比べると、クリル（千島）列島やサハリン（樺太）のものを多く含んでいたり、収集した地域や時期が比較的はっきりと記録されていることが特徴です。



ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館

② 物語や歌・踊りなどを視聴できる施設

博物館などの施設で、アイヌ口頭文芸の音声や映像を実際に視聴することができる施設をいくつか紹介します。

《道内》

- 北海道立アイヌ総合センター → 28 ページ

展示室内に道内各地の保存会（→小冊子7 22 ページ）による踊りを視聴できる設備があります。隣接の図書情報室では、昭和 61～平成元年度に製作された『アイヌ古式舞踊』1～4（各 50 分）、「アイヌ民族文化祭（北海道ウタリ協会主催）」の録画テープなどで歌や踊りを視聴できますが、こちらは事前に連絡が必要です。

- 財団法人アイヌ民族博物館 → 28 ページ

白老町に伝わる歌や踊りを見学することができます。博物館内の学習室では、アイヌ文化に関する図書や視聴覚資料を閲覧・視聴することができます。

- 平取町立二風谷アイヌ文化博物館：沙流郡平取町字二風谷 電話 01457-2-2892

展示室内で口頭文芸や歌・踊りのビデオを視聴することができます。

- 萱野茂二風谷アイヌ資料館：沙流郡平取町字二風谷 電話 01457-2-3215

館内で館長の萱野茂氏の著作である CDなどを聴くことができます。

- 苫小牧市博物館：苫小牧市末広町 電話 0144-35-2550

展示室内に口琴の演奏を聴くことのできる設備があります。

- 北海道立北方民族博物館：網走市字潮見 電話 0152-45-3888

展示室内にある情報検索ボックスという設備で、サハリンの口琴や五弦琴の演奏などを聴くことができます。

《道外》

- **アイヌ文化交流センター**：東京都中央区八重洲 電話 03-3245-9831
アイヌの口頭文芸や歌・踊りに関するビデオテープ等を視聴することができます。
- **国立歴史民俗博物館**：千葉県佐倉市城内町 電話 043-486-0123
第5展示室に設置されたビデオ機器と、ビデオボックスというコーナーとで、歌や口頭文芸を視聴することができます。
- **国立劇場調査養成部資料課**：東京都千代田区隼町 電話 03-3265-7411
国立劇場での公演のプログラムなどを閲覧できるほか、公演を収録したビデオを視聴することができます。視聴には事前の連絡が必要です。
- **東京芸術大学音楽学部小泉文夫記念資料室**：東京都台東区上野公園 電話 03-5685-7725
音楽学者の小泉文夫氏による調査録音資料のうち、アイヌの芸能に関するもの一部をインターネット (<http://www.geidai.ac.jp/labs/koizumi/>) で聴くことができます。
- **国立民族学博物館**：大阪府吹田市千里万博公園 電話 03-3467-4527
ビデオテークという装置で、装置で世界の民族文化の映像記録を視聴できるようになっています。その中にアイヌ文化に関して約30点のプログラムが含まれており、口頭文芸や五弦琴の作り方などのプログラムを視聴することができます。
- **財団法人大阪人権博物館(リバティおおさか)**：大阪府大阪市浪速区 電話 06-6561-5891
ビデオのコーナーで、平取町に伝わる歌や踊りなどを視聴することができます。



国立民族学博物館のビデオテーク

2 展示会・体験学習など

近年、民具の製作を続ける人々による個展や、教室の作品展なども各地で開かれるようになってきています。1で紹介した博物館などでも、通常の展示のほかに、アイヌの民具を取り上げた特別展などが開催されることがあります。こうした特別展のときには、解説付きの図録やパンフレットが発行されることもあります。



北海道アイヌ伝統工芸展

民具の作り方などを実際に学ぶことのできる講習会なども、各地で開かれるようになりました。ここでは、一般向けの体験学習を行っている施設や、一般の希望者を対象に毎年定期的に講習会を行っている施設などを紹介します。具体的な日程や内容などはそれぞれの機関にお問い合わせください。

- 北海道立アイヌ総合センター：札幌市中央区（→ 30 ページ）
- 財団法人アイヌ民族博物館：白老町若草町（→ 30 ページ）
- 阿寒アイヌ工芸協同組合：阿寒町阿寒湖温泉 電話 0154-67-2727
- ヤイユーカーの森：札幌市南区 電話 011-592-1748

その他本書の作成にあたっての参考文献

1 はなす

- 鳥居龍蔵『千島アイヌ』吉川弘文館（1903）
- 萩中美枝『アイヌの文学 ユーカラへの招待』（1980）
- 知里真志保『知里真志保著作集 全6巻』平凡社（1973:1993 復刊）
- 田村すず子『アイヌ語入門』早稲田大学語学教育研究所（1978）
- 田村すず子『アイヌ語基礎語彙』同上（1983）
- 田村すず子『アイヌ語入門解説』同上（1984）
- 竹内理三編『角川日本地名大辞典1 北海道』上・下巻 角川書店（1987）
- 扇谷昌康・島田健一『沙流郡のアイヌ語地名I』北海道出版企画センター（1988）
- 知里真志保『アイヌ民譚集』岩波書店（1981）
- 中川裕『ヨーロッパ人によるアイヌ語調査の歴史』（『アイヌ文化』第12号 1987）

2 着る

- 兒玉作左衛門「江戸時代初期のアイヌ服飾の研究」『北方文化研究報告』20 輯 1965 年 12 月
- 犬飼哲夫「千島アイヌの鳥皮衣」『北方文化研究報告』18 輯 1963 年 4 月
- 北海道教育委員会（編）『アイヌ民俗資料調査報告』北海道教育委員会 1968 年

3 食べる

- アイヌ民族博物館（編）『アイヌと自然シリーズ 第3集 アイヌと植物〈樹木編〉』アイヌ民族博物館 1993 年 850 円
- 計良智子『アイヌの四季—フチの伝えるところ』明石書店 1995 年 2,100 円
- 知里真志保『知里真志保著作集 別巻Ⅰ 分類アイヌ語辞典 植物編・動物編』平凡社 1976 年
- 知里真志保『樺太アイヌの生活』『知里真志保著作集3』平凡社 1973 年
- 林善茂『アイヌの農耕文化 考古民俗叢書〈4〉』慶友社 1969 年
- 林善茂「生活」『アイヌ民族誌 上』第一法規出版 1969 年
- 北海道教育庁社会教育部文化課／北海道教育庁生涯学習部文化課（編）『アイヌ民俗文化財調査報告書(アイヌ民俗調査)』1～16 北海道教育委員会 1982～1997 年
- 山本正（編）『近世蝦夷地農作物年表』北海道大学図書刊行会 1996 年 2,940 円

4 住まい

- 内田祐一「帯広・伏古におけるチセと附属施設について」アイヌ民族博物館(編)『アイヌ民族博物館研究報告』第2号 財団法人白老民族文化伝承保存財団 1989年
- 鷹部屋福平『アイヌの住居』彰國社 1943年
- 山本祐弘『樺太アイヌの住居』相模書房 1943年
- 久保寺逸彦「アイヌの建築儀礼について」北海道大学文学部附属北方文化研究施設(編)『北方文化研究』第3号 北海道大学 1968年(『久保寺逸彦著作集1 アイヌ民族の宗教と儀礼』草風館 2002年所収)
- 北海道教育庁社会教育部文化課/北海道教育庁生涯学習部文化課(編)『アイヌ民俗文化財調査報告書(アイヌ民俗調査)』1～17 北海道教育委員会 1982～1998年
- 静内町教育委員会(編)『静内町アイヌ民俗資料館』静内町 1984年(1997年より改訂版『静内地方のアイヌ文化』)
- 萱野茂『アイヌの民具』すずさわ書店 1978年
- 鷹部屋福平/高倉新一郎/犬飼哲夫「住居」アイヌ文化保存対策協議会(編)『アイヌ民族誌』第一法規出版 1969年
- 高倉新一郎「アイヌ家屋の調査」北海道教育委員会(編)『アイヌ民俗資料調査報告』北海道教育委員会 1968年

5 折る

- 久保寺逸彦『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』岩波書店 1977年
- 久保寺逸彦「沙流アイヌのイナウに就いて」金田一博士米寿記念論集編集委員会『金田一博士米寿記念論集』三省堂 1971年(『久保寺逸彦著作集1 アイヌ民族の宗教と儀礼』草風館 2002年所収)
- 財団法人アイヌ民族博物館(編)『イヨマンテー熊の霊送り一報告書』財団法人アイヌ民族博物館 1990年
- 財団法人アイヌ民族博物館(編)『イヨマンテー熊の霊送り一報告書Ⅱ』財団法人アイヌ民族博物館 1991年
- 静内町教育委員会(編)『静内町アイヌ民俗資料館』静内町 1984年(1997年より改訂版『静内地方のアイヌ文化』)
- 知里真志保『知里真志保著作集 第1巻』平凡社 1973年
- 知里真志保『知里真志保著作集 第2巻』平凡社 1973年
- 知里真志保『知里真志保著作集 別巻Ⅰ 分類アイヌ語辞典 植物編・動物編』平凡社 1976年
- 知里真志保『知里真志保著作集 別巻Ⅱ 分類アイヌ語辞典 人間編』平凡社 1976年
- 名取武光『アイヌと考古学(一) 名取武光著作集Ⅰ』北海道出版企画センター 1972年

- 名取武光『アイヌと考古学(二) 名取武光著作集Ⅱ』北海道出版企画センター 1974年
- 中川裕『アイヌ語をフィールドワークする』大修館書店 1995年
- 北の生活文庫企画編集会議(編)『北の生活文庫 第4巻 北海道の家族と人の一生』北海道新聞社 1998年
- 北海道教育庁社会教育部文化課／北海道教育庁生涯学習部文化課(編)『アイヌ民俗文化財調査報告書(アイヌ民俗調査)』1～18 北海道教育委員会 1982～1999年
- アイヌ文化保存対策協議会『アイヌ民族誌』第一法規出版 1969年
- 奥田統己「カムイ」石井米雄・千野栄一(編)『世界のことば 100 語辞典 アジア編』三省堂 1999年

6 口頭文芸

- 萩中美枝『アイヌの文学 ユーカラへの招待』北海道出版企画センター 1980年
- 萩中美枝(執筆)・藤本英夫ほか(編)『サコロベの世界』札幌テレビ放送 1978年
- 萩中美枝「アイヌ英雄叙事詩サコロベ」『国文学 解釈と教材の研究』44巻14号 1999年
- 浅井亨(編)『日本の昔話 2 アイヌの昔話』日本放送出版協会 1972年
- 藤村久和「〈神語り〉〈昔語り〉の新しい視座 アイヌ」『国文学 解釈と鑑賞』45巻12号 1980年
- 奥田統己「研究史」『研究文献目録』[アイヌ口頭文芸]『古代文学講座 第12巻』勉誠社 1998年
- 荻原眞子『北方諸民族の世界観—アイヌとアムール・サハリン地域の神話・伝承』草風館 1996年
- 北海道教育庁社会教育部文化課／北海道教育庁生涯学習部文化課(編)『アイヌ民俗文化財調査報告書(アイヌ民俗調査)』1～18 北海道教育委員会 1982～1999年
- 中川裕「アイヌ物語文学ジャンル名の分布と歴史」『言語学林 1995-1996』三省堂 1996年
- 佐藤知己「近隣諸民族との比較からみた Yukar」『北海道教育大学紀要 第1部B 社会科学編』45巻1号 1994年
- アイヌ文化保存対策協議会(編)『アイヌ民族誌』第一法規出版 1969年

7 芸能

- 小林幸男・小林公江「北海道アイヌの歌の諸相」『北海道アイヌ古式舞踊』日本民俗舞踊研究会 1987年
- 千葉伸彦「アイヌの歌の旋律構造について」『東洋音楽研究』61 東洋音楽学会 1996年
- 千葉伸彦「藤山ハルのトンコリ演奏について(1)」『北海道東部に残る樺太アイヌ文化Ⅰ』常呂町樺太アイヌ文化保存会 1996年
- 直川礼緒「日本の口琴の源流」小島美子・藤井知昭(編)『日本の音の文化』第一書房 1994年
- 谷本一之「アイヌの五弦琴」『北方文化研究報告 第13輯』北海道大学 1958年
- 谷本一之「アイヌの口琴」『北方文化研究報告 第15輯』北海道大学 1960年
- 谷本一之「アイヌ音楽音組織の研究」『北海道教育大学紀要 第一部C』17巻2号 1966年

- 富田歌萌「アイヌの弦楽器“トンコリ”」『北海道の文化』10 北海道文化財保護協会 1966年
- 近藤鏡二郎・富田歌萌「アイヌの弦楽器“トンコリ”」『音楽学』9巻(1) 音楽学会 1963年
- 萩中美枝「アイヌの歌謡」『口承文藝研究』19 日本口承文芸学会 1996年
- 知里真志保「アイヌの歌謡 第一集」『知里真志保著作集 2』平凡社 1973年(初出1958年)
- 本田安次「アイヌの芸能」『本田安次著作集 日本の伝統芸能 第二十巻』錦正社 2000年(初出1977年ほか)
- 久保寺逸彦「アイヌの音楽と歌謡」『民族学研究』5巻5・6号 日本民族学会 1939年(『久保寺逸彦著作集 2 アイヌ民族の文学と生活』草風館 2004年所収)
- 田邊尚雄「樺太土人の音楽」『島国の唄と踊』磯部甲陽堂 1927年
- 河野広道『アイヌの踊』檢書房 1956年
- 北海道開拓記念館(編)『民族調査報告書 資料編』I・II 北海道開拓記念館 1973年
- アイヌ文化保存対策協議会(編)『アイヌ民族誌』第一法規出版 1969年

8 民具

- 佐々木利和『アイヌ文化誌ノート』吉川弘文館 2001年
- アイヌ文化保存対策協議会(編)『アイヌ民族誌』第一法規出版 1969年
- 北海道教育委員会(編)『アイヌ民俗資料調査報告』北海道教育委員会 1968年
- 日本民具学会(編)『日本民具辞典』ぎょうせい 1997年

9 地名

- 服部四郎「カラフト西海岸北部地名の共時論的研究」佐々木弘太郎『樺太アイヌ語地名小辞典』みやま書房 1969年
- 切替英雄「類出アイヌ語地名の形態論的構造」『アイヌ語地名研究』3 アイヌ語地名研究会 2000年
- 児島恭子「アイヌ語地名の世界」『アイヌの歴史と文化 I』創童舎 2003年
- 高倉新一郎編著『北海道古地図集成』北海道出版企画センター 1987年
- 高木崇世芝『北海道の古地図』五稜郭タワー株式会社 2000年
- 永田方正『北海道蝦夷語地名解』(初版の復刻版)草風館 1984年

追加写真

*これらの写真は、小冊子1～9に新たに追加した写真です。



小冊子 2 10 ページ オヒヨウの内皮を剥がしているところです。

[戻る](#)



小冊子2 12 ページ 採取時期のイラクサの様子（葉がすっかりなくなっています。）

[戻る](#)



小冊子2 25 ページ左 着物の全体です。

[戻る](#)



小冊子2 25 ページ右下 着物の全体です。

戻る



小冊子2 写真 17-2 サハリンの帽子です。

[戻る](#)



小冊子3 写真7-2 北海道の鉾先です。

[戻る](#)



小冊子3 写真 12-2 秋になって、先端の緑色の部分（肉穂）が赤くなると採取します。

戻る



小冊子3 写真 15-2 オオウバユリの若芽。

小冊子3 写真 15-3 採取したオオウバユリ。下のほうの白い丸い部分（鱗茎）からデンプンを取ります。

戻る



小冊子4 写真 19-2 出入り口の小屋を外から写した写真です。ゴザを編む道具や、臼などが置かれているのが見えます。(1934年撮影、場所は平取町と考えられます。)

戻る



小冊子 5 写真 15-2 祭壇（阿寒町：昭和 29 年）

[戻る](#)



小冊子 8 写真 6-2 木綿を素材にした衣服（前側）

[戻る](#)



小冊子8 写真 11-2 女性の帯（サハリン）（裏側）

[戻る](#)



小冊子 8 写真 12 帯部分の拡大

[戻る](#)



小冊子8 写真 21-2 酒を捧げるためのへら（裏側）

[戻る](#)

- ◆ 発行 平成17年3月
- ◆ 編集 北海道立アイヌ民族文化研究センター
HOKKAIDO AINU CULTURE RESEARCH CENTER
〒060-0001 札幌市中央区北1条西7丁目 プレスト1・7 5階
TEL 011-272-8801 FAX 011-272-8850
<http://www.pref.hokkaido.jp/kseikatu/ks-ambkc/hacrc/index.htm>

■ 表紙写真

- 1 オンネトー
- 2 オヒョウの木
- 3 春の野草
- 4 ハシドイ（ドスナラ）
- 5 美瑛／朝霧の丘
- 6 噴火湾
- 7 タンチョウヅル
- 8 サハリンの東海岸
- 9 利尻岳